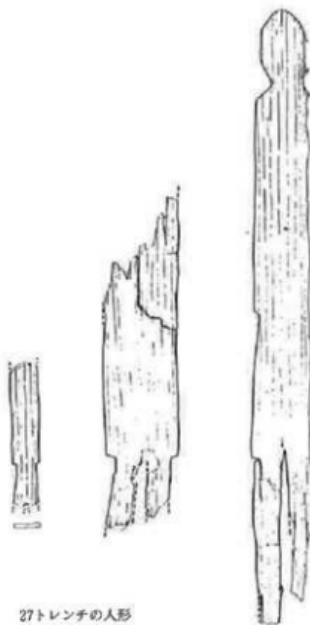
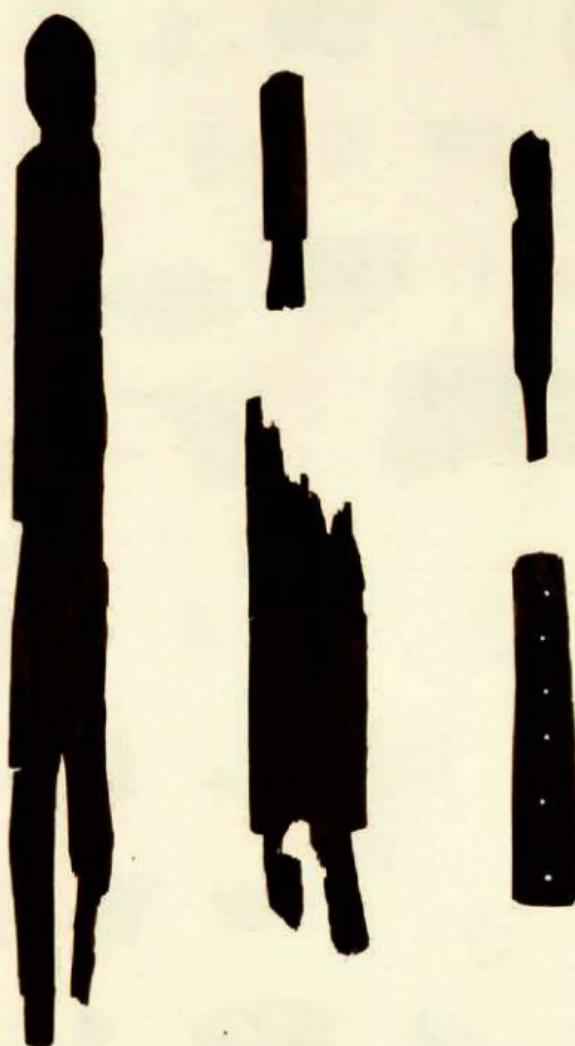


元総社跡神遺跡 VIII

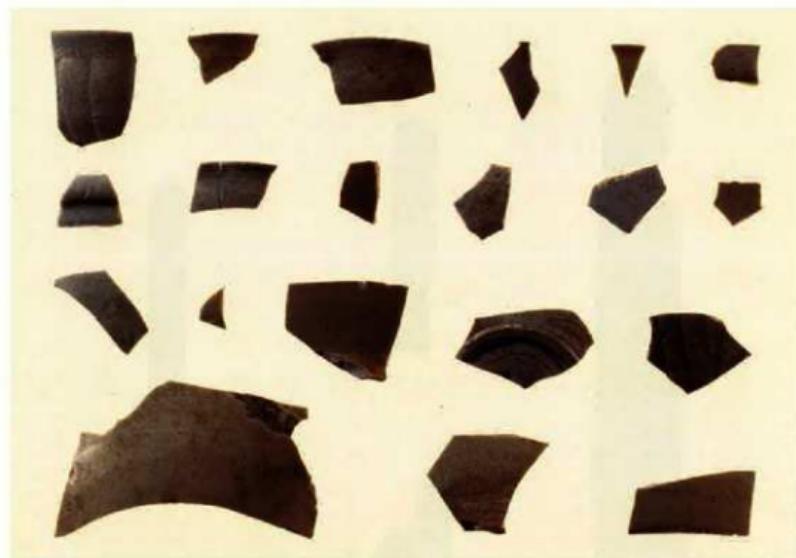


27 トレンチの人物

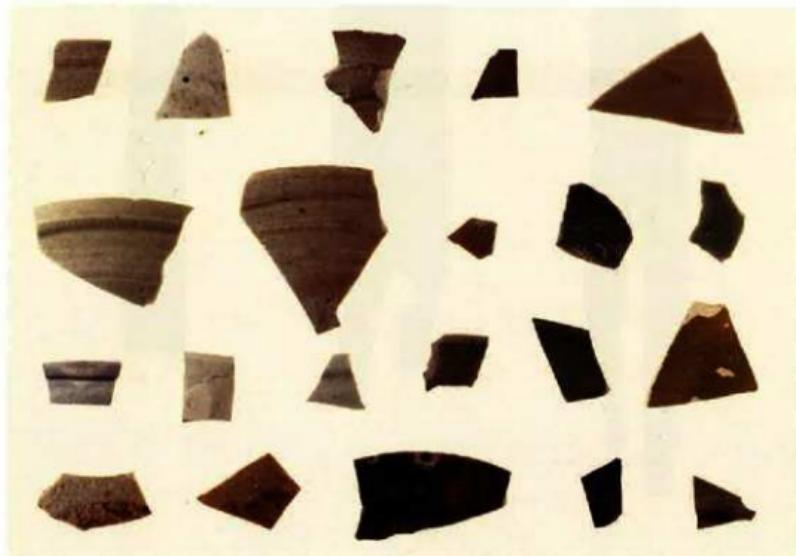
前橋市埋蔵文化財発掘調査団



1. 27トレンチ出土の木製品（古墳・平安時代）



1. Yトレンチ出土の白磁（平安時代）



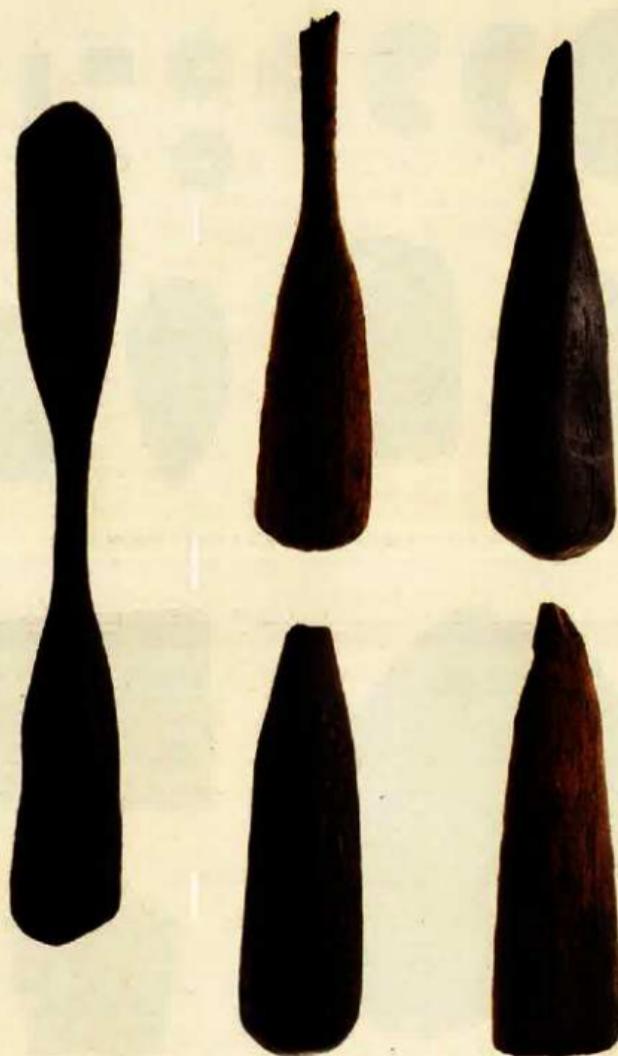
2. Y・Z・27トレンチ出土の白磁・青磁・緑釉（平安時代）



1. Y・27トレンチ出土の玉類（縄文・古墳・平安時代）



2. Z・27トレンチ出土の文字瓦（平安時代）



1. Yトレンチ出土の豎杆（古墳時代）



I. Yトレンチの古墳時代水田址

序

前橋市は、北に関東平野を一望できる雄大な赤城山をいだき、西に榛名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川の清流が市街地を貫流する、水と緑にあふれた美しい県都であります。

遠く古墳文化の時代には東国の中でも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると元總社に上野國府が置かれ、山王庵寺、國分二寺が立ち並ぶ一大政治文化圏が形成されました。さらに近世には、「関東の華」と言われた厩橋城とその城下町、そして近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきたように、前橋には歴史が織り成した様々な情景が満ちています。

市の西部にあたる元總社地区は、古代上野國の中心地域であり、数々の歴史的遺産が残されています。しかし、時代の趨勢から土地区画整理事業が避けられない事となりました。そこで、その一環として、事前の発掘調査をする運びとなり、今年で8年次を迎えました。

今年度の調査では、縄文時代から中世という5,000年間にわたり長い年月の文物が幾重にも重なって発見されました。古墳時代と平安時代の水田跡は、火山の噴火や洪水によって埋もれたものでした。当時の人々の苦労の様子をさまざまと見せつけられました。また、古墳時代の泥炭層の中からは、当時の農具や弓などの武器、日常生活の容器類をはじめ柱などの建築材料が、多數発見されました。また、平安時代の層からも、土器や木器、獸骨のほか、貿易によって中國大陸からもたらされた白磁・青磁が多數みつかりました。特に、木器の中で「人形」は注目されるもので、「ハラエ」や「ミソギ」といった公的な行事が推定され、国府とも関連が想定されます。

今後、調査に伴う幾多の遺物等や記録資料に検討を加え、社会教育・学校教育の場に充分活用していく所存であります。

最後に、区画整理第1課の担当者及び元總社第三明神地区区画整理審議委員や地権者の方々、発掘作業に従事して下さった作業員の方々、遺物の整理にあたり指導助言いただいた関係機関や各方面の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成2年3月20日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

團長 二瓶 益巳

例 言

1. 本報告書は、前橋市都市計画事業元總社（西部第三明神）地区上地区面整理事業 施工者 前橋市 代表者 前橋市長 藤嶋清多が実施する区画整理事業に係る元總社 明神遺跡発掘調査報告書である。
 2. 遺跡は、群馬県前橋市元總社町2,067-2番地ほかに所在する。
 3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 二瓶益巳が施工者 前橋市 代表者 前橋市長 藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。
- 調査担当および調査期間は以下の通りである。
- | | |
|------------|-----------------------------|
| 発掘・整理担当者 | 前原 豊・井上敏夫（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係） |
| 試掘・発掘調査期間 | 平成元年4月28日～平成元年12月27日 |
| 整理・報告書作成期間 | 平成元年1月5日～平成2年3月15日 |
4. 本書の原稿執筆・編集は前原・井上が行った。整理作業をはじめ図版作成には、岩木 操・大田一郎・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅道子・湯浅たま江の協力があった。
 5. 下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。（敬称略）
歴史：宮崎重雄（群馬県立大間々高等学校） 地質・地形：パリノ・サーヴェイ株式会社
プラント・オペール分析：街古環境研究所 民俗：板橋春太（日本民俗学会会員）
白磁・青磁：大西雅広（神奈川県埋蔵文化財調査事業団） 文字瓦：松田 猛（群馬県史編さん室）
 6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡 例

1. 掘団中に使用した北は座標北である。
2. 掘団に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。
3. 本遺跡の略称は1A41である。
4. 各遺構の略称は次の通りである。
H…平安時代の住居址、T…竪穴状遺構、I…井戸、D…土坑、W…溝
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
遺構 住居址・土坑・井戸…1/60、全体図1/200
遺物 玉…1/2、土器・石器…1/3、瓦…1/4、石器…1/6、木器…1/2・1/4・1/6・1/8・1/16
6. スクリーントーンの使用は次の通りである。
遺構平面図 草束…斑 遺構断面図 火山灰…淡点、構築面…斜線
遺物実測図 黒色処理…網、炭化物…斑、赤色塗彩…淡点、施物範囲…雲
朱漆…淡点、黒漆…濃点、須恵器断面…黒塗、灰陶陶器断面…濃点
土器使用痕…細斜線、石器磨滅痕…淡点

目 次

序

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	3
III 調査の経過	
1 調査方針	6
2 調査経過	7
IV 層序	9
V 調査区の遺構と遺物	
1 Yトレント	10
2 Zトレント	16
3 25トレント	17
4 26トレント	17
5 27トレント	17
VI 成果と問題点	19
付 編	
元總社明神遺跡第8次調査出土の獸骨類について（宮崎重雄）	23
元總社明神遺跡の地層・地形分析（鶴バリノ・サーヴェイ）	34
元總社明神遺跡におけるプラント・オーパール分析（前古環境研究所）	37
民俗事例にみる祓い人形（板橋春夫）	43
推定上野国府城出土瓦の文字（松田 猛）	48

図 版

- 口絵 1 27トレンチ出土の木製品
 口絵 2 白磁・青磁・綠釉
 口絵 3 玉類・文字瓦

- 口絵 4 Yトレンチ出土の堅杵
 口絵 5 Yトレンチの古墳時代水田址

- PL. 1 Yトレンチの遺構
 2 Yトレンチの遺構
 3 Yトレンチの遺構
 4 Yトレンチの遺構と遺物出土状態
 5 Yトレンチ遺物出土状態
 6 Yトレンチの遺構
 7 Z・25・27トレンチの遺構
 8 27トレンチ遺物出土状態
 9 27トレンチの遺構と遺物出土状態
 10 27トレンチの遺物と遺物出土状態
 11 27トレンチの遺構
 12 Yトレンチ出土の土器

- PL. 13 Yトレンチ出土の土器
 14 Y・27トレンチ出土の土器
 15 27トレンチ出土の土器
 16 Yトレンチ出土の木器
 17 Yトレンチ出土の木器
 18 Yトレンチ出土の木器
 19 Yトレンチ出土の木器
 20 Yトレンチ出土の木器
 21 Yトレンチ出土の木器
 22 27トレンチ出土の木器
 23 27トレンチ出土の木器
 24 27トレンチ出土の木器・獸骨

挿 図

- Fig. 1 元総社明神遺跡の位置 vi
 2 元総社明神遺跡位置図 2
 3 元総社明神遺跡周辺図 4
 4 元総社明神遺跡グリッド設定図 5
 5 元総社明神遺跡調査経過図 6
 6 元総社明神遺跡標榜上層図 8
 7 Yトレンチ全体図(1) 61
 8 Yトレンチ遺構図(1) 62
 9 Yトレンチ遺構図(2) 63
 10 Yトレンチ遺構図(3) 64
 11 Yトレンチ全体図(2) 65・66
 12 YトレンチⅦ層木器分布図 67・68
 13 Yトレンチ溝土層図 69

- Fig. 14 Yトレンチ柱群の施設(1) 70
 15 Yトレンチ柱群の施設(2) 71
 16 Yトレンチ上層図(1) 72
 17 Yトレンチ全体図(3) 73・74
 18 Yトレンチ土層図(2) 75
 19 Yトレンチ出土遺物(1) 76
 20 Yトレンチ出土遺物(2) 77
 21 Yトレンチ出土遺物(3) 78
 22 Yトレンチ出土遺物(4) 79
 23 Yトレンチ出土遺物(5) 80
 24 Yトレンチ出土遺物(6) 81
 25 Yトレンチ出土遺物(7) 82
 26 Yトレンチ出土遺物(8) 83

Fig. 27 Y レンチ出土遺物 (9)	84	Fig. 43 27 レンチ出土遺物 (3)	101
28 Y レンチ出土遺物 (10)	85	44 27 レンチ出土遺物 (4)	102
29 Y レンチ出土遺物 (11)	86	45 27 レンチ出土遺物 (5)	103
30 Y レンチ出土遺物 (12)	87	46 27 レンチ出土遺物 (6)	104
31 Y レンチ出土遺物 (13)	88	47 27 レンチ出土遺物 (7)	105
32 Y レンチ出土遺物 (14)	89	48 27 レンチ出土遺物 (8)	106
33 Y レンチ出土遺物 (15)	90	49 27 レンチ出土遺物 (9)	107
34 Y レンチ出土遺物 (16)	91	50 27 レンチ出土遺物 (10)	108
35 Z・25 レンチ全体図	92	51 27 レンチ出土遺物 (11)	109
36 Z・25 レンチ全体図	93・94	52 27 レンチ出土遺物 (12)	110
37 26 レンチ試掘調査	95	53 27 レンチ出土遺物 (13)	111
38 27 レンチ全体図 (1)	96	54 27 レンチ出土遺物 (14)	112
39 27 レンチ全体図 (2)	97	55 Y・27 レンチ出土瓦と文字瓦	113
40 27 レンチ土層図	98	56 白磁・青磁・緑釉	114
41 27 レンチ出土遺物 (1)	99	57 Y レンチ Hr-F A 下水田址	115
42 27 レンチ出土遺物 (2)	100	58 開泉明神北遺跡確認調査	116

表

	頁		頁
Tab. 1 Y レンチ包含層遺物一覧表	10	Tab. 6 27 レンチ遺物観察表	54・55
2 Y レンチ草束一覧表	14	7 Y レンチ木器計測表	56
3 27 レンチ包含層遺物一覧表	18	8 27 レンチ木器計測表	57
4 Y レンチ遺物観察表	51～53	9 獣骨・人骨一覧表	57・58
5 Z・25 レンチ遺物観察表	54	10 白磁・青磁観察表	59・60

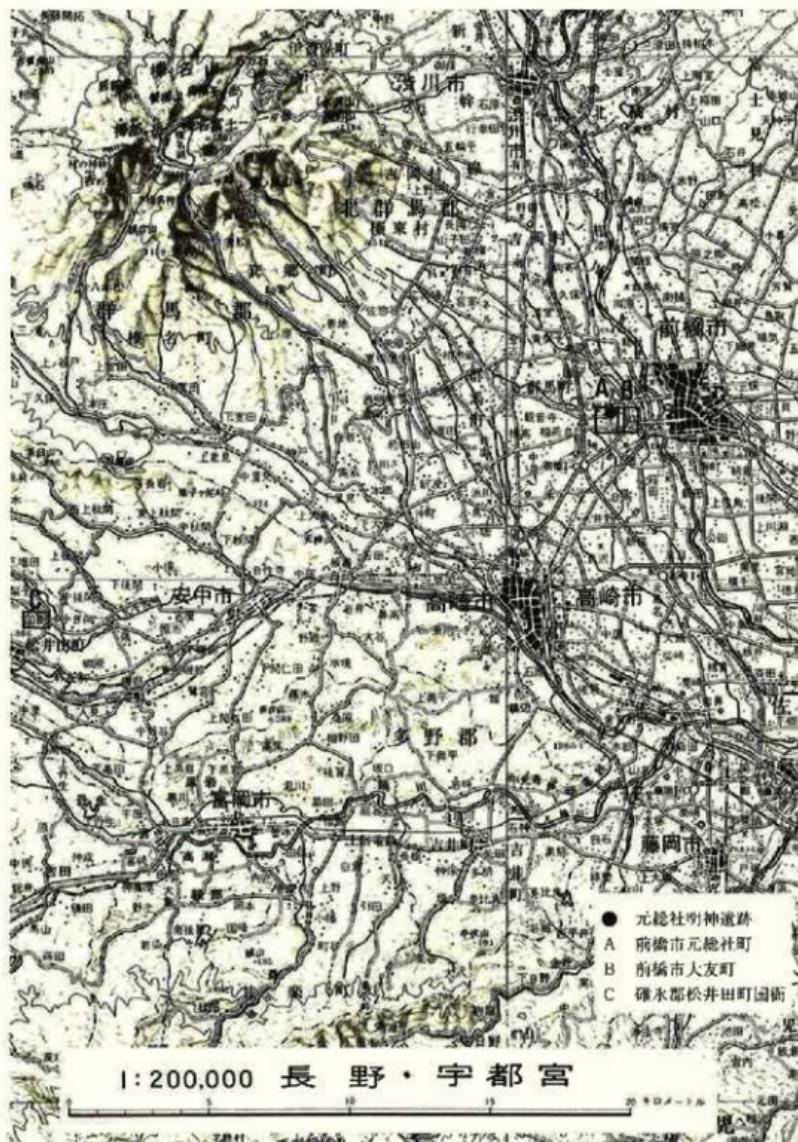


Fig. 1 元總社明神遺跡の位置と上野国府

I 調査に至る経緯

昭和48年に計画策定された前橋市都市計画事業元総社地区土地区画整理事業について、事業担当課である区画整理1課と当局の協議が重ねられ、道水路部分を中心に埋蔵文化財の調査を実施することが決定した。

まず、初年度である昭和57年度と58年度の2ヶ年で、前橋市教育委員会が国庫補助金を受けて遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、濃密な遺構の分布が認められたことと遺跡地が推定上野国府域に所在することの重要性も鑑みて、再度協議を重ね、昭和59年10月15日付で『元総社(西部第三明神)地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が代表者前橋市長と前橋市教育委員会教育長との間で締結された。調査は区画整理事業の進捗状況に則して、前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施することになった。

なお、『元総社(西部第三明神)地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』は、昭和63年4月18日付でその内容を一部変更した。

平成元年度の調査は、委託者から平成元年4月10日付で調査依頼書が提出され、4月28日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。現地での発掘調査を平成元年4月28日から12月27日まで行い、整理作業を平成2年1月5日から3月31日まで実施した。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷を経て関東平野を望むところに位置し、地形、地質の特徴から、大きく北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）と両者の地溝状をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、及び現利根川氾濫源の4地域に分けられる。

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前に浅間火山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。西は、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名山腹に広がる相馬ヶ原扇状地と移行部を形成し本遺跡まで及んでいる。東は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されている。そして、微地形的には多少の起伏をもつてはいるがほとんど平坦台地面といえる。前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を東南方向に開析し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。總社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高3m～5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑園を主とした畠地として利用されてきた。また、この台地上は恰好の居住地であったらしく、古墳時代から奈良・平安時代にかけて多くの遺跡が残されている。

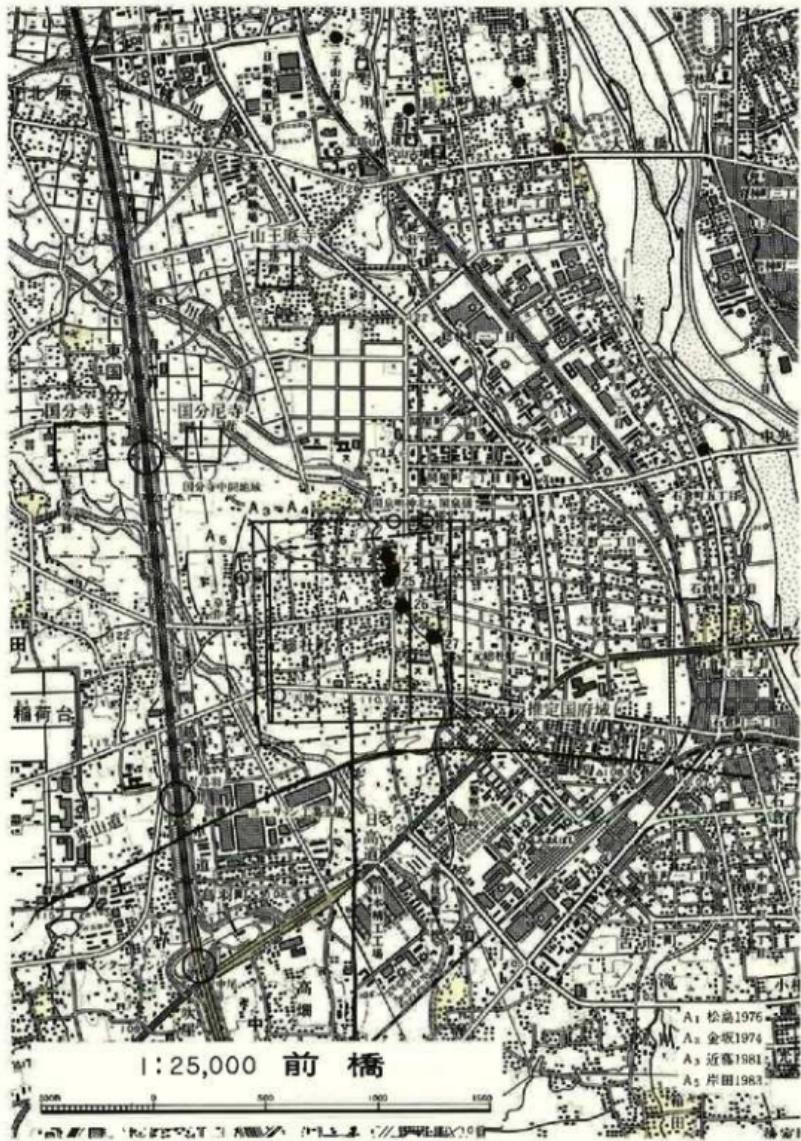


Fig. 2 元總社明神遺跡位置図と上野國府学説

元総社明神遺跡は、前橋市元総社町に所在し、群馬県より西へ約2km、JR上越線新前橋駅北方約2kmの地点である。遺跡地は、群馬郡群馬町東牛池沼に発し、元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。この台地の西側は牛池川に向かってゆるやかに傾斜し、その比高は3m~4mを測り、右岸の段丘上には元総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。一方、本遺跡地は、市街地化が進み、幹線道路を中心におフィスビルや商店が立ち並び、原状を明らかにすることはできないが、標高112m~115mの北西から南東へ向かってわずかずつ傾斜している地形が窺える。

2 歴史的環境

今回の調査の結果、遺跡地は縄文時代から中世にわたって連続と生活の舞台となっていたことが判明した。検出された遺構・遺物は、中世の蒼海城と関連を持つ堀、平安時代の集落と埋没水田、古墳時代の2時期の水田と泥炭層中の木器類、そして弥生・縄文時代の遺物を挙げることができる。本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代史の注目を浴び、さらに中世には蒼海城が築かれた。それらを含めた状況把握をするためにも、縄文時代から遡って周辺の歴史的環境をみていくたい。

縄文時代では、国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡で検出された前期・中期の集落が筆頭に挙げられ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里・陣場遺跡、中島遺跡、長久保遺跡などが挙げられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の住居が検出された国分寺中間地域遺跡、桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生ずるのは、本地域が高礫化した土地であることの地形的要因に帰するのであろう。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、6世紀前半代である。利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である千山古墳が造られる。その後、本遺跡の北約2kmには、総社古墳群を構成する古墳が連鎖と築かれる。まず、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳、主軸70mを測る遠見山古墳、また県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500mに所在する山王庵寺にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王庵寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。しかし、古墳が数多く存在するにもかかわらず、大きな集落は検出されていない。

奈良・平安時代に至ると、国府、国分寺等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野

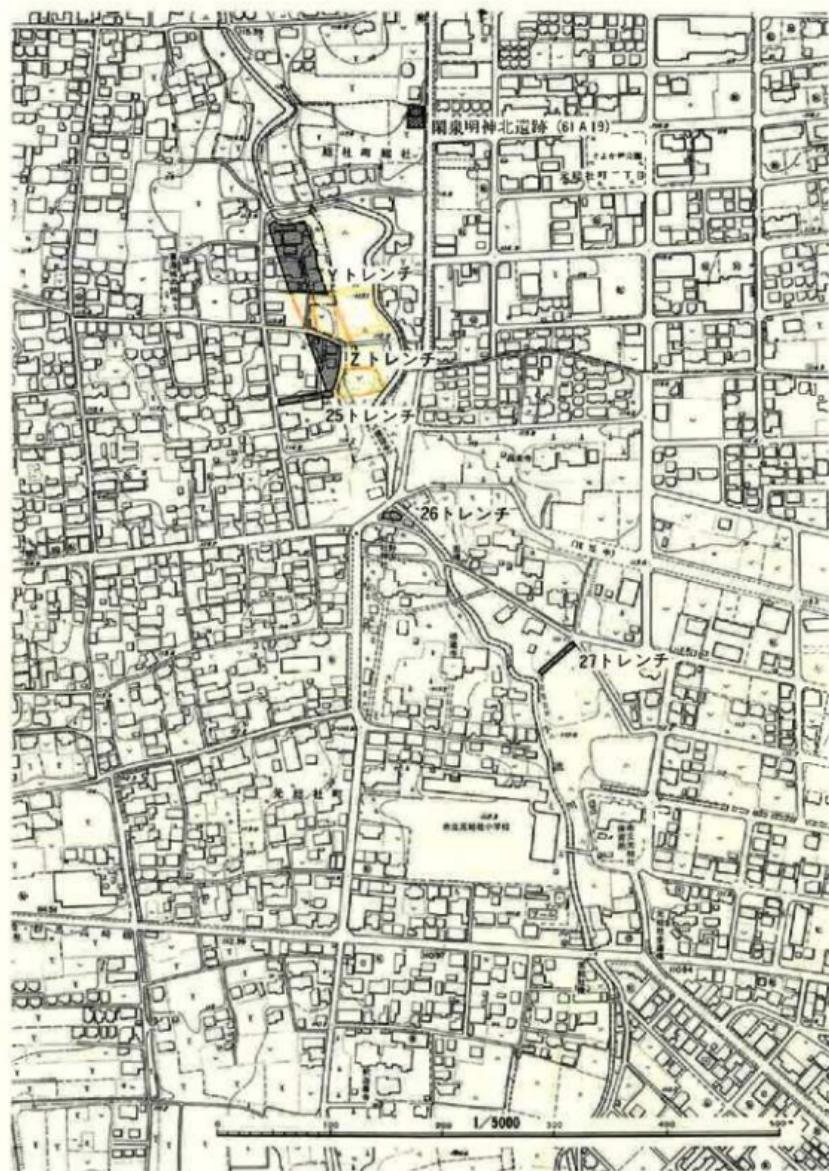


Fig. 3 元統社明神遺跡周辺図

の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府については8年次にわたる発掘調査と戰前からの研究史がある。また国府周辺遺跡では、関泉橋遺跡、関泉橋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元總社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒山遺跡等がある。

国府の成立年代は定かではないが、大化2年(646)の改新の詔の二に「初脩京師、置幾内國司郡司……」(日本書紀卷25)とあり、新国司制度とともに国府の大部分が新設されたものと考えられていることから、奈良時代以前には国府ができていたものと推定される。また、「倭名類聚鈔」によれば「上野國、国府在群馬郡……」とあり、位置として「群馬久留美出合為東
第一新宿中間隔分」の記述がある。これの文献及び總社神社の「上野國神名帳」研究等により、当地域に国府があると想定され、地名や地割りから想定案が提出されている(Fig. 1・2参照)。

国分寺は、大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代になると道路の拡幅や設置のために、部分的ながら発掘調査が進められるようになつた。そして、昭和48年度からは史跡地の公有化が始まり、整備計画が策定された。国分寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の礫石、築地、壙などが確認されている。国分寺周辺では、この数年間越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地城遺跡等がある。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址が大量に発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では爆發的に集落の拡大した様子が窺われる。また、多くの遺跡から綠釉陶器、灰釉陶器、白磁、硯、墨書き土器等の出土が見られ、鳥場遺跡では神社跡と推定される特殊遺構も検出されている。

中世には蒼海城が築かれ(1429)、秋元氏の城下となつたようである。現在の街路の組形は、蒼海城の堀割りが道路と変化したものである。そして蒼海城の縄張り自体も国府跡を利用してゐるため、国府解明が一層複雑なものとなつてゐる。

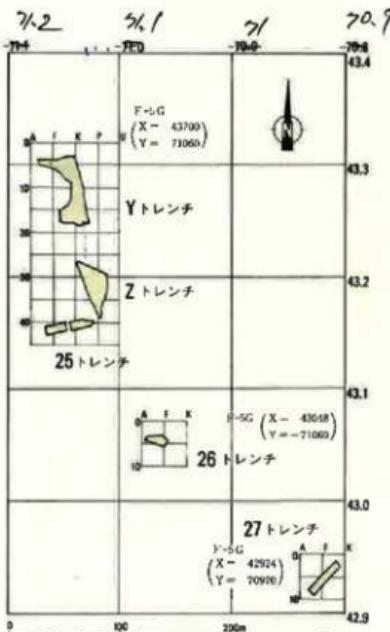


Fig.4 元總社神遺跡グリッド設定図

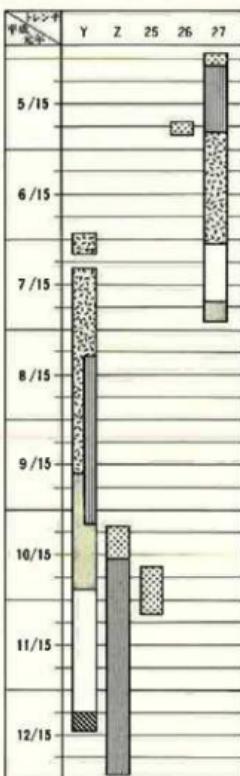
III 調査の経過

1 調査方針

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今回で8年次を迎えた。調査対象地が道水路部分であるため狭長な調査区が多い。昭和57・58年度に実施したトレンチの呼称に追従して、その後も共通な呼称法が採られ、東西調査区を1・2・3トレンチ…、南北調査区をA・B・Cトレンチ…と呼んできている。従って、「トレンチ」とは「調査区」の慣用的な呼び方である。調査方法は、調査対象地に試掘調査を実施し、その結果から発掘調査に移行する方法をとった。なお、調査には平成元年12月から工事着工という期間的制約があったため、表土剥ぎや多くの面で土木用機械を使用した。グリッドはすべて公共座標にもとづき、座標北を基準に4m単位で設定した。グリットは西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称とし、A-1グリッド(例)と呼んだ。平面座標・水準の移動は区画整理に伴う近接した基点を利用し、委託測量によった。

グリット設定後、プラン確認を行い調査工程を検討し調査を進める。そして、①調査区が狭長であり遺構が密集していること、②低湿地遺跡であるため湧水と雷雨・台風時には河川の氾濫による被害、③低湿地遺跡であるため敷地面積層が存在し3m以上まで掘り下げるため安全確保等の問題点が集積していた。これらに対して、当初から万全な対策が講じられなかつたが、暗中摸索の状態で、随時問題点を解決しながら調査を進めた。

発掘調査にあたっては、遺構は基本的に「使用面」と「掘り方面」に分けた工程で実施した。図面作成は平板・簡易造り方測量を用い、原則的に1/40の縮尺で、必要に応じて1/10・1/20の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を探りながら収納した。包含層の遺物は、グリッド単位で層位毎に収納した。ただし、木器や歯骨をはじめとする



- 平安時代以降面
- 平安時代の遺構
- 平安時代の包含層
- 古墳時代の遺構
- 古墳時代の包含層
- 織文・弥生時代の包含層

Fig. 5 元総社明神遺跡調査経過図

る重要と判断した遺物は、分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

2 調査経過

第8年次に当たる今年度の発掘調査は、平成元年4月28日から12月27日までの約8ヶ月にわたり実施された。調査区5ヶ所、面積4,307m²である。ただ、住居移転等の関係から一度に調査することができず、田地が空いた場所から逐次実施していった。また、事務所は例年通り総社神社東にある調査事務所を使用した。

4月中旬に打ち合わせを終ませ、各種事務手続きを終了し、4月20日より事務所に器材を搬入し、点検を行った。委託契約締結日である4月28日より27トレンチの掘り下げを開始した。直ちに、平面座標と水準の移動を行い、グリットを設定をした。試掘調査の結果、3枚のテフラと泥炭層が確認できたことから、発掘調査方法を検討した。5月9日より重機により表土掘削と部分的な深掘りを始めた。深掘りにより、平安～古墳時代の4枚の遺構面（水田址など）と2枚の遺物包含層の存在が確定的となった。遺構には溝や山河河道が多く、大量の湧水により作業は遅れた。作業面の確保と安全対策のため、24時間排水のためポンプ数台を投入した。また、予想量をはるかに超えた木器・木製品・動物遺存体・植物遺存体の出土は、掘り下げから記録・収納・保管のすべてにわたって多くの時間を必要とした。時期的にも梅雨と重なったため、210m²の面積に約3ヶ月を要した。26トレンチの樹木の伐採ならびに試掘調査を、27トレンチと並行して5月23・25日に実施した。狭い調査区で生活道に隣接していることや安全勾配を探ると掘削不可能なため試掘調査で終了させた。

区画整理1課の要請により、6月29日からYトレンチを重機で表土掘削及び試掘を始める。7月20日より遺構を掘り下げ始める。区画整理1課より借用しているプレハブ事務所からYトレンチまで通ったが、往復に30分もかかりかつ交通事情も悪いので、現場近くにプレハブ事務所を7月29日に建てた。8月11日までYトレンチI・II区FA直下の水田面まで掘り下げる。水が沸くので、溝を作り、釜場を掘り、ポンプで汲み出す。しかしその後、大雨や台風のためI・II区は水没し作業はできなくなった。それ以後も何度も大雨や台風があったため、8月30日に200ボルトの電気工事をし、数台の大きなポンプを使用した。8月17日よりIV区の掘り下げを始める。9月初旬は雨のため作業が遅れる。10月6日にI・III区が掘り下げられるようになった。10月13日にII区も始め、10月中旬にFA直下の水田を仕上げる。木器・木製品等が多数出土したため取り上げ作業に時間を非常に要した。C直下面を仕上げ、弥生・绳文時代の試掘をし、12月13日にYトレンチの作業を完了する。

25トレンチは10月17日より11月4日まで行いZトレンチで検出されたW-1号溝の延長が検出された。Yトレンチと並行して、10月11日よりZトレンチの表土掘削を始める。苔海城の堀と想定できそうな溝を検出する。そして、その東に、何軒も重複した住居址群の存在を確認する。発掘調査は11月6日まで行い、中断して11月30日から再開して12月27日に全体図作成作業を最後に



Fig. 6 元禄社明神遺跡標準土層図

終了した。また、器材の撤収および遺物の運搬を同日慌ただしい中で済ませた。12月28日に終了の挨拶を行い、12月29日に埋め戻しの作業の完成を確認して現地での作業が完了し、調査地の引き渡しを行った。なお、整理作業は翌平成2年1月5日より実施し3月末日には作業を完成させる運びとなった。

IV 層序

遺跡の層序は、各トレンチとも堆積状況に多少の違いはあったものの、基本的にはFig. 6に示した通りである。この図は台地と沖積地で構成されるY・27トレンチの層序を基本にした模式図である。

基本土層のうち、指標テフラを伴うものは、III層…As-B（浅間山：1108年）・VI層…Hr-F A（榛名山：6世紀初頭）・VII層…As-C（浅間山：4世紀中葉）・XIII層…As-Sj（浅間山：約1万年前）・XV層…As-Y P（浅間山：約1.3～1.4万年前）である。このほかに、V層…Hr-FPF 1（6世紀初頭）・XI層…總社砂層（縄文時代草創期～中期に形成）・相馬ヶ原扇状地堆積物が示準層である。

遺構検出面は、II層中（中世）・III層直下（平安）・IV層中（平安）・V層直上（平安）・VI層直下（古墳）・VII層直下（古墳）の6面である。遺物包含層は、II層（中世）・VI層（平安）・VII層（古墳）・IX層（古墳）・XI層（弥生・縄文時代）の5面である。

各区の概要について補足しておきたい。Yトレンチは、模式図とほぼ同様な堆積を示すが、As-Bは、W-3号溝の覆土中に顕著に認められた。Hr-FPF 1・Hr-F A・As-Cは沖積地部分にみられ、As-Sj・As-Y Pは台地部分には存在するが、沖積地部分は後の開拓によって、残存していない。Yトレンチの遺構検出面は、IV層中（平安時代：集落址）・VI層直下（古墳時代：水田址）の2面である。遺物包含層は、IV層（平安時代）・VII層（古墳時代）・IX層（古墳時代）・XI層（弥生・縄文時代）である。IV層からは、土師器・須恵器に混じって多数の白磁・青磁の出土がみられ、泥炭質のVII層中からは、台帳記載で500点を超える木器・木製品・建築部材・自然木が発見された。XI層からは、縄文時代晚期終末から弥生時代前期の土器と磨滅した縄文時代中・後期の土器が発見された。Yトレンチの景観は、相馬ヶ原扇状地堆積物の上に水性堆積の関東ローム層を乗せており、その上に縄文時代に形成された總社砂層が存在する。台地部分は現在の景観と変化はない。しかし沖積地の景観は6世紀を境にして大きな変貌をとげる。

Z・25・26トレンチでは總社砂層によって形成された台地もしくは崖面であり、平安時代以降の文化層がみられ、部分的にAs-Bが存在していた。

27トレンチの遺構検出面は、III層直下（平安）・V層直上（平安）・VI層直下（古墳）・VII層直下（古墳）の4面である。遺物包含層は、II層（中世）・VI層（平安）・VII層（古墳）・IX層（古墳）でそれ以下は、工事の性格上「仮設水路」と破壊を受けないため未確認である。

V 調査区の遺構と遺物

1 Yトレンチ

発掘調査の結果、平安時代から縄文時代に及ぶ5枚の文化層を検出することができた。以下、文化層毎に所見を述べていく。

(1) 平安時代の包含層(IV層)

Yトレンチの北半分に分布がみられ、他の範囲には遺物の分布が、全く認められなかった。北半分には、Hr-FPF
1の上に厚く堆積した
砂層が認められること
から、これらの砂層が
形成される河道部分
に、多量の遺物が混入
したものである。遺物
の年代・種類も多岐に
亘っていることが、そ
れを物語っている。た
だ、これらの遺物はほ
とんど磨耗していないため、近隣から流入したものと推測できる。遺物の時期は、縄文時代中期
の土器・石器、古墳時代後期～平安時代の土器等であった。この中で、主体を占めるものは、8
～10世紀の土器と鉄滓であった。鉄滓の出土は、東80mに所在する宮崎様隣接地から出土した多量
の鉄滓との関連を窺わせる。

Tab. 1 Yトレンチ包含層の主要遺物一覧表

層位	土器・須恵器	灰釉	磁釉	青磁	白磁	瓦	鉢器	鉄滓	骨生上部	縄文上部	木製品
IV D	252							33		1	
IV Z	2109	10				12		496	1	24	3
IV a	23										
IV b	30										
IV c	840	8				11		2		1	
IV a～c	7961	99	2		8		14	23		5	
IV d	1364	14				11		4		4	
IV e	1803	7				14		9		7	
VI	8								2	2	449
VII	43										48
VIII	5										
IX									98	90	9
合計	14438	138	2		8	48	14	567	101	134	509

(2) 平安時代の遺構(IV層)(Fig. 7, PL. 1)

平安時代の遺構は、調査区の南西部に存在したが、その他の範囲には認められなかった。検出された遺構は、竪穴状遺構3基・非戸1基・土坑26基・溝3条であり、この中でD-26、W-3は注意を要する遺構である。

1 竪穴状遺構

T-1号竪穴状遺構 挿図 Fig. 8 写真 PL. 1 位置 I・J-14・15グリッド

確認面 IV層上面 重複 W-1・D-4に切られる。 形状 調査した範囲は長軸4.12m、短軸3.32mの不整形を呈する。 面積(10.0)m² 覆土 自然堆積で埋没したと考えられる土層断面であり、基本的には2層の暗褐色土、黄褐色土が主体をなしている。 底面 IV層を掘り込んでいる。確認面からの深さは約33cmを測る。 遺物 図示したものはないが、灰釉(3)、

布目瓦（6）、石（3）、須恵器・土師器（123）が出土した。

T-2号竪穴状遺構 現地調査で、本遺構として扱ったものは、検討の結果、I-1号井戸に名称変更を行った。従って本報告書ではT-2号竪穴状遺構は欠番扱いとなる。

T-3号竪穴状遺構 挿図 Fig. 8 写真 PL. 1 位置 H・I-14・15グリッド

確認面 IV層上面。重複 W-1とD-1・2・13・16・21・27に切られる。形状 長軸4.48m、短軸4.26mの正方形に近い形を呈する。面積(14.1)m² 底面 IV層を掘り込んでいる。確認面からの深さは約24cmを測る。遺物 図示したものは、青磁1点、土師質杯1点である。他に鉄滓（5）、磁器（1）、灰釉（3）、骨（1）、鉱石（1）、磁石（1）、瓦（8）、土師器・須恵器（584）が出土した。

T-4号竪穴状遺構 挿図 Fig. 8 写真 PL. 1 位置 I・J-15～17グリッド

確認面 IV層上面。重複 W-1・2とD-9・19・20・22に切られる。形状 長軸5.82m、短軸(3.50)mの長方形を呈する。面積(19.8)m² 底面 IV層を掘り込んでいる。確認面からの深さは約15.5cmを測る。遺物 図示したものは、土師質杯2点、土師質皿1点。他に骨（1）、須恵器・土師器（47）が出土した。

2 井 戸

I-1号井戸 (Fig. 9、PL. 1) 位置 I・J-13・14グリッド 確認面 IV層上面。形状長径2.92m、短径2.58m、深さ(2.50)mの不整円形を呈する。中段頃まで擴鉢状に落ち込み、そこより断面形はU字形を呈する。遺物 図示したのは、白磁1点、土師質台皿・皿・杯・擂鉢が各1点、砥石1点、石臼5点である。他に縁付（2）、灰釉（2）、磁器（2）、鉄滓（2）、馬齒（2）、瓦（5）、石器（3）、石（12）、土師器・須恵器（315）が出土した。

3 土 坑 (Fig. 10, PL. 1・2)

D-1号土坑 位置 G・H-14グリッド。形状 長径124×短径118cm、深さ76cmの円形を呈する。遺物 鉄滓（1）、骨（1）、須恵器・土師器（30）が出土した。

D-2号土坑 位置 II-15グリッド。形状 長径80×短径76cm、深さ82cmの円形。断面図はU字形を呈し、As-Bが含まれる。遺物 須恵器・土師器（17）が出土した。

D-3号土坑 位置 I-13グリッド 形状 長径82×短径76cm、深さ17cmの円形を呈する。底面は平坦。遺物 灰釉（1）、布目瓦（1）、須恵器・土師器（34）が出土。

D-4号土坑 位置 I・J-14グリッド 形状 長径142×短径130cmの円形を呈する。T-1を切る。遺物 磁器（1）、布目瓦（1）、須恵器・土師器（10）、棲瓦（3枚）が出土した。備考 出土遺物から近世～現代。

D-5号土坑 位置 I・J-14グリッド 形状 長径62×短径(58)cm、深さ10cmの円形を呈する。D-6に切られる。底面は平坦であった。遺物 布目瓦（1）、石（1）、須恵器・土師器（19）が出土した。

D-6号土坑 位置 I・J-15グリッド 形状 長径98×短径96cm、深さ86cmの円形を呈

する。 遺物 須恵器・土師器(13)が出土した。

D-7号土坑 位置 H-16・17グリッド。 形状 長軸178×短軸(150)cm、深さ100cmの隅円方形を呈する。断面図はU字形を呈し、As-Bが含まれる。 遺物 灰釉(5)、鉄器(1)、布目瓦(4)、結晶片岩(1)、須恵器・土師器(208)が出土した。

D-8号土坑 位置 H-1-16グリッド。 形状 長軸208×短軸162cm、深さ110cmの隅丸方形を呈する。断面図は摺鉢状である。 遺物 図示したのは、白磁1点、土師質皿1点である。他に、灰釉(1)、骨(1)、齒(1)、須恵器・土師器(251)が出土した。

D-9号土坑 位置 I-15・16グリッド。W-1に切られる。

形 状 長径102×短径90cm、深さ39cmの円形を呈する。底面は平坦であった。 遺物 須恵器・土師器(38)が出土した。

D-10号土坑 位置 I-17グリッド。 形状 長径84×短径78cm、深さ81cmの円形を呈する。底面は平坦であった。断面図はU字形で、As-Bが含まれる。また、D-11と重複する。

遺物 図示したのは、青磁1点である。他に須恵器(7)が出土した。

D-11号土坑 位置 I-17グリッド。 形状 長径132×短径78cm、深さ74cmの梢円形を呈する。As-Bが含まれる。 遺物 図示したのは、白磁1点である。他に鉄滓(1)、石(1)、須恵器・土師器(66)が出土した。

D-12号土坑 位置 G-15グリッド。 形状 長径80×短径68cm、深さ8cmの円形を呈する。浅い土坑である。 遺物 須恵器・土師器(11)出土した。

D-13号土坑 位置 I-13グリッド。 形状 長径80×短径72cm、深さ51cmの円形を呈する。W-1、T-3と重複する。W-1より先行する。 遺物 図示したのは、白磁1点。他に骨(1)、布目瓦(2)、須恵器・土師器(43)出土。

D-14号土坑 位置 H-17グリッド。 形状 長径66×短径66cm、深さ50cmの円形を呈する。断面図はU字形。底面は平坦。 遺物 図示したのは、土師質皿2点である。他に骨(1)、布目瓦(2)、須恵器・土師器(47)が出土した。

D-15号土坑 位置 I-17グリッド。 形状 長径68×短径60cm、深さ16cmの円形を呈する。浅い土坑である。 遺物 須恵器・土師器(14)が出土した。

D-16号土坑 位置 H-I-15グリッド。 形状 長径64×短径56cm、深さ27cmの円形。底面は平坦。T-3と重複する。 遺物 須恵器(1)が出土。

D-17号土坑 位置 H-13・14グリッド。 形状 長径126×短径114cm、深さ23cmの円形を呈する。 遺物 図示したのは、土師質皿1点である。他に灰釉(1)、鉄滓(2)、布目瓦(2)、須恵器・土師器(55)が出土した。

D-18号土坑 欠番

D-19号土坑 位置 J-15・16グリッド。 形状 長径120×短径(76)cm、深さ38cmの半円形。W-2に切られる。 遺物 布目瓦(1)、須恵器・土師器(6)が出土。

D-20号土坑 位置 I・J-16・17グリッド。 形状 長径72×短径66cm、深さ32cmの円形を呈する。断面図は摺鉢状である。Hr-FPF 1が混入する。 遺物 図示したのは、土師質皿1点である。他に布目瓦(1)、石(1)、須恵器・土師器(15)が出上した。

D-21号土坑 位置 H-14グリッド。 形状 長径138×短径136cm、深さ9.8cmの円形。浅い土坑。Hr-FPF 1が混入する。T-3に切られる。 遺物 図示したのは、灰釉碗1点である。他に灰釉(1)、骨(1)、カマド袖石(1)、須恵器・土師器(29)が出上。

D-22号土坑 位置 J-16グリッド。 形状 長径36×短径40cm、深さ29cmの円形を呈する。底面は凹凸がある。Hr-FPF 1が混入する。 遺物 土師器(1)が出上した。

D-23号土坑 位置 H-17グリッド。 形状 長径118×短径104cm、深さ14cmの円形を呈する。浅い土坑である。Hr-FPF 1が混入する。D-11に切られる。 遺物 灰釉(1)、石(1)、須恵器・土師器(25)が出土した。

D-24号土坑 位置 H・I-14グリッド。 形状 長径60×短径56cm、深さ28cmの円形。断面形は緩やかな摺鉢状。Hr-FPF 1が混入。 遺物 布目瓦が1点出土し、図示する。

D-25号土坑 位置 G-16グリッド。 形状 長径50×短径50cm、深さ15cmの円形を呈する。浅い土坑である。 遺物 図示したのは、土師質皿1点である。他に布目瓦(1)、石(1)、土師器(1)が出上した。

D-26号土坑 位置 G-15グリッド。 形状 不整形。長軸204×短軸(148)cm、深さ34cmを測る。調査区域の端部で、西の一部は調査できない。河原石が配置されていた。その配置は、人為的に配されたものであり、礎石のそれとの関係を想起させるものであった。しかし、近接した位置から類似遺構が無いことがそれを否定する要素である。 遺物 蜂巣石(1)、礎(117)、須恵器・土師器(5)が出土した。

D-27号土坑 位置 H-14グリッド。 形状 長径42×短径38cm、深さ27cmの円形を呈する。断面図はU字形で、底面は平坦であった。 遺物 図示したのは、灰釉碗1点である。他に砂質凝灰岩(3)、須恵器・土師器(7)が出土した。

4 溝

W-1号溝 (Fig. 7-13, PL. 2) 位置 I-12~17グリッド 形状 北から南に向かい、幅86×深さ64cm前後である。断面形は底部はU字形を呈し、壁は摺鉢状に広がる。 遺物 図示したのは、白磁2点、青磁1点、凹石1点、管玉1点である。他に磁器(4)、灰釉(22)、管玉(1)、骨(9)、齒(2)、鉄滓(24)、布目瓦(23)、石器(5)、砥石(1)、石(24)、埴輪(1)、縄文土器(1)、須恵器・土師器(1,744)が出土した。

W-2号溝 (Fig. 7-13, PL. 2) 位置 J-13~17グリッド 形状 北から南に向かい、幅60×深さ100cm前後である。断面形は逆台形であった。 遺物 図示したのは、砥石2点、石臼2点、剣形品1点、白磁1点である。他に灰釉(2)、磁器(3)、鐵器(1)、鉄滓(4)、石器(1)、凹石(1)、石臼(2)、石(6)、瓦(11)、須恵器・土師器(250)が出土した。

W-3号溝 (Fig. 7) 位置 G~J 16~18グリッド 形状 幅は片側の肩部分だけであるが7.2mを測る。深さは1.4m。遺物 IVa~e層とした遺物の大部分が該当する。最下層より7世紀前半代の土師器杯の破片 (Fig. 19-17・18) が出土した。備考 人為的なものでは無く、旧河道と考えられるものであった。この河道は、Hr-FPF 1を切り、上部に水平堆積のAs-Bを乗せることと最下層から鬼高田式に同定できる杯がみられたことより、7世紀後半から10世紀後半までの流路と考えられる。このことは、国府の中でも国衙近接地とされる地域に、このような河道の存在が、それらの諸施設の存在を窺かすのものであり、また旧米の地形が、現在の地形に全く消されている事実には驚嘆させられた。

(3) 古墳時代の水田址 (VI層直下)

1. 水田遺構 (Fig. 11, PL. 3・4) 河道によって形成された冲積地は、厚さ2mを超えるV層 (Hr-FPF 1) によって覆われていた。そして、その下面には厚さ20cmのVI層 (Hr-FA) に被覆された埋没水田址が存在していた。このように、本トレンチではV層の堆積を境にして大きく地形的な景観が変貌をとげた。すなわち、總社砂層を基盤とする河岸段丘下に広がる谷が埋没したのである。集落から水田に向かう人々は2~3m下の谷地に下りて稲作を行っていた。水田遺構には、台地に沿ってW-4と呼んだ上幅2mの水路が、大きく蛇行を繰り返して南流している。明らかに畦畔が確認された水田は調査区南半に存在していた。しかし、北半分では出水の中という劣悪な調査状況も多分に影響するが、畦畔がまったく確認できなかった。

畦畔の確認された水田址は、W-4を挟んだ西側に、1区画が平均で南北2.5m・東西1.6mの規模の南北に長い長方形の小区画水田が36面検出された。地形の傾きは6/1,000であり、ほぼ水平といえる。畦畔の幅は14~34cmであり、高さは0.5~4.0cmであった (Fig. 57)。水田址からの出土遺物は2点の獸骨が確認された以外認められなかった (No. 159: 獣骨・水田面、

No. 148: イヌ・畦畔)。水口は図示できるほどの高低差が存在しなかったが、いずれも中央部に確認された。

そして、W-4の東側から、自然地形を利用した平均南北5.0m・東西4.1mの水田址が14面検出された (Fig. 57)。これらの畦畔は幅32~58cmで高さ25~40cmと極めて高い事が特徴であった。取水口は1カ所認められた。それはW-4が曲がった地点でややレベル的にも低くなつており、特別の設備は認められなかった。

Tab. 2 Yトレンチ草束一覽表

番号	No.	出土グリッド	出土地	長さ	幅	厚さ	備考
1	91	M-12G	田	(106)	40	1	散種混在
2	123	L-12G	畦畔	113	22	1	
3	136	M-14G	田	46	22	4	ヨシ属
4	165	N-14G	畦畔	14	11	7	
5	167	N-15G	畦畔	(47)	7	9	
6	197	M-14G	畦畔	138	42	12.5	
7	207	I-14G	畦畔	112	22	2	
8	222	L-13G	田	60	22		
9	259	L-15G	畦畔	148	40	18	クシクサ属(ススキ)
10	300	M-16G	畦畔	96	40	3	
11	361	M-15G	畦畔	90	26	9	
12	362	M-16G	畦畔	46	15	3	
13	363	M-16G	畦畔	65	28	7	
14	430	I-13G	畦畔	75	(26)	8	
15	670	N-15G	畦畔	(22)	66		
16	667	N-16G	畦畔	65	30	—	
17	668	N-17G	畦畔	60	18		
18	669	N-17G	畦畔	60	20	—	

これらの畦畔を切開したところ内部から草束（Tab. 2）や部材・樹皮製品（Fig. 30-21）がみつかった。これらの草束のうち、No.222は網代状に編んだ形跡も認められた。プラント・オパール分析の結果、草束はカヤ・ヨシと判明した。また、草束に近接して2~3本の杭を垂直に打ち込んだものが4ヶ所から確認できた（Fig. 14-15）。これらの杭は、数カ所で屈曲している。広葉樹のため、泥炭層が堆積土の土圧で圧密化する際に、土層にあわせて屈曲したことと考えられる。これらの用途として、堅や強湿地の畦畔補強が考えられる。

以上のように、本文化層からは畦畔が確認された区域と確認できなかった区域が存在した。さらに、水田址にも大小の区画が存在した。しかし、プラント・オパール分析の結果（37~42頁）は、イネのプラント・オパールは少量しか検出されなかった。

2. 溝（Fig. 7・16, PL. 1） W-4号溝 位置 調査区北西から北東に延び、総社砂層を基盤にする台地を巡り、屈曲しながら南東部に抜ける。 確認面 VI層上面。 形状 北と南の延長80mで、落差40cmを測る。全体的に幅1.6~2.5m、深さは40~50cmである。緩やかな立ち上がりであった。

遺物 水路の底部や堆積土中から50点前後の木器・木製品・木材が検出された。堅杵やナスピ形鋤などの農耕具も含まれていた。

（4）古墳時代の包含層（VII層）（Fig. 12, PL. 5）

本包含層は、厚さ50~90cmの厚さを持つ泥炭層（VII層）であり、木器・木製品・建築材・自然木が475点以上、土器・勾玉などが出土した。これらを木器等の種類は、堅杵・ナスピ形鋤・盤などの容器・手斧の柄・ほぞ穴を有する建築部材・杭・樹皮の内側の部分を使用した製品などである。この他に、果核（モモ・オニグルミ）をはじめ瓜科の種子、センナリ・ヒョウタンの種子が多数検出されている。木器は出土状態から廃棄後流されたもので、分布域がW-4の流路変遷に沿った区域から出土している。すなわちW-4の流路に乗って移動し堆積したものと理解される。垂直分布ではVII層上・中といった泥炭層の上半部からまとまっていた。出土した土師器は鬼高I期初頭の内斜口縁や模倣杯である。VII層下部に石田川期土器が存在するにもかかわらず、中層に和泉期の土師器がほとんど存在しないことから、泥炭層は5世紀後半という比較的短期間に形成されたものと考えられる。

（5）As-C直下面（VII層直下面）（Fig. 17, PL. 6）

厚さ15cmを超えるAs-C純層に直接覆われた面であるが、水田と肯定できる施設は一切検出されず、地形的にも多くの段差が認められるという考古学的見地から水田址の存在が認められなかった。さらに、プラント・オパール分析でも珪酸体の検出はなかったため、稻作は行われていなかったといえる。検出面ではAs-C直下面に倒れた大形の樹木が多いことやW-5~11と7本の河道が検出されている。これらのうちW-5・6・7号溝は覆土にAs-C純層が入ることから新期、W-8・9・10・11は覆土から古期といえそうである。

（6）弥生・縄文時代の包含層（IX層）（Fig. 17）

試掘調査によって検出された。IX層と呼んだ砂礫層の中から磨滅を受けた縄文時代早期から後期の約100点の土器や石器と磨滅を受けていない縄文時代晚期終末から弥生時代前期の土器が約100点まとめて出土した。縄文早期～後期の土器はすべて磨滅を受けていることから、やや離れた場所からの移動が考慮されるが、縄文晚期終末から弥生前期の土器は磨滅をうけていない事から、周辺のその生活領域の存在が推定される。

これらの土器の詳細については、Tab. 4に記載してあるが、縄文早期の土器は1片なため何とも言えないが、早期沈線文系土器と考えられる。前期の黒浜式土器も1片だけである。中期加曾利E4式土器はかなりの量がまとまって出土した。後期の称名寺・堀之内・加曾利B式土器は量的には僅かであった。晚期終末の土器は、水系の精製土器と折り返し口縁を有する燃系施文の粗製土器であり、量的には少なかった。弥生土器も有文土器は少なくすべて図示した。三角連繩文や凸帶を持つもの、粗大な工字文が施文されるものである。粗製土器は条痕若しくは刷毛目が内外面みられ、口唇部に刻みや凹みを有する土器もみられた。

また、IX層については、溝水が著しく調査が危険であること、遺物量が極めて少ないと、河川工事によって直接破壊を受けないことから試掘調査に留めた。

2 Zトレーニング (Fig. 35・36, PL. 7)

調査の結果、中世以降の遺構として溝4条が検出でき、平安時代の遺構は、住居址16軒・土坑20基・焼土跡が検出された。このうち、W-1は長尾氏所有の絵図と照合の結果から『蒼海城』の堀と考えられる。堀線部分に沿って開削されており西側と東側では堀の肩が1.6mの比高を有する。上幅4～5m・深さ2.4～2.5m・下幅1.1～1.3mで総延長40mが調査できた。さらに25トレンチでも延長部分が検出され、昭和62年度調査の18トレンチW-4に接続するものである。W-1は調査区の東北隅では溝に直交して地山が掘り残されていた。掘り残し部分は、下幅1.4m・高さ0.8mであり、上部はまるくなっていた。平成2年度に予定されている延長部分の調査を待つ意外断定できないが、「障子堀」になることも考えられる。出土遺物は、漆椀、石臼、内耳鍋等が出上したが量的には多くなかった。

平安時代の遺構は崖線部分の斜面からほぼ11世紀代の所産と思われる住居址17軒・土坑18基・井戸1基が重複した状況で検出された。

今回は、全体図と主要な遺物（文字瓦・漆器椀・白磁と青磁の一部）の显示にとどめ、詳細については『元總社明神遺跡IX（1991）』に掲載する予定である。

3 25トレーニング (Fig. 35・36, PL. 7)

25トレーニングの調査は、ZトレーニングのW-1に接続する「蒼海城の堀」が崖線に沿って開削されていた。調査区東端の崖線下にはAs-Bの純層が認められ、W-1の開削土がAs-Bに乗っていたことから、W-1の開削時期がAs-B以前であることが解明した。また、東端は安全性確保

から As-B 以下の面の追及は断念した。水田の存在が考えられよう。

4 26 トレンチ (Fig. 37)

試掘調査では No. 1 ~ 3 の試掘坑を設定した (Fig. 37)。その結果、No. 1 では総社砂層を掘りこんで壠が確認された。蒼海城に関連するものであろう。

No. 2 では、II 層の下に総社砂層・As-Sj が確認され遺構・遺物は認められなかった。

No. 3 でも、II 層の下に水性堆積のローム層が確認され遺構・遺物は認められなかった。

5 27 トレンチ

発掘調査の結果、平安時代から古墳時代の 6 枚の文化層を検出することができた。以下、文化層毎に所見を述べていく。

(1) 平安時代の水田址遺構 (III 層直下面) (Fig. 38, PL. 7)

As-B 直下の水田址。発掘調査の所見では、As-B の残存状況がわるいことと相まって咲群などが検出できなかつたため、水田址であるとの判断を保留した。しかし、プラント・オパール分析の結果、多数のイネに由来する機動珪酸体が検出されたため水田址と認定した。この他に、As-B の純層を覆土とする溝 2 条が検出された。W-1 号溝は幅 2.8m・深さ 1.3m であり、上部に As-B の純層が堆積していた。覆土から、土師器・須恵器が数点出土している。W-2 号溝は、W-1 号溝と並行しており、幅 1.4m、深さ 0.5m を測る。上部に As-B の純層が堆積していた。覆土から遺物は土師器・須恵器の他、平瓦が出土している。なお、W-2 にみられた As-B の堆積状況から、從来一時の降灰と考えられていた As-B の降下が 2 回の噴火によるものであることが観察できた。

(2) 平安時代の包含層 (IV 層) (Fig. 38, PL. 8 + 9)

本包含層は As-B の直下から Hr-FPF 1 の直上面までの厚さ 0.5m の IV 層である。IV 層は細分でき、泥炭層 (IVD)・シルト層 (IVSi)・砂層 (IVSu)・粘土層 (IVN)・砂疊層 (IVZ) が互層となっており

Tab. 3 27 トレンチ包含層の主要遺物一覽表

複雑な堆積状況

であった。出土

遺物は縄文時代

から平安時代に

及んでいる。し

かし主体は 9 世

紀~11 世紀の遺

物である。

縄文時代の遺

層位	土器・須恵器	灰軸	縄軸	青磁	白磁	瓦	鐵器	鐵滓	木器	財貨	人骨	歯根
II	483	16				5						
III	53	1	1	1		1						
IV S	1271	24				22		1	3	1		
IV D	3067	103				64			9	18		1
IV Sa	432	14				5				3		
IV N	2011	101		1		38		4		6		
IV Z	4566	8				11		2	43	19	1	1
IV	601	84				190		15	32	35		3
VI	26					1						
VII	358								108	1	1	
VIII	114					2			13			1
合計	12982	351	1	2		339		22	208	83	2	6

物は磨耗した中期～後期の土器数点のほか、黒曜石の原石1点・石鐵1点・石斧と剝片が数点・翡翠の大珠1点が出土した。

弥生時代は僅かに櫛波状文が施された樽式土器1点である。古墳時代の遺物は鬼高Iの内斜口縁杯や須恵器模倣杯がみられた。

主体となる平安時代の遺物は土師質土器・須恵器・灰釉陶器・白磁・青磁・瓦・木器・木製品・獸骨・人骨・鉄滓・植物遺存体(モモ・クルミの果核、瓜科の種子、センナリ・ヒヨウタンの実)が検出された。須恵器の底部調整は、範切りと回転糸切末調整のものであることから8世紀後半から9世紀前半にかけてのもので一部奈良時代の所産のものも存在した。多くの土器は土師質土器であり椀や皿であった。

木器の中で「人形(ひとがた)」が3点みつかった。このうちのFig. 46-529は、現存長66cm・幅5.8cm・厚さ0.8cmと大形品である。さらにFig. 46-468は欠損しているが、復元すると長さ100cmを超える大形品となろう。いずれの表面とも墨書きではなく、穿孔等の傷跡も認められない。ただ、Fig. 46-446は朱漆と思われる塗装が観察された。これらの人形の存在から調査区近辺に国府とも関連を有するハラエやミソギの場が想定される。

この他に獸骨80点以上がまとまって検出されている。ウマ・ウシ・シカ・イヌがあり、このほかにヒトと思われる骨が出土している。

(3) 平安時代の遺構(V層直上面)(Fig. 39, PL. 9)

Hr-FPF 1を切る形で、形成された溝3条が検出された。W-3号溝は幅2.1m・深さ1.0mであり、W-7号溝が幅7.0m・深さ1.2mであり、W-6号溝は西南隅に0.5mの幅で検出されたにすぎない。この他にW-4号溝は幅0.6m・深さ0.3m、W-5号溝は幅0.5m・深さ0.4m、W-8号溝が幅1.5m・深さ0.4m、W-9号溝が幅1.2m・深さ0.1mであった。これらは、總社砂層の崖線上に形成されていたことから、As-B降下以前の構築であるが、Hr-FPF 1との直接関係しないため時期判定が困難である。

(4) 古墳時代の包含層(VII層)(Fig. 39, PL. 9・10)

Hr-FA(VI層)からAs-C(VIII層)の間の泡炭層(VII層)が本包含層である。なお、Hr-F A直下面で、水田址は検出できなかった。それは、Hr-FPF 1やHr-FAが流れによる侵蝕を受けているため、仮に畦畔があったとしても現存していなかったと考えられる。また、プラント・オパール分析でも、イネのプラント・オパールがVII層上面では検出されなかった。

本包含層は、厚さ0.8～1mの厚さを持つ泡炭層(VII層)であり、木器・木製品・建築材・自然木が200点以上、土器・管玉などが出土した。これらを木器等の種類は、横樋・横歛・盤・弓・鎌の柄・ぼぞ穴を有する建築部材・杭などである。この他に、果核(モモ・オニグルミ)をはじめ瓜科の種子、センナリ・ヒヨウタンの種子が多数検出されている。この他に人骨(女性・上腕骨)が出土している。

木器は出土状態から廃棄されたものが多数を占めたが、中には打ち込まれた杭が存在した。確

認できなかったが、Hr-F A直下の水田址に伴う杭とも考えられる。また、木器の分布にも偏在性があることから流路に乗って移動し堆積したものと理解される。

(6) 古墳時代の水田址（第4遺構面）(Fig. 39, PL. 11)

As-C直下から明確に畦畔と水路1条が検出でき、プラント・オパール分析の結果でもイネが検出されている。調査範囲が狭いため水田址の形態は不明である。畦畔は幅50cm、高さ2cmである。調査範囲で5面の水田がみられた。水路はW-12号溝であり、幅1.1m、深さ0.1mであった。覆土にはAs-C純層が堆積していた。この他にAs-Cの純層が60cmの厚さで堆積するW-14号溝やW-13号溝が検出された。

さらに、下層は、工事用の暫定水路で、後に現況復旧することや掘削による遺跡地の破壊から免れるため調査を実施しなかった。隣接している群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査区（遺跡名：元總社寺田遺跡）からは、弥生時代前期初頭から縄文時代晩期末葉の土器包含層、縄文時代中期・前期包含層の2枚の文化層が検出されている。

VI 成果と問題点

元總社明神遺跡第8年次の調査は5カ所の調査区であり、主体が低湿地遺跡であったため調査も難行したが、縄文時代から中世まで多岐にわたる遺構・遺物が検出された。遺構として、古墳時代の水田址、平安時代の水田址、平安時代の集落、中世城館址が挙げられ、遺物包含層からは、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・灰釉陶器・綠釉陶器・青磁・白磁・瓦・土製品・石器・石製品・鉄器・鉄製品・鉄滓・青銅製品・木器・木製品・獸骨・人骨・果核・種子・昆虫・樹根・自然木と様々な遺物が検出された。ここでは時代毎に成果と問題点を指摘しておきたい。

1 地 質

今回の調査で、縄文時代に形成されたとされる「總社砂層」と1万年前のテフラとされる「總社輕石層」が検出された。これらの示準層の検出によって、牛池川の河岸段丘の時期も縄文時代以降に形成され、「牛池川低地帯」の離水時期が弥生時代から古墳時代にかけてなされたことが判明した。また、6世紀初頭の榛名山二ツ岳の火山活動によって「牛池川低地帯」は多量の堆積物が押し寄せ現在の地形が形成されたことが、Y-27トレンチや昭和59年度の16トレンチの成果から判明した。さらに、從来から地山といわれていた層位が、「總社砂層」によって形成されたことが明白になり今後の調査指針となりえよう。今後、「總社砂層」やHr-FPF 1の分布範囲の解明を地質学との連携作業によって追究していくかなければならない。

なお、「總社輕石層の絶対年代」については¹⁴Cによる放射性年代測定を依頼しており、その結果が待たれる。

2. 繩文・弥生時代

繩文時代の遺物は、著しく磨耗していたものの早期～後期の土器と判明した。この中で中期加曾利E4式土器が最もまとまっていた。

繩文～弥生時代の土器は、浮線文系土器群の影響の強い晩期終末期（大洞A併行）から初期弥生土器（弥生前期）にかけての土器であった。これらの土器は初出であり、IXC層と呼んだ泥炭質シルト層からイネのプランツ・オパールが高い値で検出されたため、今後これらの土器に伴う水田遺構の発見が期待される。また、弥生時代の土器は断続的に中期前半や後期の土器も出土している。

3 古墳時代

古墳時代の水田がAs-C直下とHr-F A直下から2枚検出されたが、市内で古墳時代水田址の調査事例少ないため好資料の追加ができた。また、水田形態や畦畔の造作にも多くの情報が得られた。特に畦畔内部から草束が18資料みつかった。これらは強湿地のため畦畔の補強に、杭とともに用いられたことといえる。草束はプランツ・オパール分析の結果ヨシ属とウシクサ族（スキ属）と同定された。管見する範囲では、三ツ寺I遺跡の西迎張出部に検出された草束や昭和60年度16トレンチに検出されているものと同様である。草束No222としたものには編んだ状態が観察でき、先の三ツ寺遺跡例にも観察されている。建築材を畦畔の補強に用いた事例は、波川市中村遺跡・高崎市芦田貝戸遺跡・小八木遺跡・御布呂遺跡・日高遺跡や静岡県長崎遺跡や漸名遺跡など各所でみられ、同道遺跡では石を用いている。

27-YトレンチVII層の泥炭層から、総数700点を超える木器が出土した。現在のところ、Hr-F A下の泥炭層は南を昭和60年度16トレンチ、北を27トレンチを経てYトレンチと延長600mにも及んでおり、牛池川によって形成された低地帯全城に木器が遺存していることが判明した。木器類の多くは廃棄されたものと畦畔補強に転用されたものであるが、杵・横樋・ナスビ形若柄歛・横歛・鎌柄などの農耕具や生活用具の容器、弓などの武器、柱や樋などの建築材であった。また、今回の調査で昭和60年度16トレンチの杭列は、土構状の遺構と推定されたが、今回の調査によって時代は異なるが日高遺跡や静岡県長崎遺跡や漸名遺跡にみられる杭列畦畔であろうという結論を得た。また、16トレンチの杭列には草束や横木の使用もみられている。

静岡県長崎遺跡で指摘している泥炭層の圧密化現象が、Yトレンチや16トレンチの杭に観察できた。幾重にも屈曲した杭（Fig. 33・34や『元總社明神遺跡III・IV』図版14や16の杭）は針葉樹にくらべ柔らかい広葉樹を用いた結果といえる。

27トレンチで検出されたFig. 52-706の柱は根腐れをおこしているものの、長さ3.2m・太さ22cmを測り、手斧による丁寧な加工が全面におよんでおり、断面が多角形で構成されていた。この柱から想起されるものは、三ツ寺I遺跡と類似した口径27.2cm・高さ25cmの大形高杯を出土した

昭和61年度調査NトレンチW-17号溝である。W-17号溝は Hr-F A純層を覆土上面に堆積することから6世紀初頭以前に機能していた居館跡の掘と考えられている。少なくともこういった柱は一般住居の使用が考えられないことからこの柱を使用する建物（すなわちW-17号溝を使用する施設）の存在は国府成立前から当地域の優位性を証する事例として看過できないことといえる。

Fig. 30に示した樹皮製品が6点以上出土しているが、用途不明である。ただし、No168は畦畔補強に転用された状態で出土している。三ツ寺I遺跡でも樹皮製品が報告されており、それによればカシ表皮を取った状態であるという。No168は完形品であり、台形をなし周間に小孔を有することから緊縛したことが推定でき、鎧の胸当などが想像できる。この他にモモ・クルミなどの果核を始めウリの種子やセンナリ・ヒョウタンやその種子・昆虫が出土した。

4 奈良・平安時代

Yトレンチで検出されたW-3は旧牛池川の流路と考えられる規模を有するものであった。Hr-FPF1の堆積層を切っており上部に水平堆積のAs-Bをみるとことから6世紀初頭以降で12世紀以前であることが考えられる。また、最下部の泡土層から7世紀前半代の杯がみられ、IVa～IVc層から出土した遺物は11世紀代のものが多いことと多量の炭や焼土がみられたことから、その時期には、機能していなかったことと推定でき、ほぼ7～10世紀の流路と考えられる。そうなると、東にある国衙中心地と考えられる宮鍋様に接近してW-3（牛池川）が流れをとっていたこととなり、W-3号溝に近接した場所での国衙中枢建物の存在は考えにくくなるといえよう。

総数150点に上る獸骨が出土しており、ウマを主体にウシ・シカ・イヌがみられた。これらが祭祀行為に伴ったものか、食されて廻棄されたものかは判断材料にかけるが、ウマをみた場合、部位が豊富なことから後者が推定される。

大形人形3点の出土は県内初出事例となった。周辺の調査区から発見されていないことから遠い場所から流されたものではなく「流し」は近くで執り行われた結果と考えられる。調査区が狭かった事から隣接地の調査に待つ部分が多いが、人形の用途は呪い、病気治療、祓などに用いられたとされる。一般的に罪や穢を流す祓に用いられ、呪い場合は単数の人形、祓の場合複数で用いていることから、本遺跡の場合、後者の用例といえ、平城京・長岡京・平安京などの古代都城に用いられたものが当国府にも伝播したものといえる。共伴した須恵器の底部調整が回転糸切未調整から9世紀第1四半期の年代が与えられる。古墳時代の豪中が昭和59年に調査の16トレンチから1点出土したため、牛池川では長期にわたる祭祀が執り行われた事も考えられる。

文字瓦や瓦当面は、Yトレンチから『七』『八』や3重弧文の軒平瓦、Zトレンチから『方光』『若人』『七』、27トレンチから『那射郷』『勢』『雀』『木』『阿』？『光』？『八』と多数が出土した。『方光』の瓦は本調査区から北1.5kmに位置する『山王廬寺』供給瓦と考えるのが最も妥当で

ある。この瓦が11世紀代になって、本遺跡に電用材として運びこまれたものと考えられる。この他に『勢』『省』『七』『八』など国分寺に多数みられる文字瓦である。仮にこれらが、後に運びこまれたものだとすると『上野国府』の主要建物の多くに瓦が使用されていなかった事も想像でき、さらに国府域から出土する瓦がすべて国府に関係したものではないことといえよう。しかし、今回の調査区から相当数の瓦が検出されており、これらがすべてそういうものであったとは断定しがたい。気になるのが国分寺中間地域遺跡での瓦の出方や今までの国府域とされている調査での出現頻度である。今後、各遺跡のもつ様々な属性を加味して供給先を決定しなければならない。また、『那射郷』は承平年間（931—937）に源頼によって編纂された『和名類聚抄』『甘楽都』内の郷名である。現在の富岡市南蛇井付近との関係がみられることである。一般に文字瓦の記された名は、瓦の寄進に関与したことが推定され、彼此には特別の関係がみいだされる。しかし、この文字瓦も直ちに国府に関連したものとは先の理由で断定できない。

白磁は総数44点が出土した。トレンチ別にみるとYトレンチ20点・Zトレンチ19点・27トレンチ5点である。青磁は総数5点でYトレンチ3点・27トレンチ2点である。綠釉は総数8点でYトレンチ5点・27トレンチ3点である。出土状態をみるとYトレンチではW-3号溝の覆土からまとまって白磁・青磁・綠釉が出土しており、3者が近似した地点から出土する傾向を有する。これらの白磁・青磁は群馬県埋蔵文化財調査事業団の大西雅広氏の鑑定によれば、大方11世紀から12世紀前半のものである。いずれもAs-Bの下層から出土したことから時期的にも符合する。これらはいずれも小片の状態で器形の復元できるものはなかった。国分寺中間地域にみられるように数百メートルの距離をおいて接合するように、小片で保持していた事例も指摘されている。このように、貿易磁器の出土点数の多さは、本地域が県内でも卓越した地域の証左であるが、いずれも国府衰退期のものであるため、国府と直接関連するものか検討を要する。

5 中 世

Zトレンチと25トレンチの堀は、昭和62年度18トレンチW-1もしくはW-4号溝と接続するものである。『群馬県古城址の研究』の蒼海城の図面に該当する堀はみいだせなかたが、長尾氏所有の『蒼海城絵図』では「惣社明神」の西にある堀で、「家中」の東を通り「諫訪屋敷」に向かって北へ真っすぐ延びているものに該当しよう。

Fig. 58に昭和61年度開発行為に伴う確認調査を実施した関泉明神北遺跡の概要と図面を掲載しておいた。昭和58年度調査の関泉橈遺跡の大溝に接続するもので、国府域の北限を画する溝として注目されるものである。上野国府については四至を溝で画するという理解が一般的であるが、西側と南側が確認されていないことや南北方向の大溝も昭和58年度調査南北溝・昌黎守東隣接の堀（八日市場城の堀として再利用）と連結する寺田遺跡南北溝と1町の距離で2条存在することや、北限の溝が日高条里と一致をみせることから、国府域を画する点に消極的な要素が多く、慎重なる検討を必要としよう。

付編 元總社明神遺跡第8次調査出土の歯骨類について 宮崎重雄*

1. は	じ	め	に
2. 本			文
A. ウ		マ	
B. ウ		シ	
C. シ		カ	
D. イ	メ	シ	シ
E. イ		ス	
F. 板	鰓	類	
G. ヒ		ト	
3. む	す	び	

1.はじめに

元總社明神遺跡は群馬県前橋市元總社町に所在し、古墳時代から平安時代にいたるウマ、ウシ、シカ、イヌ、イノシシ、サメ、ヒトなどの歯や骨が多数出土した。旧河道路の湿地帯に埋蔵していたものが多く、比較的保存状況も良好で、当時の動物の形態や人間との係わりを知る上で、興味のたれる資料である。

本稿で用いた調査基準は次のようである。

1) 馬歯の計測法は、Eisenman *et al.* を主に用いたが、下顎臼歯については歯冠幅を改変し、上顎臼歯については中附縫幅を追加し、原形態の分類基準は改変した。歯冠高の計測法は上顎・下顎臼歯とも Levin を追加した。四肢骨の計測法は主に Duerst⁽¹⁾ に従った。イスの計測法は資藤⁽²⁾、ウシ、シカの計測法は Drriesh⁽³⁾ に、ヒトの計測法は Martin⁽⁴⁾ によった。

2) ウマの年齢推定は、切歯の咬耗度を用いた場合は Goubaux *et al.* に従い、歯の交換時期を基準にした場合は Levin⁽⁵⁾ に従った。この二つの方法が用いられない場合は Levin の臼歯の咬耗度を参考にした。Levin はイギリスのボニーを調査対象にしていて、これをそのまま日本の古代馬に応用するのは問題があるが、群馬県およびその近隣の地域で出土したいくつかの古代馬の例で、切歯の咬耗度から得られた年齢と、この方法で得られた年齢との間に、あまり大きな齟たりのないことが分かっている。ただし、第二前臼歯では誤差が大きく出すぎる傾向があり、5才以下の個体だと、歯冠が未完成で、歯冠高が低く、高年齢に出てしまう傾

向があるって、共に除外した。

3) ウマの臼歯の咬合面の名称は、シンプソン(長谷川・原井)⁽⁶⁾ によった。

4) 日本の在来馬の体高による分類は林田にしたがつた。⁽⁷⁾

5) ウシの臼歯による年齢推定は Ducom⁽⁸⁾ をもじった。Ducom は西アフリカのンダーマ牛を研究対象としていて、品種も飼料も違うウシのデータをそのまま日本の古代牛に適用するには妥当性を欠くが、日本の古代牛あるいは在来牛にこの様な研究例が知られてない現状のなかでは一つの目安として用いてみても許されよう。

6) 解剖用語は、主に日本獣医学家会獣分科会編の『家畜解剖用語』を参考にした。

7) 注の番号は引用文献を表し、図表類も共通して用いた。

8) 牙に関する略号は、I が切歯、P が前臼歯、M が後臼歯をあらわし、右の数字は歯種番号を示す。例えば、M² は第 2 後臼歯である。

2. 本文

A. ウマ (*Equus caballus*)

1. 27トレンチ

本トレンチからは頸蓋骨一個（1号馬）と臼歯の植立した下顎骨 2 個の他に、遊離した多数の臼歯と歯根の切歯、四肢骨などが出土している。

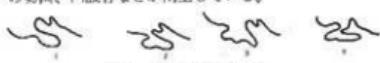


図1 ウマの臼歯種類

* 群馬県立大関高等学校

a. 1号馬 (27トレ418)

*時代: 平安時代前期

*保存部位: 左右の切歯、全臼歯の植立した頭蓋骨で、下顎骨、舌骨を欠く。

*性別: 犬歯の永久歯は4~5才で萌出するが、本個体の推定年齢からすればすでに萌出しているはずの犬歯が該当部位に見出されないため、メスと判断される。

*年齢: 切歯の咬合度からして6~7才と推定される。

頭蓋骨全長 (vertex の長さ) は510.0mmで、中型在来馬である御崎馬の(12)509.6mmよりは大きく、木曾馬の(13)532.3mmよりは小さい。一般的に、永久歯列においては

萌出直後を別として全臼歯列長は加齢とともに小さくなるので、年齢を考慮しない計測値の比較は厳密さを欠くが、それでもよほどの老成馬でないかぎり大体の目安にすることはできる。

本馬の上顎臼歯列長は咬合面で172.4mm(左右の平均)を計測でき、やはり御崎馬の163.8mm(8頭の平均)(13)と木曾馬の173.2mm(6頭の平均)の間にある。また、奈良から平安時代の群馬県およびその近隣地域出土(14~16)の遺跡馬のそれと比較すると、木馬のこの値は最大級(17)の部類に入る。頭蓋骨全長を林田他の体高推定式にてはめると121.8cmが得られる。日本の在来馬にあてはめると小型馬と中型馬の中間的な体高のウマであったといえよう。

表3 27トレンチ1号馬上顎臼歯 (27トレ418) 計測値

曲種	P ¹	P ²	P ³	M ¹	M ²	M ³
歯冠長	39.3	31.3	29.0	24.8	27.2	26.9
歯冠幅	24.3	26.8	25.4	25.4	24.8	22.8
切歯幅	9.6	11.0	11.9	12.2	13.2	12.3
頭蓋骨全長 (Gesamtlänge)	35.0	64.0	72.0	59.0	69.0	71.0

注) 表の計測値の単位はmmである。

各歯が最高に発達しているため、歯冠以外は咬合面で計測

※ P¹~M³=958.6

※ P¹~M³=173.6(179.0) ()内は歯冠幅

表4 27トレンチ2号馬右下顎臼歯 (27トレ352) 計測値

曲種	P ₁	P ₂	P ₃	M ₁	M ₂	M ₃
歯冠長	29.5	26.0	29.4	28.4	29.9	(21.7)
歯冠幅	前 細	11.0		13.0	12.7	11.9
	後 細	13.2		12.2		10.4
歯冠高	歯冠底から	14.1	10.3	15.9	9.6	9.4
下後歯	右 長				11.0	11.6
下内歯	右 長				8.7	11.0
double knot	長	13.8			15.1	15.0

第一後臼歯は萌出後間もなく。()内は咬合面

表5 27トレ上顎歯計測値(2)

資料番号	27トレ505	27トレ422	27トレ504	27トレ464	27トレ409	27トレ406
推定個体	?	?	?	?	?	?
推定年齢	9~10才	8~9才	6~7才	5~6才	7~8才	?
左 右	R	R	R	L	R	L
推定曲標	P ¹	P ²	P ³	M ¹	M ²	?
歯冠長						
咬合面	35.6	24.4+	25.4	25.1	23.8	30.5+
中央	35.2	24.6	24.1	23.0	23.0	
歯冠幅						
咬合面	21.8		24.5	24.3	25.2	18.0+
中央	21.8		24.2	24.6	24.1	
歯冠高						
咬合面	9.3		11.1	11.3	10.7	9.6
中央			11.5	10.6	10.5	
歯冠幅						
Levin	33.9	56.0	52.6	65.0	45.7	23.0+
Levin	33.9	54.6	57.0	71.0	49.6	28.0+
咬合面の傾斜						
80°	92°	82°	87°	75°	88°	
エナメル櫛曲数						
1211	1111	1221	1322	9121		
咬合面						
5.0	5.0	4.4	4.4	3.5		
中央	5.0	4.7	4.1		3.3	
原深						
單	1		2	2	2	4

表1 27トレンチ1号馬頭蓋骨 (27トレ418) 計測値

計測値

3. 頭蓋骨全長 (vertex の長さ)	510.6
単位mm	

表2 27トレンチ1号馬切歯 (27トレ418) 計測値

曲種	左			右		
	I ₁	I ₂	I ₃	I ₁	I ₂	I ₃
金冠長	(22.0)	20.2	18.3	18.5	20.0	18.9
金冠幅	10.5	11.3	11.7	11.3	10.4	11.2
前歯高				53.5		

()咬合面

表6 27トレ下駄馬歯骨計測値(3)

	資料番号	27トレ505	27トレ467	27トレ176	27トレ337	27トレ612	27トレ144
推定個体番号	?	?	?	?	?	?	?
推定年齢	3~4才	7~8才	8~9才	7~8才	3~4才	7~8才	
左	R	R	R	R	R	R	
推定個体番号	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃	
歯冠長	咬合面 中央	30.5 32.5	27.1 27.7	26.5 26.7	26.1 26.6	28.0 28.3+	
台冠幅	咬合面 中央	13.1 14.0	15.1 15.3	15.2 15.5	15.0 14.7	11.2 14.8	11.7
歯冠高	Elevatormen Levin	45.6 43.0	53.4 53.2	48.1 44.0	56.0 58.0	51.0 56.7	
下後神	名無	8.8	9.6	8.7	8.3	12.4	
下内側	谷長	16.3	13.0	16.2	12.3	7.2	
double last	咬合面 中央	9.8	16.0	17.0	14.5	11.4	
歯冠高	傾斜	89°	88°	85°	88°	78°	

表7 27トレチ馬切歯計測値(2)

資料番号	27トレ415	27トレ417	27トレ458	27トレ131
既定年齢	8才*	8才	6~7才	
歯輪	I ₁	I ₂	I ₃	I ₄
歯冠長	14.7	16.1	16.3	13.0
歯冠幅	10.4	9.1	11.0	13.2
歯冠高	35.7	49.0	60.6	54.0

*417と同一個体

表10 27トレチ馬大歯骨計測値

資料番号	27トレ375	27トレ444
左	右	L
1. 生理的な長さ	332.4	319.7
2. 車子の長さ	336.1	
3. 脳頭から歯の長さ	339.6	329.2
7. 骨頭の直直徑		52.5
8. 骨中の直角の長さ	321.5	
12. 近位端の最大幅	97.7	
15. 骨幹近位端の直角	64.5	
16. 骨幹最小軸	37.6	33.4
18. 遠位端の最大幅	78.0+	79.2
19. 頭の最大幅		79.2
20. 骨幹骨幹の最大幅		50.9
21. 椎蓋溝の最小幅		33.2
22. Fossa polita の最大幅		21.3
23. 頭の最大幅	46.9	
28. 骨幹の最小軸	45.1	42.1
29. 骨幹の遠位端は小脛		42.5
30. 遠位端の最大直徑		104.2
31. 骨幹溝の高さ		43.0
32. Fossa pulitea の高さ		33.0
34. 骨幹中央の径	139.0	127.0

表8 27トレチ馬上腕骨計測値

資料番号	27トレ374
左	右
1. 保存全長	129.9
9. 骨幹最小幅	34.2
10. 遠位端の最小幅	70.3+
16. 骨幹最小径	38.6
17. 内側溝の直徑	58.9+
23. 骨幹最小周	123.5

表12 27トレチ馬中足骨計測値

資料番号	27トレ375
左	右
1. 最大長	264.6
2. 外側の長さ	259.2
3. 生理的な長さ	265.0
4. 内側の長さ	253.8
11. 骨幹の最小幅	34.8
13. 骨幹遠位端の最大幅	47.0
14. 遠位端の最小直徑	47.6
15. 遠位端前面の最大幅	47.6

注: 第二の中足骨が161.0mmところまで伸びている。

表9 27トレチ馬横骨計測値

資料番号	27トレ480	27トレ522
左	右	?
1. 生理的な長さ	327.4	
2. 最大長	333.0	
6. 近位端の長さ	75.2	88.4
7. 近位端前面の幅	71.5	79.7
8. 骨幹中央における最小直徑	36.5	
12. 遠位端における小脛の長さ	104.4	48.8
13. 遠位端前面の直徑	29.4	37.7
14. 中央における骨幹の直徑	24.6	
16. 橫骨最小周	103.2	

表11 27トレチ馬腰骨計測値

資料番号	27トレ367	27トレ403	27トレ413	27トレ399
左	右	R	R	L
1. 最大長	299.0+	254.6+	319.8+	225.0
9. 骨幹の最小幅	36.4	40.6	37.4	42.5
10. 遠位骨端の最大幅				69.8
13. 骨幹の最小直徑	26.8	27.7	28.1	31.9
14. 遠位骨端の最大直徑				47.7
22. 遠位側開窓の幅				52.2
23. 遠位外側開窓の幅				28.6
24. 遠位内側開窓の幅				21.0
25. 遠位頭側面の幅				41.7
27. 骨幹中央の径	106.7	115.0	112.5	
28. 骨幹最小周	105.5		111.0	

脳頭蓋はほぼ完存しており、大阪府城山遺跡出土の馬のように、脳頭蓋を打ち割って、脳を取り出した痕跡は全くみられない。

b. 2号馬 (27トレ352)

*時代：平安時代前期

*保存部位：全臼歯の植立した右下顎骨である。

*性別：性差の著しい犬歯が確認できないため、性別は不明である。

*年齢：第三大臼歯は萌出直後で、第二前臼歯、第三前臼歯は咬耗が進んでおり、下後錐形歯、下内錐形歯の計測ができない状況である。3~4才の若駒であろう。

下顎全臼歯列長は168.0mmで、御崎馬 (167.2cm) とほぼ同大で、木曾馬 (179.9cm) よりも小さく、小形在来馬のトカラ馬 (157.0cm) よりは大きい。小・中型馬の中間の大きさの馬であったであろう。

c. 3号馬 (27トレ410)

*時代：平安時代前期

*保存部位：全臼歯の植立した左下顎骨である。

*性別：性別を判断する部位を欠き、不明である。

*年齢：牡令馬

2号馬より咬耗が進んでいて、それより年長であることは確定である。しかし、臼歯が下顎骨に植立しているため Levin の歯冠高 (歯根の分歧点から咬合面ま

表13 Yトレチ馬上顎臼歯計測値 (その1)

資料番号	YトレG5G	Yトレ1	Yトレ20	Yトレ15	Yトレ2	YトレH16G H14	YトレH16G H07	YトレH16G H29
推定個体	A					C		
推定年齢	4~5才					12~13才		
左 右	L	L	R	R	R	L	L	L
推定歯種	P ²	P ⁴	M ¹	P ²	M ¹	P ⁴	M ¹	M ²
歯冠長	咬合面 中 央	29.0+	28.1	26.9	35.8	23.8	25.4	23.3+
		26.3	23.8	34.9	23.1	25.4		22.4
歯冠幅	咬合面 中 央	22.0	22.8	23.8	25.1	24.0		25.0
		24.6	24.4	23.0	24.8	24.0		25.0
原難度	咬合面 中 央			13.7	8.6	11.5	9.0	10.5
				13.3	8.5	11.0	9.0	10.5
歯冠高	Eisenmann Levin	42.0 44.7	58.0 57.5+	77.5 79.0	38.0 35.6	44.6 50.3	37.7 36.0	34.6 32.5
咬合面の傾斜	110°	80°	75°	109°	88°	88°	85°	90°
エナメル被覆歯			11 12	2211	123	1211		
中附歯高	咬合面 中 央	5.2	2.7	2.9	4.4	3.5	4.0	4.9
		4.3	3.8	4.5	4.0	4.0		3.1
歯 齒 値			2	1	1	1		2

表14 Yトレチ馬上顎臼歯計測値 (その2)

資料番号	YトレH16G H112	YトレH16G H094	YトレG16G H122	YトレH16G H117	YトレH16G H28
推定個体	D				
推定年齢	6~7才				
左 右	L	R	R	L	R
推定歯種	P ²	P ⁴	P ¹	M ¹	M ²
歯冠長	咬合面 中 央	25.6 24.0	26.8 23.4	25.6 23.0	23.6 23.8
					21.2 21.7
歯冠幅	咬合面 中 央	22.5 23.4	21.6+ 23.1	22.1 23.0	23.6 23.8
					18.6 20.0
原難度	咬合面 中 央	9.6 9.4	9.2 8.5	7.9 9.4	9.8 9.9
					7.4 10.8
歯冠高	Eisenmann Levin	62.3 68.0	59.0 61.6+	57.8 60.7+	58.2 65.7
咬合面の傾斜	85°	90°	85°	85°	64°
エナメル被覆歯	1111=	1311	1101	1211	= = = =
中附歯高	咬合面 中 央	4.2 5.1		3.9 5.0	2.2 4.3
原 齒 値	2	1	2	1	2

で)が計測できず、詳しい年齢推定はできないが、社馬と見てさしつかえはない。下顎臼歯列長は155.0mmで、小型在来馬のトカラ馬(157.0cm)よりもさらに小さい。奈良から平安時代の開拓およびその近隣地域出土の遺跡馬と比較しても、最小級に属する。

d. その他の骨

この他、遊離して出土した臼歯が、上顎6本、下顎6本と切歯が4本ある。これらの歯が、それぞれどの個体に属するかは明確にできない。

e. 四肢骨

四肢骨としては上腕骨が1、桡骨が2、大腿骨が2、胫骨が4、中足骨が1出土している。このうち全長が計測でき、林田他の式を使って推定体高を求めることが可能である。この部位は4つあり、桡骨から132.2cm、大脛骨から121.3cmと117.1cm、中足骨から131.3cmの体高が得られる。これらの部位がどの様な個体関係にあるかは不明であるが、ここでは一応別個体として扱い、平均体高を出してみると125.5cmとなる。新田義貞が鎌倉攻めをした時の戦闘で死亡した38頭の鎌倉時代馬は最小109cm、最大140cm、平均129cmであり、群馬県高崎市で出土した27頭の江戸時代馬は最小116.1cm、最大135.1cm、平均126.4cmの体高であった。また、日本の在来馬は林田によると体高129~138cmの中型馬と体高105~122cmの小型馬に分類される。本遺跡のウマの四肢骨から得られた推定体高は、平均値で見ると、上記の鎌倉時代馬や江戸時代馬にいくぶん劣り、日本の在来馬の小型馬と中型馬の中間であることが分かる。しかし注目されるのは、標本番号27トレ522の破損した焼

骨で、全員から直接推定体高を求ることはできないが、27トレ486出土の焼骨との大きさの比から換算してみると、159cm前後の体高が得られる。当時としては、日を見張る程の大形のウマもいたようである。

f. その他の骨

上記の骨以外に、ウマのものと思われる対合片が3片、胸椎が1片出土している。

2. Yトレチ

Yトレチからは26木の上顎臼歯と12木の下顎臼歯が出土している。多数の個体由来する馬歯がこのように広い範囲にわたって散在している場合はすべての歯を正しく歯種判定することは不可能に近く、これを個体ごとに分けることは、さらに困難である。ここでは多少の誤りも含まれることを承知して、歯種判定のできそうな比較的保存良好な歯に限って、色調、出土地点、計測値、形態的特徴などをもとに個体分類を試みた。その結果、これらの歯は少なくとも5頭のウマに由来していることが分かった。推定年齢は3.5才が1頭、4~5才が1頭、6~7才が1頭、8~9才が1頭、12~13才が1頭である。歯種判定のできないこの他の歯を含めて、特に病変の認められる歯は存在しない。どれも中型または小型在来馬相当の大きさのウマと推定される。

3. Zトレチ

このトレチからは3個体分のウマに由来する7木の臼歯が出土している。

a. 1号馬

*時代：平安時代初期

表15 Yトレチ馬下顎臼歯計測値

資料番号	Yトレ5 1A41	Yトレ21	YトレII	Yトレ12	Yトレ19	Yトレ13	Yトレ17	YトレH6G H115E	YトレT 2 43
推定個体番号	?	?			?			?	?
推定年齢	3.5才	4~5才			6~7才			8~9才	?
左 右	L	R	L	L	L	R	R	R	R
重 量	P ₂	M ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃	M ₁ ? M ₂ ?	M ₂ ?
歯冠長	咬合面 中央	29.6 32.7	28.3 29.4	29.5 28.5	27.5 26.1	26.8 25.4	26.3 25.2	30.2 28.7	25.1 25.2
歯冠幅	咬合面 中央	12.3 13.9	10.9 11.3	14.8 15.5	16.0 15.6	15.2 15.3	12.2 11.9	12.7 12.2	14.4 13.7
歯茎	咬合面 中央	11.1 11.5	8.7 10.9	15.1 16.0	16.0 14.7	15.6 14.8	12.6 12.6	12.0 11.1	13.5 14.1
Eisenmann Levin	55.6 56.3	49.5 54.2	66.0 67.0	64.0 65.0	61.0 62.2	66.2 66.2	60.0 60.0	48.0 48.0	53.8 52.2
下後 遊合 長		8.5	10.7		9.6	9.1	9.3	10.0	8.4
下内 頚片 長			14.5		11.5	11.0	9.5	11.8	8.5
double knot 長	咬合面 中央	12.4 12.7	11.8 11.9	16.4 17.8	15.7 15.6	15.4 15.5	12.5 12.4	13.3 13.0	15.0 14.7
咬合面の傾斜	87°	87°	88°	85°	83°	75°	55°	85°	82°

表16 Zトレント上顎歯計測値

資料番号	Zトレ138	Zトレ137	Zトレ136	Zトレ覆土
推定個体	NO.1			NO.3
推定年齢	7~8才			11~12才
推定歯種	L	L	L	L
M ¹	M ²	M ³	P ^{3?}	
歯冠長 咬合面 中央	23.4	24.1		28.3
咬合面 中央	23.0	23.4		28.3
歯冠長 中火	25.7	23.0	29.3	27.2
歯冠長 中火	26.3	24.2	22.4	27.2
歯冠長 中火	12.3	12.7	13.7	
Eisenmann Levin	52.0	66.2	64.7	
歯冠高 Levin	59.0	73.0	68.0	38.0
咬合面の傾斜	80°	75°	65°	86°
エナメル被覆度	1421	1321	12??	2221
中附歯根 中央	4.0	4.1		5.0
原歯型	4.3	5.2		5.0
原歯高 入	2	2	4	
原歯高 入	2			

*保存部位：3本の左上顎後臼歯

*性別：性別を判断する部位を欠き、不明である。

*年齢：7~8才

歯の大きさは中型在来馬程度の馬格であることを示している。

b. 2号馬

*時代：平安時代前期

*保存部位：3本の下顎前臼歯、後臼歯

*性別：性別を判断する部位を欠き、不明である。

*年齢：4~5才

第三前臼歯では下附歯、下前隣起の全体に末大咬耗が及んでいない。第四前臼歯はこれよりやや咬耗が進んでいる。歯の大きさは中型在来馬よりやや大きめの馬格であることを示している。

c. 3号馬

*時代：平安時代前期

*保存部位：上顎第三前臼歯

*性別：性別を判断する部位を欠き、不明である。

*年齢：11才~12才？

歯が1本知られているだけである。これを第二前臼歯だとすれば「記の推定年齢が得られる。

B. ウシ (*Bos taurus*)

関東地方では古代から主として飼養されていたのがウマで、ウシは少なかったようである。当地方の遺跡から出土する両種の家畜の個体数の違いからもこのことは明らかである。

本遺跡からは3本の臼歯が植立した下顎骨とこれと

表17 Zトレント下顎臼歯計測値

資料番号	Zトレ52 133-2	Zトレ52 133-1	
推定個体番号	NO.2		
性別	右	左	
推定年齢	4~5才	?	?
前歯根 咬合面 中央	27.6	29.0	29.6
前歯根 前歯 中央	30.1	27.1	25.7
前歯根 後歯 中央	10.3	16.8	12.6
前歯根 後歯 中央	14.5	14.8	13.7
前歯根 後歯 中央	12.1	15.0	12.8
前歯根 後歯 中央	15.0	15.0	12.7
Eisenmann Levin	56.0	53.0	77.3
Eisenmann Levin	62.3	63.6	80.1
下後錐谷長			10.3
下内錐谷長			10.8
double last 咬合面 中央	11.5	12.4	14.2
咬合面の傾斜	16.7	15.0	13.3
咬合面の傾斜	85°	82°	75°

同一個体の可能性の強い上顎臼歯2本と中足骨が出土している。

(10) DUCOS のデータを用いて各臼歯の歯冠高指標から年齢を推定すると6才程度が考えられる。

計測値を他の遺跡出土のもの比較してみると、各臼歯とも、一部を除き長野県佐久市の池田遺跡や、群馬県の下東西遺跡、東京都の伊豆子貝塚遺跡出土の歯よりも、歯冠長が大きい。一部というのは、下東西遺跡の上顎第三後臼歯の歯冠長のことである。この個体のものとしては、この歯だけが36.9mmととび抜けて大きい。⁽¹¹⁾ 1種の異常歯なのであろうか。現在在来牛の児島牛との比較では、下顎の臼歯は、いずれも見島牛のオスとメスの中間に位置するが、上顎臼歯は同牛の雄牛のいずれよりも大きい。臼歯も成歯になって加齢すると歯冠長を減ずるので、年齢を考慮しないで精密な議論はできないまでも、上記の比較は一応の参考にはなるものである。⁽¹²⁾ 中足骨の近位端最大幅は、池田遺跡や見島牛のものより大きく、基節骨の大きさも池田遺跡のそれをだいぶ上回っている。

要するに、本遺跡出土のウシは関東及びその近隣の地域から出土した古代牛の中では最大級に属する個体であり、現在在来牛の見島牛と比べても下顎の第三後臼歯の歯冠長以外は大きい。

C. シカ (*Cervus nippon*)

シカの遺骸は下顎骨に植立した後臼歯3本と遊離歯の破片が4本分が出土している。現生の足尾山地産の

表18 27トレンチ下調査牛骨計測値・比較表

遺跡名	明神	下東西	池端	伊豆子*	見島牛
時代	平安	奈良	奈良~平安	出生	現牛
性別					オス
左、右	L	R			
文献			大江 ¹⁷⁸	宮崎 ¹⁷⁹	西中川他 ¹⁸⁰
第一後臼歯	歯冠長 歯根幅 歯冠高	31.2 24.4 45.4	31.3 24.6 45.3	36.9 27.6 36.3	29.3 23.7 34.7

*著者の算出による平均

表19 27トレンチ下調査牛骨計測値・比較表

遺跡名	明神	下東西	池端	伊豆子*	見島牛
時代	平安	奈良	奈良~平安	出生	現牛
性別					オス
左、右	L	R			
第一後臼歯	歯冠長 歯根幅 歯冠高	27.6 17.1 21.4		22.3 27.1 29.0	29.6
第二後臼歯	歯冠長 歯根幅 歯冠高	41.8 16.7 39.1	41.6 16.9 28.6	37.8 38.2 42.3	39.6

表20 ウシ左中足骨計測値・比較表

資料名	明神 27トレンジ	泡瀬	足島牛*	現代無毛和牛△	現代有毛和牛△
時代	平安	奈良~平安	現生		
文献		宮崎 ¹⁸¹	仙波 ¹⁸²		
保存全長	61.6+				
近位端最大幅(Bp)	51.3		43.0	44.0	60.6

*著者の算出による平均

表23 シカ下顎臼歯計測値・比較表

	資料名 27トレンジ	足尾山地
時代	平安	現牛
第一後臼歯	歯冠長 歯根幅 歯冠高	16.3 11.1 11.9
第二後臼歯	歯冠長 歯根幅 歯冠高	19.9 11.4 16.0
第三後臼歯	歯冠長 歯根幅	21.9± 15.3

表25 シカ脛骨計測値・比較表

資料名	明神27トレンジ	足尾山地△
時代	平安	現牛
保存全長	113.6	
近位端最大幅	49.8	55.6
近位端最大高さ	54.1	63.0

表21 ウシ類椎(27トレンジ)計測値

計	種	部	位	計測値
前頭筋突起から後頭筋突起までの長さ	(Gpa)			99.1
前頭筋突起から後頭筋突起までの長さ	(Rpua)			66.0+
後頭筋突起から後頭筋突起までの長さ	(Rpaci)			57.3
椎頭	頭	最	大	細
椎頭	頭	最	大	高

表22 ウシ基節計測値

明神資料名	前肢 27トレンジ	後肢 27トレンジ
外腰帶の最大長(Gpe)	62.7	62.3
直位端最大幅(Bp)	27.8?	28.0
遠位端最大幅(Bd)	28.4+	31.8

*著者の算出による平均

表24 シカ横骨計測値

資料名	明神27トレンジ
保存全長	289.9
脛骨中央幅	28.5+

表26 シカ踵骨計測値・比較表

資料名	明神27トレンジ	足尾山地
時代	平安	現牛
最大長(GL)	59.1	88.5
最大幅(CB)	32.6	27.0

表27 イヌ頭蓋骨計測値・比較表

遺跡名番号	明神27トレンジ	中世	村木版 ¹⁸³	村木版 ¹⁸⁴	豪犬△	豪犬△
時代	平安	豪犬	中世	中世	現生	
頭骨全長	148.06	151.6	175.3	158.3	159.5	151.0
頸骨弓幅	90.6	91.4	96.1	99.2	97.0	99.0
頸骨弓高	60.8	69.3	54.8	58.0	60.8	59.0
L ¹ - M ¹	82.6					
C - M ¹	63.0					
P - M ¹	55.3					

*著者の算出による平均

オスの臼歯の大きさに比べて、かなり大きいことなどから、オスの可能性が強い。人泰司の咬合歯の観察による年齢査定法によると3~4才程度の年齢が推定される。

歯のほかに、椎骨片、脛骨片、頭骨が出土しているが、いずれの計測値も現生足尾山地産のものを上回る値を示している。四肢骨も骨端は癒合が完了し、すべ

て成獣のものである。四肢骨と臼歯との個体関係は不明である。

D. イノシシ (*Sus scrofa*)

右上顎第二後臼歯の破片が出土している。咬頬には咬耗痕がみられず、未だ萌出しきっていなかったようである。林他の示すデータによって年齢を推定してみると、1.5才から2才程度が考えられる。歯冠幅は現生

表29 イヌ臼歯計測値・比較表

遺跡名・標本番号	明神1号犬 27トレ457	明神2号犬 27トレ528	明神3号犬 27トレ145	中里	鶴ヶ島	鎌倉	柴犬	柴犬
時代	平安	平安	古墳	鶴ヶ島	中世	鎌倉	柴犬	柴犬
文献				古時化 ⁽¹⁾	後原始 ⁽²⁾			
12 上顎第一前臼歯長 下顎第一前臼歯長				5.2 4.6	5.3 4.0	4.7 3.8	5.2 4.1	4.8 3.7
13 上顎第一前臼歯幅 下顎第一前臼歯幅				3.7 3.4	3.5 3.0	3.2 2.9	3.6 3.0	3.3 2.7
14 上顎第一前臼歯高 下顎第一前臼歯高				4.6 2.8				
15 上顎第二前臼歯長 下顎第二前臼歯長		8.6	9.6 7.7	9.3 7.1	8.5 6.2	7.8 6.7	7.7 6.6	7.5 6.6
16 上顎第二前臼歯幅 下顎第二前臼歯幅				4.1 4.1	3.5 3.9	3.3 3.3	3.5 3.5	3.5 3.6
17 上顎第三前臼歯高 下顎第三前臼歯高		5.0	4.6 5.0					
18 上顎第三前臼歯長 下顎第三前臼歯長		9.8	9.3 11.4	11.4 9.3	10.3 8.3	9.2 9.4	10.7 8.4	9.9 8.4
19 上顎第三前臼歯幅 下顎第三前臼歯幅				4.5 4.5	4.6 4.6	4.5 4.0	4.9 4.7	4.5 4.3
20 上顎第四前臼歯高 下顎第四前臼歯高		5.0	5.1 6.1					
21 下顎第四前臼歯長				11.1	11.6		10.9	10.2
22 下顎第四前臼歯幅				5.8	5.7		5.8	5.4
23 下顎第四前臼歯高				5.4				
24 上顎第五前臼歯長		16.4	17.6	18.2	17.7	15.8	16.6	15.7
25 上顎第五前臼歯内側長			18.2	19.2	18.4	16.1	17.5	16.3
26 上顎第五前臼歯幅				9.2	8.7	9.3	8.0	8.7
27 上顎第五前臼歯高		8.5	8.6					
28 下顎第一後臼歯長		10.9	12.0	12.2	11.6	10.3	11.2	10.4
29 下顎第一後臼歯後傾				14.6				
30 上顎第一後臼歯前傾			15.5	16.8	15.5	14.3	14.7	14.0
31 上顎第一後臼歯突起高			4.9					
32 上顎第二後臼歯長		6.1		7.0	6.3	5.5	6.4	5.7
40 上顎前臼歯列全長			40.9					
51 下顎第一後臼歯長	22.4		19.5	29.1	19.7	17.8	18.5	17.5
52 下顎第一後臼歯後傾	9.3		8.0	8.0	8.2	7.3	7.6	6.6
53 下顎第一後臼歯高			11.0					
54 下顎第二後臼歯長	10.4		8.7	9.1	8.2	7.0	7.5	7.1
57 下顎全歯長	93.6		86.6	78.9				
59 下顎全臼歯列長	72.7		66.3	71.8				
60 下顎前臼歯列長	37.3		37.0					
61 下顎後臼歯列長	31.4		32.0					
62 下顎第二第三後臼歯長	13.6		12.6					

イノシシより大きい。古代イノシシは現生種よりも一般的には大きいため、歯冠幅の大きさだけでの性別の判断は困難である。

E. イヌ (*Canis familiaris*)

3頭分のイヌが出土している。ここでは1、2、3号犬となざける。いずれも成獣である。

a. 1号犬 (27トレー457)

*時代：平安時代

*保存部位：頭蓋骨

*性別：計測箇所が小さいので、メスの可能性も考えられるが、性別の判定は困難である。

*形態：長谷部の形式区分では小級に相当する。頭蓋骨は繩文犬や柴犬の頭より小さいが、白齒の歯冠長は縦倉材木庵出土の柴犬の頭より大きい。この様にこの個体は頭蓋骨の大きさの割りに歯が大きいという特徴がある。冠状縫合が完全に癒合していないことや歯

表28 イヌ下顎骨計測箇・比較表

資料名	明神2号犬 27トレー528	明神3号犬 27トレー148	中里	材料	材木庵*	材木庵†	柴火井	柴火井
時代	平安	古墳	昆文	中世	現生			
文献			宮崎佐**	五原他***	五原他***			
1 下顎骨全長(角より)	132.0	121.9	117.9	127.9	117.9	115.8	110.2	
2 下顎骨全長(頭より)	135.7	123.8	116.2	129.0	115.6	115.9	110.1	
3 下顎骨長(頭より犬歯後縫まで)	117.8	122.4	96.8					
4 上顎より第一前臼歯間縫までの距離	110.2	102.7	97.4					
5 下顎骨長	94.7	85.4	99.3					
6 下顎根長	43.4	38.0	37.0					
7 下顎根高	45.6+	49.0	45.9	52.0	47.3	44.7	41.4	
8 下顎根高(歯尖起後縫まで)	26.2	23.0	21.3					
11 下顎根幅	35.1	32.2	31.0	33.7	29.1	27.2	26.1	
14 下顎根厚	6.9?	6.7	4.6					
15 下顎体高(第三後臼歯の際)	27.6	26.5	22.0					
16 下顎体高(第二後臼歯の後)	27.0	25.3	22.0	24.9	22.3	19.3	18.1	
17 下顎体高(第一後臼歯の中央における)	27.7	24.6	21.2			19.2	17.9	
18 下顎体高(第一後臼歯、第四後臼歯間)	26.8	23.4	19.3			18.9	17.4	
19 下顎体高(第四前臼歯中央における)	27.1	24.3	19.1					
20 下顎体高(第一・第二前臼歯間ににおける)	24.3	19.7	17.3					
21 上顎体高(第二前臼歯中央における)	24.8	20.4						
22 下顎体厚(第一前臼歯にかけらる)	22.0	18.6						
23 下顎体厚(脇面と下面下点における)	23.3	20.0	15.7					
24 切歯根高	65.4		58.6					
25 上顎根高(第一・第二前臼歯下方における)		10.4	11.1	11.4	9.9	9.1	8.4	
26 下顎根厚(第二・第三前臼歯間下方)		10.4	10.3					
27 下顎体厚(脇面中央)		11.4	11.0					
28 下顎結合面	35.4	35.0	27.0					
29 下顎結合面	15.2	15.2	11.0					

*筆者の測定による平均

表29 ヒト右上腕骨計測箇

資料名	明神 27トレー708B	三ツ寺遺跡	日本人男	日本人女
時代	6世紀	6世紀	現代	
文献		宮崎**	宮崎***	
保存骨長	167.2	187.1		
骨幹中央最大幅	17.9	19.2	19.9	17.0
骨幹中央最小幅	14.1	15.2	16.3	13.1
骨幹中央横径	14.3	17.9		
骨幹中央矢状径	17.5	20.4		
骨幹最小周	51.0	58.8	63.2	56.1
骨幹中央周	53.5	60.7		
骨幹断面指数	78.8	79.1	81.9	77.1

注) 表中の計測単位はmmである。

の咬耗があまり著しくないことから成績ではあるがまだ若い個体で、年齢を増せばあるいはもう少し頸蓋骨も大きくなるのかもしれない。

b. 2号犬 (27トレ528)

*時代：平安時代前期

*保存部位：右下顎骨

*性別：計測値が大きいので、オスの可能性も考えられるが、性別の判定は困難である。

*形態：下顎骨全長などから判断して、この個体は現生の甲斐犬の大さきにはほぼ相当し、7頭の獵犬と比べても、最大級の部類に入る個体である。

c. 3号犬 (Yトレ148)

*時代：古墳時代

*保存部位：左右の下顎骨、左上顎骨

性別：判断材料に乏しく、性別の判定は困難である。

*形態：下顎骨の大きさなどから判断して、柴犬と甲斐犬の中間ほどの大きさで、獵犬の大さきとメスの中間の大きさである。

F. 板鰓類 (*Elasmobranchii*)

*時代：平安時代

*保存部種：椎骨

椎体の径33.6mmのサメ類椎骨 (YトレJ-16G) が1個出土している。食料というより祭祀的意味合いで持ち込まれたものであろうか。

G. ヒト (*Homo sapiens*)

*時代：古墳時代（6世紀初頭）

*保存部位：右上腕骨骨幹部

*形態：三角筋後粗面、大結節線の発達が弱く、計測値も小さくて、現代日本人の女性のそれを下回っている。したがって女性のものである可能性もあるが、成人しきっていない個体であるのかもしれない。三ツ寺I遺跡の尼館をめぐる環のなかでも6世紀初頭のヒトの左上腕骨が出土しているが、本資料のほうがいずれの計測値でも小さい。三ツ寺I遺跡出土の人骨のような肉食動物による咬痕は見当たらない。

3. むすび

歯骨類が出土したのは、主として旧河道跡からで、古墳時代から平安時代前期に及んでいる。種類と推定最小個体数はウマ11、ウシ1、シカ1、イノシシ1、イヌ3、ヒト1である。

「肥」によれば、古代遺跡のなかで溝からウマ、ウシ、シカ、イノシシなどが出土した例は兵庫県神戸市古田南遺跡、奈良県天理市布留遺跡、奈良県大和郡山市傳

田遺跡、京都市大蔵遺跡などがあり、いずれも附記あるいは五穀豊穣を祈願する殺馬・殺牛の祭祀が行われた場所である可能性が指摘されている。また、群馬県内においても、三ツ寺I遺跡の居館跡をめぐる溝の中からウマ、ウシ、シカ、イノシシ、ヒトが出土しており、祭祀に用いられた犠牲獸の可能性も考えられて¹⁹いる。本遺跡の獸骨類も、時代はやや下るもの、旧河道跡から出土していることや、種類の構成が上記のそれにきわめて近似している。その上、どの種類も比較的の若く、自然死する年齢にはまだ達していないなどのことから、犠牲獸とする見方もできる。

特に気になるのは、三ツ寺I遺跡と本遺跡からただ一点ずつ出土している人骨で、6世紀のものという時代的一致点がある上に、共に部位が上腕骨に限定されているということである。このような出土部位の共通性は、単なる偶然なのか、あるいは祭祀との関連で何か意味があるのかは今後の資料の増加を待たないと旨及できない。

引 用 文 献

- 1 Eisenmann, V., M. T. Alberdi, C. De Giuli, and U. Staesche (1988) *Studying fossil horses*. E. J. Brill.
- 2 Levin, M. A. (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horses teeth. In Wilson, B., C. Grigson, and S. Payne. (eds), *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*, 223-250. BAR British Series 109.
- 3 Duerst, J. U. (1926) *Vergleichende Untersuchungs-Methoden am Skelett bei Säugetieren*.
- 4 斎藤弘吉 (1963) 大判動物骨格計測法。私家版。東京。
- 5 Driesch, A. Von Den. (1976) *A guide to the measurement of animal bones from Archaeological sites*, Peabody Museum Bulletin. Harvard University (1)
- 6 Martin-Salzer. (1957) *Lehrbuch der Anthropologie*, Stuttgart. Bd. 1.
- 7 Gouinoux, A. and G. Barrier. (1982) *The Exterior of the Horse*. J. B. Lippincott. Philadelphia.
- 8 シンボン, G. G. (1979) 馬と進化。(長谷川義重監修・原田俊治訳) どうぶつ社。東京。
- 9 林田慶幸 (1970) 日本在来馬の系統に関する研究。日本中央競馬会。
- 10 Grigson, C. (1982) Sex and age determination of some bones and teeth to domestic cattle: a review of the literature. In Wilson, B., C. Grigson, and S. Payne. (eds), *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*, 7-23. BAR British Series 109. 上り引用。
- 11 家畜解剖分科会編 (1978) 家畜解剖学用語。日本獣医学会家畜解剖分科会、共栄商事。
- 12 岩崎勇夫・黒木正雄・村上隆之 (1972) 開崎馬の死亡と遺骨の測定・第3報。吉崎大学農学部研究報告, 19, 1, P. 295-304

13. 岡部利雄 (1953) 木曾馬について。岡部利雄・松本久喜・三村一編、日本在来馬に関する研究、P. 73-160、日本学術振興会
14. 宮崎重雄 (1986) 鹿野町佐久市施明遺跡の馬と牛の骨について。「池沼」、P. 50-60、佐久市教育委員会・佐久町歴史文化財センター
15. 宮崎重雄 (1985) 野火付遺跡の馬骨について。「野火付遺跡」、P. 157-159、御代出町教育委員会
16. 宮崎重雄 (1985) 吉田村久保八遺跡出土の馬骨・馬骨・「大久保八遺跡」、P. 372-378、吉田村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団
17. 林田重幸・山内忠平 (1957) 馬における骨幹より体高の推定法、鹿児島大学農学部研究報告、6、P. 146-156
18. 松井 章 (1987) 犬毛鹿牧令の考古学的考察、信濃、39巻・4号、P. 1-26
19. 林田重幸・鈴木才司 (1974) 川入遺跡出土の馬骨について、開山原埋蔵文化財調査報告書、2、P. 354-367
20. 林田重幸 (1957) 中世日本の馬について、日本畜産学会報、28、P. 301-306
21. 宮崎重雄 (1989) 上東駒遺跡の馬骨。上東駒遺跡、P. 655-673、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
22. 市川健太 (1991) 日本の馬と牛、東京書籍
23. 大江正直 (1987) 下条西遺跡出土の獸骨・豚骨について。「下条西遺跡」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
24. 西中川聰・松元光春 (1981) 第2号方形周溝墓西側出土の家牛 (*Bos taurus*) 骨。『伊豆子貝塚遺跡』、P. 476-485、日本電信電話公社・港区伊豆子貝塚遺跡調査会
25. 仙波輝彦 (1960) 兵庫舞喪城島中期及び後期弥生時代遺跡出土哺乳動物骨の研究、人類学研究、7巻、1~2号、P. 160-227
26. 大槻司紀之 (1980) 遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節検定法、考古学と自然科學、13号、P. 51-73
27. 林 良勝・西田樹雄・堀刀公子・瀬田泰茂 (1977) 日本鹿イノシシの歯による年齢と性の判定、日本獣医学雑誌、39巻・2号、P. 165-174
28. 長谷部昇人 (1952) 犬骨、「吉胡貝塚」、P. 146-150、文化財保護委員会
29. 宮崎重雄・三島弘幸・古田謙一 (1987) 中出遺跡の動物遺体、「中出遺跡2」、P. 3-62、鹿児島新幹線工事遺跡調査会
30. 成原信生・小野寺 寛 (1987) 鶴丸村木座遺跡出土の中世犬骨、人類学雑誌、95巻・3号、P. 361-397
31. 成原信生・小野寺 寛 (1986) 田原川遺出土犬骨の形態的特徴について、「田所貝塚II」、P. 589-672、宮城県教育委員会・地政省東北地方建設局
32. 関根正之 (1956) 犬の骨格に関する比較解剖学的考察、日本獣医畜産大学紀要、5、P. 43-60
33. 宮本博人 (1926) 現代日本人人骨の人類学的研究第一第2部 上肢骨の研究、人類学雑誌、40巻、6, 7, 8号、P. 221-325
34. 宮崎重雄 (1988) 三ツ寺1号遺跡出土の豚骨類について、「三ツ寺1号遺跡」、P. 264-282、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社
35. 土肥 幸 (1983) 日本古代における犧牲馬、文化財論叢、P. 383-402、京良國立文化財研究所

元總社明神遺跡の地層・地形分析

パリノ・サーヴェイ株式会社*

1. はじめに
2. テフラ分析
3. 放射性炭素年代測定結果
4. 考察

1. はじめに

群馬県前橋市のうち、北から南に向かって流れる利根川の右岸の地形は、榛名山東面にひろがる相馬ヶ原原状地と前橋台地から構成されている。これらは比較的緩傾斜の原状地や台地は、幾筋かの河川によって刻まれている。河川の大部分は榛名山に源を発し相馬ヶ原原状地を流れ、さらに前橋台地を貢献して利根川や烏川に注ぐ。これらの河川は、扇端部において相馬ヶ原原状地を下刻しており、河谷内に幅の狭い谷底平野を形成している。元總社明神遺跡は、これらの河川の一つである牛池川の谷底平野内に位置している。

発掘調査に伴って作成された地盤断面観察の結果、明らかにされた本遺跡Yトレンチの模式的な地質横断面を図1に示す。

元總社明神遺跡の発掘調査では、テフラ（火山碎屑物）および河川堆積物によって埋没した水田を中心と

する遺構が検出された。このような遺構の立地には、当然当時の地形環境が大きく関与しており、遺跡の立地の問題を解くうえで、地形の生い立ちすなわち地形発達史を明らかにすることが非常に重要になる。この分析では地形の生い立ちを探るために基本的な情報のうちの一つ、地層の堆積年代を知ることを目的として、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの層位の把握（テフラ分析）と崩壊に富む堆積物の放射性炭素年代測定法（ ^{14}C 法）による放射年代を得ることを試みた。

2. テフラ分析

元總社明神遺跡の発掘調査では、合計5枚のテフラ層が純層として認められた。各テフラ層の層位を図1の中に示す。ここでは、各テフラについて下位より順に元總社明神第1テフラ（Mm-1）から元總社明神第

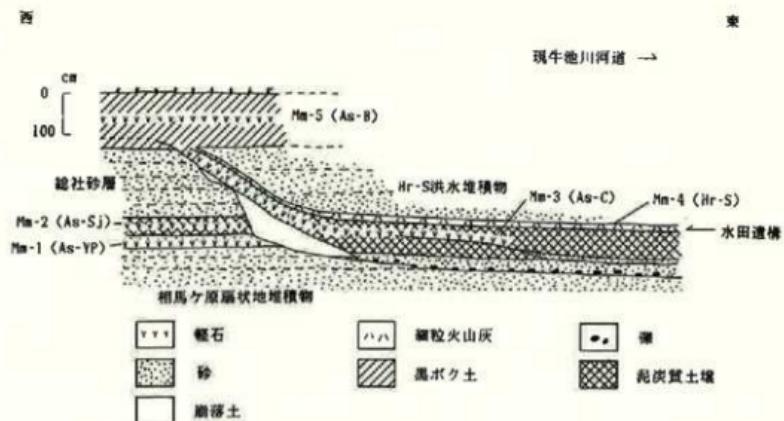


図1 元總社明神遺跡Yトレンチの模式的な地質横断面

* 東京都中央区日本橋室町2-1-1三井ビル

5テフラ(Mm-5)と呼ぶことにする。各テフラについてはテフラ分析を行い、特徴を把握した。テフラ分析とは、試料約15gを超音波洗浄し、残った粗粒の粒子について実体顕微鏡下で観察して、含まれる木質物質の特徴から示標テフラとの同定を行う分析である。テフラ分析の結果を表1に示す。分析結果を加味して、以下各テフラの特徴を記載する。

元総社明神第1テフラ(Mm-1)：台地を構成する相馬ヶ原原状地堆積物の最上部にある。層厚22cmの白色軽石層である。上部に凝灰質の砂層を載せる。軽石の最大径は16mmで、その発泡は良い。遊離結晶を多く含む。含まれる重金物は、量の多い順に、斜方輝石、单斜輝石である。層相や重金物組成から、本テフラは約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-Y-P, 新井, 1962, 田口ほか, 1984)に対比される。

元総社明神第2テフラ(Mm-2)：相馬ヶ原原状地堆積物と總社砂礫の間の黒泥中に認められる層厚5cmの降下軽石層である。含まれる軽石は灰色であり良好に発泡しており、その最大径は8mmである。含まれる重金物は量の多い順に、斜方輝石、单斜輝石である。本テフラは、その特徴から浅間一總社軽石(As-Sj, 早田, 未発表)に対比される。As-Sjの噴出年代は、Ak-Y-Pの上位に屬する時代早期の遺物が出土している地点があることから、およそ1万年前と考えられている(早田, 未発表)。なお本遺跡において直下の黒泥の放射年代測定を行う予定である。

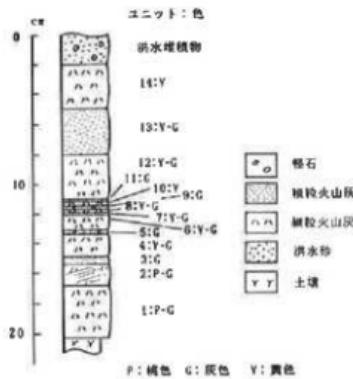


図2 元総社明神遺跡における櫻名一渋川テフラ層(H-S, FA + FPF-1)の層序

が、後述のように現在測定中である。

元総社明神遺跡第3テフラ(Mm-3)：谷底平野の基底部、砂礫層の上位に発達した泥灰層中に挟まれる、層厚8cmの降下軽石層である。軽石は新鮮な場合白色を呈し、場合によっては黄褐色に変色している場合もある。含まれる軽石の最大径は28mmと粗粒で、比較的良く発泡している。含まれる重金物は量の多い順に斜方輝石、单斜輝石である。本テフラは、その特徴から、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に対比される。

元総社明神遺跡第4テフラ(Mm-4)Mm-3の上位にある成層したテフラである。本テフラ層の直下からは、水田遺構が検出された。本テフラの詳細については、図2に示す。本テフラには角閃石や斜方輝石を含む白色軽石が認められる。軽石の最大径は4mmで、あまり発泡していない。本テフラは、層相などから6世紀初頭に櫻名火山二ヶ岳火口から噴出した櫻名一渋川テフラ層(Hr-S, 早田, 1989; FA + FPF-1, 新井, 1979)に対比される。なお、牛滝川の河谷内において、本テフラの直上には間に時間間隔を置かず分厚い(層厚約200cm)成層した洪流水堆積物が認められる。これらの堆積物のうち、少なくとも最下部の堆積物は、櫻名一渋川テフラ層の堆積に伴って発生した洪水堆積物(早田, 1989)の可能性が大きいと考えられる。

元総社明神遺跡第5テフラ(Mm-5)：台地の最上部を覆って堆積する暗褐色の黒ボク土中に挟まれる降下テフラ層である。大きく2層に区分される。下部は厚さ12cmの黒灰色粗粒火山灰層、上部は厚さ4cmの褐色がかかった褐色の細粒火山灰である。本テフラに含まれる重金物は、量の多い順に斜方輝石、单斜輝石である。本テフラはその特徴から、天仁元年(1108)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に対比される。

3. 放射性炭素、年代測定結果

本遺跡では、浅間一總社軽石層(As-Sj)の噴出年代を知るために、As-Sj直下の黒泥を試料とした。測定には、As-Sj直下の黒泥層のうち最上部2cmの黒泥を用いた。

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。結果は、 $11,170 \pm 190$ y. B. P (9220 B.C.)であった(学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書参照・50頁に掲載)。

表1 元總社明神遺跡テフラ分析報告

テフラ	層厚	軽石の最大径	軽石の発泡度	重鉱物組成	対比されるテフラ
Mn-5	16	2	あまり良くない	opx, cpx	As-B
Mn-4	15	4	あまり良くない	ho, opx	Hr-S (FA)
Mn-3	8	28	比較的良好	opx, cpx	As-C
Mn-2	5	8	あまり良くない	opx, cpx	As-S
Mn-1	22	16	良い	opx, cpx	As-YP

層厚の単位は、cm。軽石の最大径の単位は、mm。opx：斜方輝石、cpx：單斜輝石
ho：角閃石。

4. 考 察

これまでの分析により得られた年代を基に、元總社明神遺跡付近の地形発達史を考察すると次のようになる。約1.3—1.4万年前ころまで続いた河川の堆積作用により、榛名山東南麓に相馬ヶ原扇状地が形成された。その後しばらく湿地的な環境が続き、泥炭質の土壤が形成された。1万年前を過ぎたころから再び河川の堆積作用が卓越するようになり、相馬ヶ原扇状地の扇央から扇端部にかけて總社砂層が厚く堆積する様になった。そして、元總社明神遺跡付近でも總社砂層がそれまで堆積していた堆層を覆うようになった。

總社砂層の堆積が終了した後、河川の下剝作用が卓越するようになり、牛池川の谷底平野の形成が始まった。谷底平野形成には、右岸の崩壊が発生している。谷底部の砂礫層には绳文時代中期終末から麗文時代後期中葉にかけての土器のほか、弥生時代中期の土器が含まれている。また砂礫層の上位には、泥炭層や砂混じりの泥炭層の堆積が認められ、この中に4世紀中葉のAs-Cが挟まれている。したがって、Yトレーンチで検出された牛池川の旧河道は弥生時代中期以降、4世

紀中葉以前にYトレーンチ付近での砂礫の堆積を終了し、河道は東よりに移ったと考えられる。河道の移動後、Yトレーンチ付近においてHr-Sの堆積まで泥炭質の堆積する湿地的な環境が続いた。なお、As-C降灰後、Hr-S降灰以前のある時期にYトレーンチ東部が牛池川の河床になったことがある。

湿地的な環境のもとで、元總社明神遺跡付近においても、ある時期から水田耕作が始められた。しかし、水田は、6世紀初頭に発生したHr-S (FA) とその後の洪水堆積物によって、埋没してしまったのである。

参 考 文 献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編、10, p. 1-79
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、No.157, p. 41-52
 町田 洋・新井房夫・小田勝夫・道藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財保護委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865-928
 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究、27, p. 297-312

元総社明神遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所*

- 1.はじめに
- 2.試料
- 3.分析法
- 4.分析結果
- 5.考察

1.はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、元総社明神遺跡（27トレンチ・Yトレンチ）における稻作跡の検証および探査を試みたものである。以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

2. 試料

現地調査は1989年6月・8月・10月・12月の4回にわたり実施した。

Yトレンチでの調査地点は、A地点、Hr-F A直下横出向、およびAs-C直下横山面である。このうち水田跡などが検出されていた Hr-F A直下検出面では、水田跡をはじめ畦畔や水路などから、No.1～No.26の26地点 (Fig. 11)、As-C直下畦畔ではNo.1～No.10の10地点 (Fig. 17) について試料を採取した。また、A地点ではVilla層 (Hr-F A直下層) から瓦層 (縄文時代後期～弥生時代中期) について、各層ごとに5～10cm間隔で試料を採取した (Fig. 1)。採取にあたっては、容積50cm³の採土管などを用いた。試料数は計55点である。

27トレンチでは、As-B直下で水田跡とみられる遺構が As-C直下では畦畔を伴う水田跡が検出されていた。試料は、As-B直下の遺構面においては Fig. 38 に示す No.1 と No.2 の2地点で、As-C直下の遺構面においては Fig. 39 に示す No.1 ～ No.7 の7地点で採取した。なお、A・B地点については、土層界面において各層ごとに試料を採取した。試料数は計26点である。

3. 分析法

プラント・オパール分析の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順を行った。

- (1) 試料土の絶乾 (105°C・24時間)、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピース添加 (直径約40μm、約0.02g)

A地点

電子分析天秤により
1万分の1gの精度
で秤量

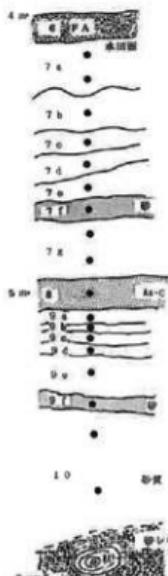


図1 元総社明神遺跡
YトレンチA地点における土層断面と分析試料の採取箇所

- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散 (150W・26kHz・15分間)
- (5) 沈降法による微粒子 (20μm以下) 削除、乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機械細胞壁体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

* 埼玉県大宮市土産175-24

表1 Yトレンチのプラント・オバル分析結果
FA直下

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉)總量 t/10a	ヨシ 個/g	タケ姫科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	0	—	0.50	1,000	—	1,000	35,800	21,000	0
2	0	—	0.50	900	—	2,700	22,600	20,800	1,800
3	0	—	0.50	900	—	3,900	19,900	13,900	1,900
4	0	—	0.50	3,800	—	9,500	27,700	10,500	3,800
5	0	—	0.50	900	—	5,800	18,500	13,700	1,900
6	0	—	0.50	3,800	—	3,800	20,900	8,500	2,800
7	0	—	0.50	3,700	—	18,800	28,300	7,500	2,800
8	0	—	0.50	3,100	—	8,400	25,300	5,200	2,100
9	0	—	0.50	900	—	7,600	25,700	7,600	2,800
10	0	—	0.50	4,700	—	17,100	39,000	5,700	0
11	0	—	0.50	900	—	11,800	22,700	1,900	1,900
12	0	—	0.50	900	—	9,500	12,400	7,600	900
13	0	—	0.50	1,800	—	4,600	8,300	3,600	900
14	0	—	0.50	2,100	—	7,400	19,100	9,500	1,000
15	0	—	0.50	900	—	5,700	13,500	3,800	900
16	0	—	0.50	900	—	6,700	18,200	6,700	900
17	0	—	0.50	900	—	14,800	23,800	7,900	1,900
18	0	—	0.50	3,700	—	12,200	13,100	3,700	900
19	0	—	0.50	1,900	—	13,500	24,100	9,600	900
20	0	—	0.50	900	—	12,300	7,500	4,700	0
21	0	—	0.50	900	—	4,700	21,700	8,400	2,800
22	0	—	0.50	900	—	5,800	14,700	3,900	900
23	0	—	0.50	900	—	7,500	13,200	5,600	900
24	0	—	0.50	0	—	800	2,500	3,300	800
25	0	—	0.50	0	—	2,000	0	5,300	0
26	0	—	0.50	0	—	7,300	0	8,200	0

As-C 直下

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉)總量 t/10a	ヨシ 個/g	タケ姫科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	0	—	0.87	0	—	0	52,000	10,100	0
2	0	—	0.87	0	—	0	26,400	5,700	0
3	0	—	0.87	0	—	1,800	38,500	4,500	0
4	0	—	0.87	0	—	0	23,800	3,200	0
5	0	—	0.87	0	—	800	6,500	800	0
6	0	—	0.87	0	—	800	13,500	4,200	0
7	0	—	0.87	0	—	1,700	28,800	6,100	0
8	0	—	0.87	0	—	1,600	15,000	800	0
9	0	—	0.87	0	—	800	44,100	800	0
10	0	—	0.87	0	—	700	20,100	700	0

A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉)總量 t/10a	ヨシ 個/g	タケ姫科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7a-1	10	9	0.51	1,700	0.74	27,700	20,700	0	0
7a-2	19	8	0.51	800	0.33	6,100	15,900	0	0
7b	27	15	0.51	0	0.00	3,900	20,700	4,700	0
7c	42	8	0.51	0	0.00	0	13,600	900	0
7d	50	10	0.51	700	0.31	1,500	21,800	700	0
7e	60	5	0.97	4,000	1.96	0	23,300	1,000	0
7f	65	6	0.97	0	0.00	0	2,500	0	0
7g-1	71	12	0.61	0	0.00	900	21,300	8,700	0
7g-2	83	12	0.61	0	0.00	900	19,400	2,700	0
8	95	10	0.61	0	0.00	0	2,700	900	0
9a	105	5	0.87	0	0.00	900	20,900	5,400	0
9b	110	2	0.87	0	0.00	900	28,600	900	0
9c	112	4	0.87	0	0.00	700	6,000	2,200	0
9d	116	5	0.87	0	0.00	800	19,200	2,400	0
9e	121	14	1.03	0	0.00	0	13,100	800	0
9f	135	5	1.03	0	0.00	700	18,000	2,200	0
10-1	140	25	1.03	0	0.00	0	25,500	2,100	0
10-2	165	28	1.03	0	0.00	900	8,400	900	0
11	193	—	1.03	0	—	0	4,200	3,400	0

表2 27トレントにおけるプランツ・オバール分析結果

A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(根乾量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亞科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
6	5	10	0.40	0	0.00	0	0	0	0
7D1-1	15	15	0.42	800	0.46	3,400	2,500	0	0
7D1-2	30	15	0.40	2,000	1.24	26,100	20,800	2,000	0
7S1	45	7	1.00	0	0.00	0	700	0	0
7D2	52	18	0.50	800	0.74	2,400	22,300	800	0
7S3	70	10	1.00	0	0.00	0	6,000	0	0
7D3	80	15	0.51	1,800	1.39	6,300	4,500	1,800	0
8	95	10	0.50	0	0.00	0	800	0	0
9-1	105	5	0.36	2,400	0.41	5,600	19,300	2,400	0
9-2	110	—	0.36	0	—	26,900	18,500	0	0

B地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(根乾量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亞科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
8	87	13	0.50	0	0.00	0	0	0	0
9a	100	5	0.40	4,000	0.82	8,900	8,100	0	0
9b	105	3	0.50	0	0.00	3,000	6,100	1,500	0
9c-1	108	8	0.50	8,600	3.54	12,400	17,200	1,900	0
9c-2	116	8	0.50	0	0.00	900	15,400	2,700	0
9c-3	124	—	0.50	0	—	900	22,900	0	0

As-B 直下地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(根乾量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亞科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
Na1	0	10	0.70	4,100	2.88	1,000	19,600	1,000	0
Na2	0	10	0.70	4,700	3.30	900	13,300	900	900

As-C 直下地点

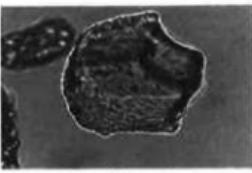
試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(根乾量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亞科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
Ne1	0	10	0.50	6,000	3.09	2,500	7,700	800	0
Ne2	0	10	0.50	1,400	0.72	8,200	11,900	700	0
Ne3	0	10	0.50	2,400	1.24	14,800	9,100	1,600	0
Ne4	0	10	0.50	4,100	2.05	2,500	6,700	0	0
Ne5	0	10	0.50	4,000	2.06	6,400	12,000	0	0
Ne6	0	10	0.50	2,500	1.24	6,500	5,100	1,700	0
Ne7	0	10	0.50	1,300	0.62	1,300	8,300	600	0



1 イネ As-C直下 No.1 ×180



2 イネ As-C直下 No.2 ×180



3 ヨシ属 A地点 VHD-1 ×180

4 タケ亞科(ネザサノコ)
A地点 IX-2 ×180

5 ウシクサ族 B地点 IXC-2 ×180



6 不明 A地点 VIIID-1 ×180

プランツ・オバールの顕微鏡写真

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞壁酸素1個あたりの植物体乾燥重量、単位： $10^{-3}g$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（稟実重は1.03）、6.31、0.48である。（杉山・藤原1987）。

4. 分析結果

プランツ・オパール分析の結果を表1（Yトレンチ）、表2（27トレンチ）および図2-1（Yトレンチ）、図2-2、2-3（27トレンチ）に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ類、ウシクサ族（スキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなど含まれる）の主要な5分類群に測定した。

5. 考 素

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプランツ・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプランツ・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点（検出面）ごとに稻作の可能性について検討を行った。

Yトレンチ

(1) A地点について

ここでは、Hr-F A直下のVIIa層から縄文時代晚期～弥生時代中期とされるX層について連続的に分析を行った。その結果、VIIa層、VIIb層およびVIIc層でイネのプランツ・オパールが検出された（図2-1）。このうち、VIIc層では密度が4,000個/gと比較的高い値であり、明らかなピークが認められた。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

VIIf層以下では、イネのプランツ・オパールはまったく検出されなかった。したがって、同地点ではVIIc層の時期に稻作が開始されたものと推定される。

(2) Hr-F A直下検出面について

同検出面では、No1～26地点について試料が採取された。このうち、No1～3は崖の斜面、No4～11は小区画水田跡の水田面および畦畔上、No12は水路の上手に、

No13は水路内、No14、16、17、19、20、21、22、23は大畔区画内、No15、18は大畔の上、No24～26は台地上（ローム層）である。

分析の結果、台地上のNo24～26地点を除くすべての地点でイネのプランツ・オパールが検出された。このうち、小区画水田跡から採取されたNo4、6、7、8、10では、密度が4,000個/g前後と比較的高い値である。また、直上を Hr-F A で覆われていることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層構造稻作が行われていた可能性は高いと

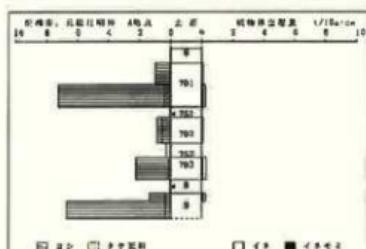


図2-1 YトレンチA地点

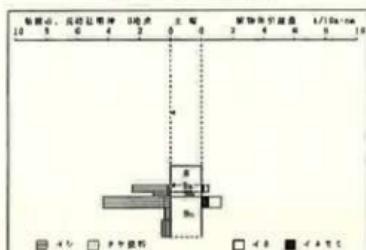


図2-2 27トレンチA地点

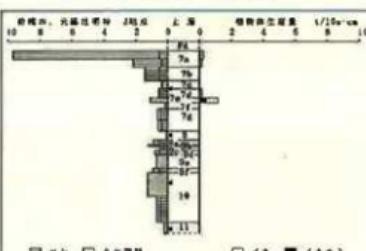


図2-3 27トレンチB地点

図2 おもな植物の推定生産量と変遷
(注) ▲印は50cmのスケール

判断される。その他の地点では、No.18地点で3,700個/gと比較的高い以外は、およそ1,000~2,000個/gと低い値である。しかし、上述のように上層から後代のプラント・オバールが混入した危険性は考えにくいことから、同層の時期にこれらの地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

- プラント・オバール密度が低い原因としては、
 - ①洪水などによって耕作土が流出したこと
 - ②近辺の水田からの混入であること
 - ③稲叢の大部分が水田外に持ち出されていたこと
 - ④稲作が行われていた期間が短かったこと
 - ⑤稲の生産性が低かったこと

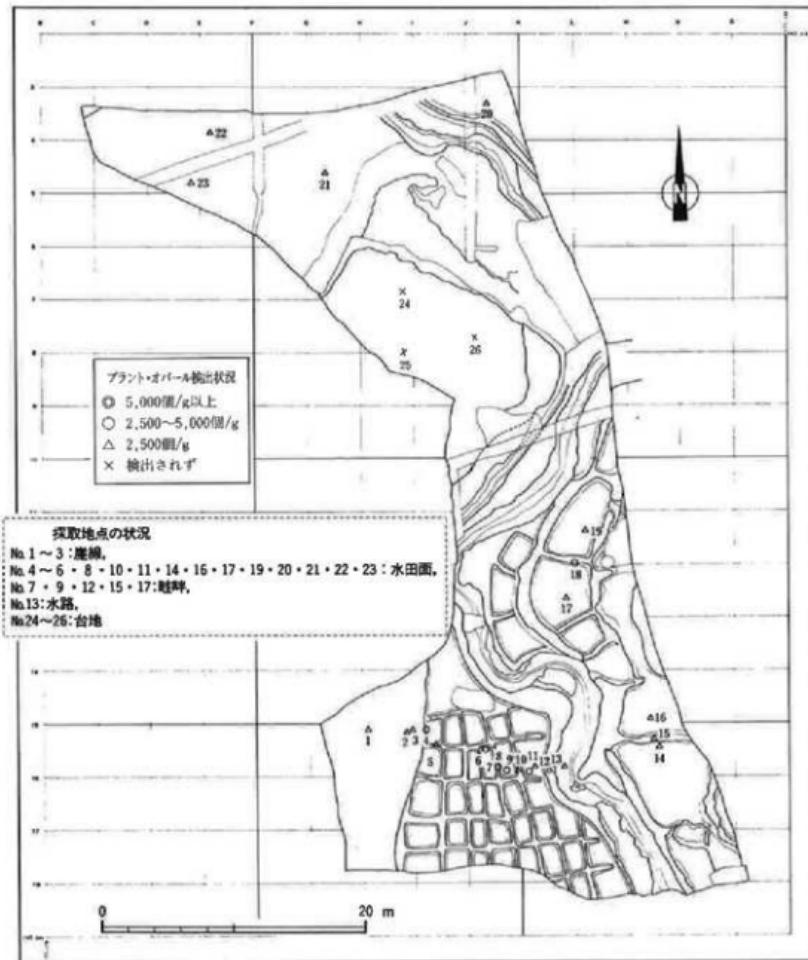


図3 元総社明神遺跡F A直下におけるイネのプラント・オバールの検出状況

⑥土層の堆積速度が速かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

なお、同様山面では、水田耕作面と畦畔でプラント・オパール密度の比較を行なった。当初、畦畔では水田耕作面と比較してイネのプラント・オパール密度は低いと予想されたが、実際には畦畔でも比較的高い値のところがあり、両者の間に明確な差異は認められなかった。このことの原因として、

①畦畔の作りかえがあったこと

②耕塗りの際に水田耕作土を盛上したことなどが考えられる。

(3) As-C直下輸出面について

同様山面では、No.1~10の10地点について分析を行なった。その結果、いずれの地点からもイネのプラント・オパールはまったく検出されなかつた。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は考えにくい。

27トレンド

a. 水田跡の検証

As-B直下層では、畦畔の確認はされなかつたものの足跡状遺構などが検出されたことから、水田跡の可能性が考えられた。同構造面では、No.1とNo.2の2地点で試料が採取された。分析の結果、これらの試料からイネのプラント・オパールが4,100~4,700個/gと比較的高い密度で検出された。また、同層の直上はAs

B層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

As-C直下層では、畦畔を伴う明瞭な水田跡が検出されていた。同構造面では、No.1~7およびA、Bの9地点で試料が採取された。分析の結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は1,300~6,000個/gとばらつきが大きく、平均では3,100個/gとやや低い値である。しかし、直上のAs-C層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層で稻作が行われて可能性は高いと考えられる。

以上のように、As-B直下層およびAs-C直下層で稻作が行われていたことが、分析的に検証された。

b. 水田跡の探査

A地点では、VI層~IX層の各層について試料が採取された。分析の結果、VII D層の各層とIX層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、IX層では上述のようにAs-C直下の水田跡が検出されてい

た。VII D層(As-C混層によってVII D 1、VII D 2、VII D 3の3層に分離されている)では、各層でイネのプラント・オパールが検出されたもの、密度は800~2,000個/gと比較的低い値である。同層は洪水による堆積層とみられていることから、当時この近辺で稻作が行われており、そこからプラント・オパールが混入したものと考えられる。

B地点では、VII層~IX層の各層について試料が採取された。分析の結果、IXa層とIXc層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、IXa層ではAs-C直下の水田跡が検出されていた。IXc層では、プラント・オパール密度は8,600個/gと高い値である。また、直上のIXb層(砂層)ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。このことから、当遺跡ではAs-C直下の水田跡よりも古い時期に稻作が開始されていた可能性が考えられる。

(2) 稲穀生産量の推定

As-B直下およびAs-C直下の水田跡について、そこで生産された稲穀の収量を推定した(層の厚さをそれぞれ10cmと仮定して算出)。その結果、前者では面積10aあたり平均3.1t、後者では平均1.5tと算出された。当時の稻穀の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、種わらがすべて水田内に還元されたと仮定すると、As-B直下水田跡ではおよそ30年間、As-C直下水田跡ではおよそ15年間にわたって稻作が営まれたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山陣跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山一古墳地層。川口市遺跡調査会報告、第10集、p.281~298
- 藤原宏志(1996)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の計数体標本と定数分析法—。考古学と自然科学、9、p.15~25。
- 藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・秋叶遺跡(鹿児島)水田および耕馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa L.*)生産量の推定。考古学と自然科学、12、p.29~41。
- 藤原宏志・杉山真二(1986)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田跡の探査一。考古学と自然科学、17、p.73~85。

民俗事例にみる形代

板橋春夫*

1. 罪いと贋れ
2. 群馬県内における大祓の入形
3. 県内における夏越祓の代表的事例
4. 現代民俗にみる祓いの諸相

1. 罪いと贋れ

人間の身体についた罪や贋れ、あるいは災厄を除去する方法の一つに祓いがある。祓いは物忌みと違って、穢れなどの原因を探り、直接除去しようとする積極的行為を指し、祓物に罪穢をくっつけて除去する呪術であると説明されている。ところで『古事記』によると、黄泉の国から出てきたイザナギノミコトが身につけていた衣服を脱ぎ捨てるが、これは単に禊をするためには素裸にならぬのではなく、黄泉の国の罪穢が付着している衣類などを脱ぎ捨てたとも考えられるのである。いずれにしろ、祓いは身体についた罪穢の付着の除去を第一義としている。罪穢の除去のために祓物を必要とするが、この祓物は魔で物、贋物（あがもの）と呼ばれている。

宮廷の年中行事の中に6月と12月の11日に神今食（じんこんじき）という儀式がある。このときに出される贋物は土器であり、この土器に虫を吹き込むことによってその人の穢れを移すのである。この土器をアマカツといい、贋物を処理する巫子はアガチコと呼ばれた。古代社会にあっては人形（ひとがた）ではなく、巫子そのものがヨリマシであった。これらの儀式を行なう者は鬼人、つまりカタヒトとも呼んだ。

たとえば大阪の住吉大社で7月31日に夏越の大祓が現在も行われている。近世期の『住吉名勝図会』、『住吉松葉大詫』によると、大祓の行列中にアハラヤという14、5歳の童が選ばれ、花笠、黒衣のいでたちで背に櫛のような枝を背負って花馬に乗った、とある。行列が辻の町に着くと、三百人余の供の者たちがこの童をののしる。その声が町中に満ちあふれたといふ。童は神事に先立って重い潔癖を課されており、ばとうされる童は大祓のヨリマシとして扱いがされており、いわゆるカタヒトであった。童へのばとうは、童に人々の穢れを託すという考え方に基づいているからにはばかり

ならないであろう。このように、ヒトそのものが贋物になる場合も少なくなかった。それが次第にモノとしての贋物に移行してきたのである。

現在私たちが目にする祓いの人形は6月と12月の大祓のときのものであろう。6月の大祓は川や海边で行われ、水を身体に浴びせる禊の形をとっている。12月の大祓は6月のそれに準じていたので、次第に重きをおかなくなっていた。6月の大祓は夏越の祓とも呼ばれる。京都市の『東都歲時記』には、橋場神明宮の夏越祓が「社前の川辺に於て執行あり。龍人群衆す。亥の半刻に終る」とされ、「神事終りて參詣の童茅の輪を越さしむ、河辺に廢りたる所には、壁に水をもりて身曾貴川に比するなり、此日底人紙をもて衣類の形に切て堆ものとし川へ投げ」と記されている。この夏越祓は現在でも全国各地の神社で行われている。

2. 群馬県における大祓の入形

さて、ここで群馬県内の民俗事例を管見の範囲で取り上げてみたい。6月と12月の大祓の際に茅の輪ぐるりを実施する神社はさほど多くないが、人形を送る例は多く見られるのである。報告書などによって一覧表にしてみたのが表1である。この表を見て、まず気づくことは大祓の入形送りが館林市、邑楽郡に広く行われていることである。利根川流域に濃厚に分布することを示しているが、宮田茂の調査によれば館林市9例、明和村12例、千代田町1例、邑楽町4例、板倉町5例、実に31例を数えるのである。57例中の半分以上を占めている。もっとも独自のアンケート調査を実施すれば県内全域ではさらに事例の増加がみられるであろう。

沼田市の須賀神社と吾妻町の鳥頭神社で行われる茅の輪祭は、氏子が茅の輪をくぐった後、神社で茅のお祓いをいただいて家に持ち帰る。そのお祓いで身体の罪穢を祓った後に川へ流すというものであり、人形は用いられていないが、贋物すなわち祓物は茅であり、人形とまったく同じ機能を有していると考えてよいだ

* 日本民俗学会会員

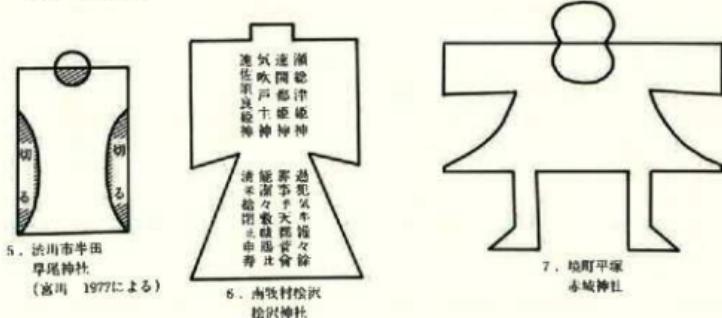
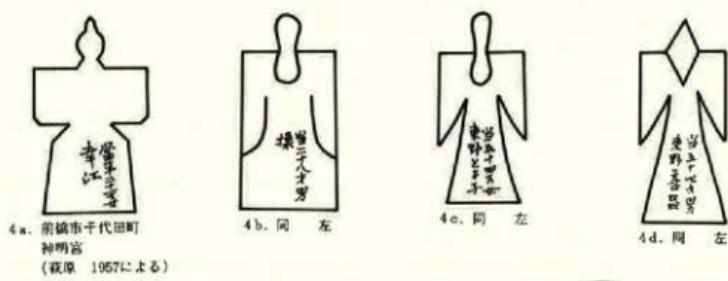
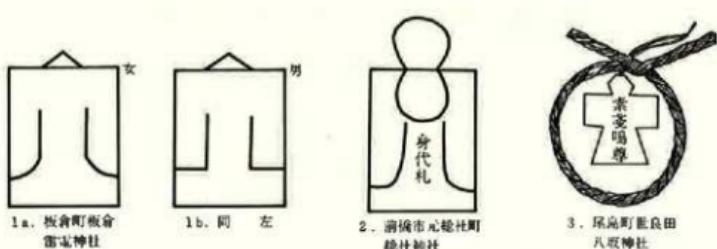


図1 群馬県内の人形各種



ろう。同様な例は北橘村の木曾三柱神社における神にみられる。大祓のときに柳の枝で身体を撫でて、それを利用川へ流すというものである。柳の枝が祓物であり、人形は用いられない。富岡市星田ではガマの葉を用いる。

祭りの執行日は主に6月30日または7月30日、7月31日が多く、あるいはその前後となっている。ついでに6月と12月の2回行っている神社もある。明和村の5社では12月30日の大祓に人形を用いているが、これはすべて同一の神主が担当している。単に12月の大祓に重きを置いただけであるようだ。いずれも夏の禊ぎと共に行われる傾向がみられるのである。

人形は神主や氏子総代が半紙を切って作る例、印刷物になっている例などさまざまであり、形状も決して同一のものではない。板倉町の雷電神社で配っている人形は男女の別がある。前橋市の神明宮でもバラエティに富む人形を配っていたようである。南牧村松沢の人形には朱で祝詞が記されている。前橋市の總社神社の人形には朱で「身代札」とある。

尾島町世良田の八坂神社では毎年12月31日の初折櫛（1月2日まで）のときに茅の輪に模した輪の中に人形をつけた祓物を配る。これは玄関口など人の出入りする所に貼り、災厄が入らないように守るものである。人形には「奉為尊尊」の朱印が押されている。身体の罪穢をこの人形に託して川へ流すというものではない点が若干異なっている。10年ほど前から加藤神主が始めたもので、茅の輪と人形のミニチュアは奈良市から取り寄せている。同じ神主が兼務する境町平原の赤城神社では半紙で人形を切るが、これは古くから行われてきたものである。人形は氏子総代6人分だけ作って、氏子全員を代表させているのである。一般的には家族の人数分だけの人形をいただいてきて、これに自分の氏名や年齢を記入して流す例が多い。富岡市中高瀬の曲事（まがごと）流しにみられる種わらの人生3体などは氏子たちを代表させた形式になっていると考えてよいであろう。

3. 県内における夏越祓の代表的事例

ここで夏越祓が具体的にどのように行われているか、57例中から代表的な4事例を簡略に紹介しておこう。

① 淀川市半田のみそぎ流し

毎年7月31日に行われている。祭り前日に午番の人たちが、利根川の坂東橋下の河原で茅や川草を刈り

取って茅の輪をアーチ状にこしらえる。川辺に河原石を集めて一坪ほどの広さにし、西方に新竹4本を立て、しめ縄を張り祭壇を作った。祭り当日は神主が祝詞をあげ、神事終了後、氏子がアーチ状の茅の輪をくぐって祭壇前に進むと、神主が柳の枝と半紙ハツ切り大の人物を渡してくれる。氏子はこの人物で身体を撫ぜたり、息を吹きかけて罪穢を移し、川に流す。⁽⁸⁾

② 富岡市中高瀬の曲事流し

7月24日の朝、氏子総代らが高瀬神社に集まり、境内にあるシデの枝を切って、これで茅の輪と枝舟を作る。枝舟は長さ2メートル程度で、大人が数人で組くほどの規模である。舟はくずれないように縄2本をわたしておくる。この船に3つのコブと呼ぶべき結び目をこしらえる。午後、神主が来て、まず枝舟の3つのコブに半紙を着せて麻ひもでしばり、頭に半紙とアオイの葉をのせて人形らしく作る。そして形どおりの神事を行った後、行列をなして鶴川に向かう。社殿前で神主が参會者全員にチガヤを1本ずつ手渡す。このチガヤは丸く輪にし、その輪の中に息を吹きかけて身体に付いた罪穢を吹き散らす。境内で茅の輪をくぐって列を組んで出かける。河原に着くと神主は川辺に柳を立て祝詞をあげる。その間に枝舟と茅の輪が流されるのである。⁽⁹⁾

③ 佐波郡境町平原、赤城神社の大祓

毎年6月30日と12月30日に大祓が行われている。かつてはこの大祓は深夜に行われていたが、現在は午後の行事となっている。神主と氏子総代5神社に寄り、玉串とハサミ作りが始まる。玉串は柳の枝で、これに半紙を切ったシデと人形が麻糸で結び付けられる。この玉串は氏子総代6人分だけしか作らないのである。神主による神事が行われ、氏子総代が神前に進み、玉串を奉納する。次にいたん供えた玉串をとり、結び付いている人形で自分の身体を撫でてから再び神前に戻る。⁽¹⁰⁾

④ 鳩楽郡坂倉町、雷電神社の大祓

この大祓は7月31日に行われる。茅の輪は29日、御子洗沼に生じているマコモを用いて出入りの職人が作る。全長は13メートルほどになり、輪状にする前はあたかも大きな龍のようである。実はこの神社の茅の輪は龍を模しておらず、兩方に幼獅の神であることを示している。この茅の輪は31日に利根川へ流されてきたが、昭和62年からは利根川の水量が少なくなったなどの理由により境内でお焚き上げにしている。神社ではあらかじめ印刷した人形を氏子に配布しておく。

この人形に自分の氏名、年齢などを記入し、人形へ息を吹きかけ、身体の罪穢を移す。人形は一の鳥居を作られた茅の輪をくぐるときにマコモの間にはさんでおく。そうして拝殿参拝後はこの茅の輪をくぐらなければならぬ。それは自らの罪穢を茅の輪に移したためであり、万が一、帰路に茅の輪をくぐると多くの不幸がついてくることが起こるとされた。

4. 現代民俗にみる祓いの諸相

このように人形あるいはそれに類する茅、柳などのいわゆる祓物は、自らの身体を撫ぜる、あるいは息を吹きかけるという行為によって罪や穢れといったものを祓うという基本型がそのまま現行の民俗には生き残っているのである。富岡市中高瀬の事務流しは一見古風にみられるが、紙製の人形は決して近世以降のものではないのである。たとえば水野正好は「まじないの考古学事始」の中で「延喜式」に見える資料では天皇の場合は、毎月晦日に使用し計720枚の人形を使用しています。新嘗祭には384枚、神今食祭に768枚が必要とされています。天皇の年間の必要人形数は1872枚となります」と述べ、この人形は鉄、木、紙、草、わらなどバラエティに富んでいるのである。

人形に身体の罪穢をつける方法は大祓のときだけにみられるのではない。民俗の中には数多くの呪術的行為にその考え方を見出しができる。たとえば尾島町大館では冬に風邪をひいたりすると、風邪の神送りをした。これは炒った大豆をひと握り半紙に包んだものに風邪をひいた者やその家族が息を吹きかけて三本辻に捨ててきた。半紙の中には銅銭を入れたりする

ことでもあったが、この三本辻で半紙に包んだ大豆を拾ったりすると風邪がついてしまうといわれた。また、三月節供に古くなった紙人形を流す例が県内各地にみられる。この行為は、人形を流して祓いをする行事を基礎にしていると考えられる。人祓の人形もこういった民俗事例と決して無縁ではないのである。

注

- 1 宮山 登 (1983)『神と仏』『日本民俗文化大系』第4卷小学校 P.39
- 2 三鶴 道 (1983)『年中行事における禊・祓・物忌み』『日本民俗研究大系』第3卷 国學院大學 P.270
- 3 上井久義 (1983)『女性用具の伝統』『日本民俗文化大系』第4卷 小字館 P.165
- 4 佐々木に同じ。P.167
- 5 高瀬月平『東都成時記』東洋文庫
- 6 宮田 茂 (1986)『茅の輪くぐりの習俗』『枚倉町史通史編下巻』P.720-725
- 7 緑原 進 (1957)『郷土芸能と行事群馬県』緑手書 P.334
- 8 研究者調査。『鹿児島市誌第4卷民俗編』(1984) P.550-551を参考した。
- 9 研究者調査。『富岡市史民俗編』(1984) P.645-657を参考した。
- 10 今子雄一郎 (1986)『鹿児島の祭』『壇町史編さん室』P.48-53
- 11 佐々木に同じ。著者も1988年に茅の輪講座を行っている。
- 12 底尻階級にあっては、貴重な和紙をたくさん持つておれば身近に入手可能な素材である草木などを用いるほうがより自然であることは十分資質であろう。
- 13 水野正好 (1978)『まじないの考古学事始』『どるめん』18号 P.15
- 14 神野善治 (1978)『人形送り』『講談』日本の民俗 6 有機文 P.100

(追記) 再校後に、高崎市教委発行の『豊川・八幡の民俗』(1989)に人形の事例が列入で報告されていることに気付いた。人形に名前を書いて八幡様へ奉納する。八幡様では、お祈りをして豊川へ戻してくれた。(P.178) とある。

大祓に人形等を伴う行事一覧表

No.	場所	神社名	日 時	行事の名称	人形等	出 典
1	前田市中町	真賀 神社	9月1日	茅の輪祭	茅のお祓	『豊川の神事』P.50
2	佐賀郡白石町久古	鳥頭 神社	7月31日	#	#	『#』P.43-44
3	野洲郡会津町坂井	春名 神社	7月20日既	—	人形	『會津町の民俗』P.174
4	#	磐永	八幡 橋?	ミソザ祭り	#	『#』P.174
5	鹿児島市平川	平尾 神社	7月31日	ミソザ祭り	#	『鹿児島の祇園と那十三歳と祭札』P.291-294
6	鹿児島市松井町坂本	熊野 神社	7月20日 または8月7日	暑氣祓	#	『松井町の民俗』P.164
7	安中市敷島	唐ノ里 神社	7月30日	—	#	『坂倉町史別冊5』P.132
8	#	下秋間	—	8月1日	ミソザ祭り	『安中市秋間の民俗』P.213
9	甘楽郡御牧村麻糸沢	足佐 神社	7月21日	—	#	『御牧村誌』P.1438
10	#	下赤瀬	—	9月15日	—	『#』P.1436
11	#	松沢	松沢 神社	7月31日	—	人形
12	芦北町妙義町大牛	妙義 神社	7月30日	人祓	人形	『妙義の周辺』P.271
13	富岡市一之宮	貫前 神社	6月30日	名越祓	#	『一之宮貫前神社縁合報告書』P.89-91

14	# 宇高瀬	吉 鹿 神 社	7月24日	典事度し	シテのわら人形	筆者誕生
15	# 早田	八 善 神	7月16日 ~18日のいづれか	ミヅガ度し	ガマの笠	『富岡市史民俗編』P434
16	# 中守川	真 前 神 社	6月30日	ミヅガ度り	ママコ(人形)	『#』 P635
17	# 丹生	丹 生 神 社	7月25日	道樂祭り	人形	『#』 P638
18	# 上小野	—	6月36日	度略	#	『#』 P638
19	藤岡市藤岡	圓 助 神 社	6月30日	——	#	『多野藤岡地方』P542
20	#	浅 屋 神 社	#	#	#	『#』 P542
21	勝多郡北島村地田	木曾二柱神社	7月末	水無月祭	柳	『勝多勝社』P734
22	前橋市元蛇桂町	鶴 伴 神 景	6月30日 12月30日	人歌式	人形	丹羽郡二郎神社
23	前橋市千代田町	神 明 宮	6月30日 12月31日	大祭	#	『郷土貴賤と行事時例』P333~334
24	佐波郡平野町	赤 城 神 合	# #	#	#	『播磨の祭』P48~53
25	# 乗岡	末 周 神 社	#	#	#	筆者誕生
26	新田郡島崎町世田	八 墓 神 社	12月31日	#	#	#
27	越後市代官町	長 丘 神 社	7月31日	夏越祓	#	『板倉町史通史編下』P724
28	# 成島	大 谷 神 社	#	#	#	『#』 H
29	# 日向	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
30	# 青柳	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
31	# 大山	大 山 神 社	7月31日 (或すのは8月1日)	#	#	『#』 H
32	# 赤生田	兵 良 神 社	7月31日	#	#	『#』 H
33	鶴林寺当接	吉 郡 神 社	#	夏越祓	人形	『#』 H
34	# 郡谷	神 明 宮	#	#	#	『#』 H
35	# #	福 寺 神 社	#	#	#	『#』 H
36	邑楽郡明和町御源	三 岐 神 社	12月30日 (或すのは31日)	年越の大祓	#	『板倉町史通史編下』P723
37	# # 南大島	通 鳥 神 社	12月30日	——	#	『#』 H
38	# # 中行	通 鳥 神 社	12月30日 (或すのは31日)	年越の大祓	#	『#』 H
39	# # 田島	通 鳥 神 社	#	#	#	『#』 H
40	# # 江口	通 鳥 神 社	#	#	#	『#』 H
41	# # 千津井	三 之 神 社	#	#	#	『#』 H
42	# # 仁江	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
43	# # 川俣	通 鳥 神 社	7月20日	夏越祓	#	『#』 H
44	# # 清賀	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
45	# # 大佐置	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
46	# # 大輔	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
47	# # 小鳥	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 H
48	# 千代田町下中森	兵 良 神 社	7月25日	#	#	『#』 H
49	# 邑楽町光善寺	神 明 宮	7月31日	#	#	『#』 H
50	# # 赤城	兵 良 神 社	7月15日	#	#	『#』 H
51	# # 我駄	兵 良 神 社	7月31日	#	#	『#』 H
52	# # 中原	兵 良 神 社	#	#	#	『#』 P724
53	# 板倉町板倉	南 市 神 社	7月30日 (或すのは31日)	夏越祓	#	筆者調査
54	# # 西岡	西 開 神 社	7月19日	#	#	『板倉町史通史編下』P723
55	# # 駒川	駒 川 神 社	7月20日	#	#	『#』 H
56	# # 離	云 桜 神 社	7月25日	#	#	『#』 H
57	# # 大曲	八 善 神	7月27日	#	#	『#』 H

推定上野国分寺出土瓦の文字

松 田 猛*

文字瓦は文字の施し方によって、押印・箋書き・墨書きなどがあり、押印は上野国分寺創建期、箋書きはその後の修造の時期と大まかに捉えられている。また、記された文字の内容は瓦の寄進者の姓名、瓦工人の名、寺院などの供給先を表していると考えられている。

ここでは元経社明神遺跡第8号調査で出土した文字瓦の概要を述べその出土の意義について考えてみたい。

那射郷（Fig. 55-1）撫で調整された平瓦の凸面の間に、第1文字と第2文字は楷書で書かれているが、第3文字は草書風である。いわゆる箋書きであるが、梵というよりも針の様な細いもので書いている。那射郷は「和名類聚抄」によれば、甘樂郡にあった郷名である。県内出土の文字瓦で○○郷と明確に郷名を記しているものは、上野国分寺の「多胡郡鐵器郷」の1点のみである。

ところで、郷の文字は伴わないが「辛科」「八州」「武美」「山字」といった多胡郡内の郷名が箋書きされているものが多くある。また、佐位郷の郷・郷名を表すとみられている「佐位」「佐」「漢」「雀」などの格子の印字に伴なうものもある。これらの文字瓦の多くは上野国分寺から出土しており、多胡郡、佐位郡さらには勢多郡、山田郡といった地域が上野国分寺建立に深く関わっていたことがわかっている。

文字瓦「那射郷」の出土は、これまで捉えることができなかつた甘樂郡の当該期の動向を窺い知ることができた点で重要である。

勢（Fig. 55-2）粘土板剝取り旗を撫で消した凸面に格子の印字を施し、そのかたわらに陰刻の「勢」一文字を押印している。これは、勢多郡の「勢」とみられており、上野国分寺で多数出土していることから、「続日本紀」天平感宝元年（740）の勢多郡少領上毛野朝臣足人が上野国分寺に知識物を献じ、外從五位下を受けられた記事と関連づけて、勢多郡が上野国分寺の造営に郷をあげて関わったと考えられている。これを裏付けるかのように、旧勢多郡に属する前橋市上西原遺跡では、勢多郡衙とそれに伴う寺院とみられる遺構が検出されているが、瓦葺きの基壇建物を中心にしてこの「勢」と他に2種類の「勢」が数多く出土した。この

ことは、まさに『続日本紀』の記事を彷彿させるものであり、上野国分寺の建立時に自郷の寺にも瓦を葺いたものと思われる。

雀（Fig. 55-3）格子の印字に一緒に彫り込まれている文字で、「雀」の裏字である。これは、新田郡笠懸村の山際宝跡で生産されたものであり、上野国分寺の創建瓦と共に焼かれている。「雀」は上野国分寺のほかに伊勢崎市七橋本房寺でも報告されていて、境町十二宝塚遺跡では正字のものがみられる。これは、上野国分寺と佐位郡の寺院、および寺院を伴う郡衙跡からのみ出土していることから、上野国分寺の創建に際して、佐位郷では郷を単位として瓦を負担したのではないかと考えられている。しかしながら、「和名類聚抄」記載の佐位郡の郷は名郷、雀郷、美侖、佐井、測名、岸新、反治、駅家の八郷であり、いまだに文字瓦として認め得ない郷名があるのは、すべての郷による負担であったか疑問である。

方光（Fig. 55-4）竪方向の端目印字を施した平瓦凸面に押印されている。「方光」は本遺跡の北方1.5km程に所在する山王庵寺で数点出土しており、本遺跡のものと同範囲と思われる。また、山王庵寺では文字瓦「放光寺」も出土したことから、「方光」は放光寺を表していると考えられた。さらに、上野一碑の一つである山ノ上碑と「上野国文書実録帳」とに見られる放光寺であることが濃縮的であり方と、出土遺物などから明らかになった。

山王庵寺では既に戦前に「方光」が出土しており、相川龍雄氏は山ノ上碑の放光寺を示すと想定し、山王庵寺と放光寺は相前後して建立され、両寺の関係は相当深かったであろうと考えた。そして、「方光」は上野国分寺では発見されていないことも指摘している。この時の「方光」も拓本で見るかぎり本遺跡出土のものと同範囲とみられる。

若人（Fig. 55-5）凸面側での平瓦の凹面に箋書きされており、人名とみられる。上野国分寺では多くの人名文字瓦が出土しているが、これまでに「若人」は1点採集されている。箋書きで姓名を記す場合、凸面に施すのが通例であり、凹面に施されている文字は一字もしくは二字である。また、姓は、物部が多く、(大)作、鶴部、武部などもみられ、「若人」の姓もこれらの

* 群馬県教育委員会史跡研究室

いずれかであったかも知れない。

七 (Fig. 55-6) 「方光」と同じ凸面に縱方向の縦目印をもつ平瓦の凹面に墨書きされており、第2画が途中まで直線的に引かれているのが特徴で、山王庵寺から多数出土している。山王庵寺では複数七弁蓮華文軒丸丸があり、根巻石の弁数が七弁であることなど、「七」に深い関わりがあったようである。

八 (Fig. 55-7) 荒い横筋で施す平瓦の凸面端部に墨書きされている。上野国分寺では「八出」「八」などが出土しており、多胡郡の八出郷を表していると考えられる。また、上野国分寺の修造期の瓦は多胡郡で生産されたものが多い。

木 (Fig. 55-8) 瓦で施す平瓦の凸面に墨書きされている。上野国分寺でも出土しているが、類例は多くない。硬質だが、もう少し柔軟である。

以上、述べてきたように、文字瓦を多数出土する遺跡は、上野国分寺、山王庵寺、上植木庵寺といった寺院跡であることがわかる。このことは、上原真人氏が指摘するように、寄進という行為を考えた時にその対象となる場所の性格を示している。⁽¹¹⁾また、「放光寺」あるいは「方光」の文字は瓦の供給先を表しているのであって、他の寺院跡からは出土していない。

それでは、本遺跡での文字瓦の出土をどのように捉えたらよいのであるか。本遺跡は推定上野国府域内にあり、住居跡などで使用の瓦はどこかの建物跡から持ち出したものであろうから、まず考えられるのが国府に関連する建物、そして上野国分寺、山王庵寺といった周辺の瓦葺き起物を備えた施設である。ところで、国府についてはその中心部分である正序建物を含めた諸造構はまったく明らかになっておらず、段階では瓦が使用されていたかどうか知るすべもない。推定国府域での瓦の散布をもって、その範囲を求めるようとする向きもあるが、瓦葺きの建物遺構として明確に捉えられない限り、国府と結び付けて考えるのは無理があるようだ。また、「那射郷」は上野国分寺等で未だかつて見つかっていないことから、国府に供給されたものとの見方もあるが、細名を明確に表す文字瓦は上野国分寺でも1点しか出土していないことを考えれば、このことは積極的な根拠とはなりえない。⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾ ⁽¹⁴⁾

近年調査された、草作追跡、天神遺跡、弥勒遺跡といった推定国府域に接する、あるいはその中の遺跡では、堅穴住居の竈の構築材として瓦が使用されていた。これらの中には、上野国分寺、山王庵寺のものと同様、もしくは同タイプの文字が認められるものがあり、両

寺院跡から1~2kmの距離であることから、両寺の資材の過程で持ち出されたものと考えるのが妥当である。特に、弥勒遺跡出土の「佐」と「□子里長」は上野国分寺から運び出された可能性が高い。「佐」は1文字の押印で佐位郡、佐位郷を表しており、「佐」と同じタイプの格子印に彫り込まれてはいないので、単独に押印されている。「□子里長」は第1文字が部分的に欠失しているので明確ではないが、残骸から「武」と考えられ、武部の鷹か、武美郷の鷹であろう。また、吉井町矢田遺跡出土の紡錘車に刻まれた「物部郷長」との比較から、「里長」は「さとおさ」(リチウ)と読むこともできるが、これら墨書きの文字瓦の製作年代を9世紀に置けば、人名と考えざるを得ず、「さとなが」とするのが際である。つまり、里長は上野国分寺に瓦を寄進した人物とみられる。このように、「野国分寺出土の墨書き文字瓦の大部分は寄進者の名を記しているのである。

これらのことから、放光寺を表す「方光」と人名である「若人」などの文字瓦は、山王庵寺と上野国分寺とから住居の竈の部材などとして持ち込まれたものであり、推定上野国府域に一般的に見られる現象であると考えられる。

註

- 1 鹿児島県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査概要」1984年
- 2 鹿児島県教育委員会「上西原・向原・谷津」1986年、松田昌「鹿児島における文字瓦と墨書き瓦」『鹿鳴』38号11号 1986年
- 3 新田郡都農村「奈良村誌別角1」1983年
- 4 伊勢崎市教育委員会「上植木庵寺 明治60年度概報一」1986年
- 5 鹿児島県教育委員会「十二宝塚遺跡発掘調査報告書」1975年
- 6 前沢和之「文化財レポート・史跡上野国分寺出土の文字瓦について」『日本歴史』414号 1986年
- 7 鹿児島市教育委員会「山王庵寺跡第6次発掘調査報告書」1980年
- 8 松田昌「山王庵寺の性格をめぐって」『鹿児島歴史研究』20号 1984年
- 9 相川施編「上野國文字瓦考(一)」「上毛及上毛人」208号 1934年
- 10 横川熊雄「上野國分寺文字瓦調査」1934年
- 11 上原真人「東国国分寺の文字瓦再考」「古代文化」41卷12号 1989年
- 12 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「草作遺跡」1985年
- 13 前橋市教育委員会「大神遺跡」1987年
- 14 前橋市埋蔵文化財発掘調査団によって今年度に調査されたもので、実見させていただいた。
- 15 内木真翠・中沢哲・鬼形芳人「青井町矢田遺跡出土の文字資料について」『鹿児島文化』208号 1987年

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

バリノ・サーヴェイ 様

1989年11月28日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期として LIBBY の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値 (B.P.) として表示しております。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記しております。

記

Code No.	試料	年代 (1950年よりの年数)
GaK-14760	Peat from 元總社明神遺跡 89 11 09 2	11,170±190 9220 B.C.

以上

木越邦彦

〈補足〉 元總社明神遺跡 (Yトレンチ) における植物遺体の同定

(コメント) IIr-FA 直下の堆積内部から検出された束状の植物遺体について、プラント・オ・パール分析(定量分析法)を用いて給源植物の同定を試みた。供試サンプルは、YトレンチNo91、No136、No299A の 3 点である。

分析の結果、No136はヨシ属、No299Aはウシクサ族(ススキ属)を主体とするものと判断された。No91については数種のものが混在しており、給源植物の特定が困難であった。

古環境研究所

Tab. 4 Yトレンチ出土遺物観察表

番号	出土位置	種類	器形	大きさ 口径 高さ	O座上 O底底 O色調 O残存	皮・裏 部方法		登錄番号	備考
						口縁・肩部	底面		
1 T-3	IV	土師質杯	9.8	3.1	①中柱②良好③軽い黄褐色④残存	端部外反。縫隙。	右側斜角切削。	4591	
2 T-4	IV	土師質杯	14.6	3.7	①中柱②良好③浅い黄褐色④残存	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	47	
3 T-4	IV	土師質杯	15.1	4.0	①中柱②良好③黄褐色④ほぼ完形	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	432	
4 T-5	IV	土師質杯	4.8	1.6	①中柱②良好③浅い黄褐色④完形	軽く外反。縫隙。	右側斜角切削。	435	
5 I-1	IV	土師質杯	7.4	1.3	①中柱②良好③浅い黄褐色④残存	軽く外反。縫隙。	右側斜角切削。	4299	
6 I-1	IV	土師質杯	12.0	2.8	①中柱②良好③浅い黄褐色④残存	端部周辺底面丸み。縫隙。	等量正切削。	4307	
7 I-1	IV	土師質杯	29.6	13.1	①中柱②良好③浅い黄褐色④完形	逆V字の片口。縫隙。	右側斜角切削。	4221他	7本X10枚組成品。
8 I-1	IV	土師質杯	9.6	2.8	①中柱②良好③浅い黄褐色④はぼり有	端部。縫隙。	右側斜角切削。	4308	
9 D-8	IV	土師質盆	9.2	2.1	①中柱②良好③白い青灰色④完形	直線的に外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4795	
10 D-14	IV	土師質盆	9.2	2.2	①中柱②良好③黄褐色④残存	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4238	
11 D-14	IV	土師質盆	7.9	1.7	①中柱②良好③明黄褐色④残存	直角外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4469	
12 D-17	IV	土師質杯	12.2	3.7	①中柱②良好③白い青灰色④残存	内窓する。縫隙。	右側斜角切削。	456	
13 D-20	IV	土師質盆	9.2	4.2	①中柱②良好③黄褐色④完形	軽く外縁。縫隙。	右側斜角切削。	415	
14 D-21	IV	灰陶碗	[13.2]	4.8	①中柱②良好③白い青灰色④完形	縫隙。	右側斜角切削。	411	複数重ね。
15 D-25	IV	土師質盆	9.4	2.2	①中柱②良好③浅い黄褐色④完形	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	41	
16 D-27	IV	灰陶碗	[13.0]	4.0	①中柱②良好③灰白色④完形	内窓。縫隙。	右側斜角切削。	41	復数重ね。
17 W-3	IV	土師杯	[13.8]	2.3	①中柱②良好③浅い青色	素朴な縫隙。	削削り。		盤下層。
18 W-3	IV	土師杯	[11.6]	2.1	①中柱②良好③青色④完形	外縁をもつ横断部。	削削り。		盤下層。
19 J-17G	IV	土師質盆	8.3	2.8	①中柱②良好③白い青灰色④完形	直角。縫隙。	右側斜角切削。	46	
20 H-17G	IV	土師質盆	8.8	1.8	①中柱②良好③白い青灰色④完形	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4340	
21 D-3 G	IV	Z土師質盆	9.6	1.8	①中柱②良好③白い青灰色④外反	外反。縫隙。	右側斜角切削。		
22 H-15G	IV	土師質盆	[10.0]	2.4	①中柱②良好③白い青灰色④外反	端部外反。縫隙。	右側斜角切削。	479	
23 G-17G	IV	土師質盆	9.0	2.1	①中柱②良好③浅い黄褐色④完形	縫隙。	右側斜角切削。	4384	
24 H-17	IV	土師質盆	8.9	2.0	①中柱②良好③白い青灰色④はぼり有	やや内窓。縫隙。	右側斜角切削。	4100	
25 I-16G	IV	土師質盆	9.5	2.1	①中柱②良好③白い青灰色④完形	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	478	
26 G-17G	IVb	土師質盆	[9.4]	1.7	①中柱②良好③白い青灰色④完形	直角。縫隙。	右側斜角切削。		
27 I-16G	IV	土師質盆	9.4	2.8	①中柱②良好③浅い黄褐色④完形	やや外反。縫隙。	右側斜角切削。	4703	
28 G-17G	IVd	土師質盆	9.8	2.6	①中柱②良好③白い青灰色④外反	外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4284他	
29 G-16G	IV	土師質盆	10.2	2.1	①中柱②良好③白い青灰色④外反	縫隙。	右側斜角切削。	4346他	
30 J-15G	IV	土師質盆	[11.2]	3.5	①中柱②良好③白い青灰色④外反	直角。縫隙。	右側斜角切削。		
31 H-14G	IV	土師質盆	[10.8]	3.2	①中柱②良好③白い青灰色④外反	内窓。縫隙。	右側斜角切削。	4414他	内窓上層。
32 H-17G	IV	土師質盆	[10.0]	4.0	①中柱②良好③白い青灰色④外反	内窓外縁に外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4600他	
33 H-15G	IV	土師質盆	[11.4]	4.4	①中柱②良好③白い青灰色④外反	内窓。縫隙。	右側斜角切削。	4749	
34 G-16G	IV	良妻盆	[11.4]	4.1	①中柱②良好③白い青灰色④外反	直角的に外縁。縫隙。	右側斜角切削。	4746	
35 G-16G	IV	土師質盆	[11.3]	3.8	①中柱②良好③白い青灰色④外反	外縁。端部外反。縫隙。	右側斜角切削。	475	
36 IVb	IV	土師質盆	[16.0]	4.6	①中柱②良好③白い青灰色④外反	端部漸減外縁。縫隙。	右側斜角切削。		
37 H-16G	IV	土師質盆	[15.7]	4.2	①中柱②良好③白い青灰色④外反	内窓。縫隙。	右側斜角切削。		
38 D-3 G	IVZ	土師質盆	[12.6]	4.2	①中柱②良好③白い青灰色④外反	内窓。縫隙。	右側斜角切削。	455	
39 II区	IV	良妻盆	-	1.6	①中柱②良好③白い青灰色④外反	縫隙。	右側斜角切削。		
40 G-14G	IV	土師質盆	[10.2]	4.4	①中柱②良好③白い青灰色④外反	やや内窓。縫隙。	右側斜角切削。	476	
41 D-3 G	IVZ	土師質盆	[11.6]	3.5	①中柱②良好③白い青灰色④外反	やや内窓。縫隙。	右側斜角切削。		
42 H-17G	IV	土師質盆	-	1.7	①中柱②良好③白い青灰色④外反	縫隙。	右側斜角切削調整。	478	直径17.2mm
43 I-4 G	IVZ	良妻盆	-	14.8	①中柱②良好③白い青灰色④外反	縫隙。平き目。	右側斜角切削。	437他	内窓に浮き目。
44 C-1 G	IV	土師質	13.8	13.0	①中柱②良好③白い青灰色④外反	端部丸く。縫隙剥離。	右側斜角切削。	457	
45 I-6 G	IVZ	土師質	-	13.0	①中柱②良好③白い青灰色④外反	端部丸く。縫隙剥離。	削削り。	J-16G 横合。	
46 II-16G	IVe	良妻盆	[17.6]	6.5	①中柱②良好③白い青灰色④外反	端部丸く。縫隙剥離。	削削り。		
47 G-16G	IV	土師質	[20.0]	11.1	①中柱②不良③白い青灰色④外反	片山口。端部。縫隙剥離。	削削り。	4722	
48 I区	IV	土師杯	11.2	3.7	①中柱②良好③白い青灰色④外反	外縁円錐。	削削り。		黒高目。
49 I区	IVZ	土師杯	11.8	3.5	①中柱②良好③白い青灰色④外縁円錐。	外縁円錐。	削削り。		黒高目。
50 L-7 G	Vb	土師杯	12.4	5.2	①中柱②良好③白い青灰色④外縁円錐。	外縁円錐。体歪調。	削削り。	767	黒高目。

番号	山上位置	層位	監査	大きさ	①納土 ②構成 ③色調 ④現存	成・整形方法		登録番号	備考
						口縁	側面		
51	J-12G	VII中	土師杯	12.2 6.8	①中粒±良好②赤褐色③青灰	内斜口縁。内面唯枝。	削り入り。	ゼ361他	丸高1。
52	全体	VII中	土師杯	13.9 5.3	①細粒±良好②赤褐色	内斜口縁。内面唯枝。	削り入り。	ゼ364	丸高1。
53	L-14G	VII中	土師杯	12.0 5.1	①細粒±良好②明黄褐色③青灰	常輪口縁。内面唯枝。	削り入り。	ゼ697	丸高1。
54	I区	IVZ	土師高杯	— 18.8	①細粒±良好②明黄褐色③青灰	旋切削き。	斜竹刷き。斜上げ底。		
55	H-12G	IV	供器盤	— (8.7)	①中粒±良好②明黄褐色③青灰	旋削。	削り入り。	グ1216	
56	I-14G	VIIa	土師用	11.8 6.9	①中粒±良好②明黄褐色③青灰	削り且後削き。	削り。	ゼ251	
57	I	VII中	土師用	10.1 6.1	①中粒±良好②赤褐色③青灰	削毛口底直。	削り。	ゼ332	全面水色被膜。
58	L-14G	VIIa	土師台盤	14.2 (28.0)	①細粒±良好②明黄褐色③青灰	削毛口底。	折り返し。	ゼ276	
59	W-5	VII	土師口盤	— 6.8	①中粒±良好②明黄褐色③青灰	削毛口底。	削り返し。		
60	W-5	VII	土師口盤	— 6.9	①細粒±良好②明黄褐色③青灰	削毛口底。振擦で。	折り返し。		
61	III区	IX	供器盤		①中粒±良好②明黄褐色③青灰有する2段の削削波状文。				横。
62	III区	IX	供器盤		②中粒±良好③赤褐色④深褐色⑤深褐色被膜状文。内面唯枝。				横。
63	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③青灰波状文。⑥54と同一個体。				横。
64	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③青灰波状文。				横。
65	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③青灰波状文。				横。
66	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸不規則な条線。内面側で。				横。
67	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面唯枝。				横。
68	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。⑦72と同一個体。				横。
69	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
70	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
71	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。				横。
72	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
73	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
74	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
75	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
76	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
77	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
78	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
79	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
80	III区	IX	捏ね		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
81	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
82	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
83	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
84	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
85	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
86	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
87	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
88	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
89	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
90	III区	IX	外生葉		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
91	III区	IX	捏ね		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
92	III区	IX	捏ね		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
93	III区	IX	捏ね		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
94	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③外凸条線。内面側で。				横。
95	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③竹苞による刺突。平行沈済。剥離痕。				早期波紋文系?
96	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③竹苞による刺突。平行沈済。剥離痕。				加曾利E 4。
97	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③竹苞による刺突。平行沈済。剥離痕。				加曾利E 4。
98	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③竹苞による刺突。平行沈済。剥離痕。				加曾利E 4。
99	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③竹苞による刺突。平行沈済。剥離痕。				加曾利E 4。
100	III区	IX	捏ね波紋		①中粒±良好②明黄褐色③竹苞による刺突。平行沈済。剥離痕。				加曾利E 4。

番号	出土位置	層位	基 形	人 き き 口径 肩高	①直上 ②側成 ③色調 ④残存	成・整 形 方 法		骨頭名	標 号
						口 線	軸 部	底 部	
101	III区	IX	調文深鉢	①中軸②良好③直筒④外縁	縫合②直筒③外縁	縫合	縫合	縫合	加賀利長4-
102	III区	IX	調文深鉢	①縫合②良好③直筒④外縁	縫合②直筒③外縁	縫合	縫合	縫合	新七寺1。
103	III区	IX	調文深鉢	①中軸②不良③直筒④側成	縫合②直筒③外縁	縫合	縫合	縫合	認之内1。
104	III区	IX	調文深鉢	①中軸②良好③直筒④外縁	縫合②直筒③外縁	縫合	縫合	縫合	認之内1。
105	III区	IX	調文深鉢	①中軸②良好③直筒④外縁	縫合②直筒③外縁	縫合	縫合	縫合	加賀利B2,
106	H-15G	IV	平瓦	①直線②良好③軸④小孔⑤外縁開き	内面布目直	-	-	-	新七寺7-1。
107	D-24	IV	丸瓦	①直線②良好③直筒④外縁	内面布目直	-	-	-	新七寺1。
108	J-16G	IV	平瓦	①直線②良好③直筒④外縁	内面布目直	-	-	-	新七寺2。
109	H-16G	IV	丸瓦	①直線②良好③直筒④小孔⑤外縁開き	内面布目直	-	-	-	新七寺3。
110	J-5 G	IVd	繩引口	①(4.5, 9) (8.6, 8) (9.6, 9)	②(9.6, 9) ③(良好) ④(直筒) ⑤(外縁)	-	-	-	新七寺4。
111	I-17G	-	土質内輪	4.3 3.7 1.7 35.4	①中軸②良好③増幅④直(少用研磨。横矢を利用してより近似以降。)	-	-	-	新七寺5。
112	H-16G	IV	土質内輪	4.7 3.5 0.8 13.0	①中軸②良好③直筒④直(土質内輪の底部利用。)	-	-	-	新七寺6。
113	H-16G	IVd	土質内輪	3.3 4.6 6.5 10.1	①直線②良好③直筒④直(土質内輪の底部利用。右四輪系切削。)	-	-	-	新七寺7。
114	W-2	IV	筋石	① 14.1 ② 19.2 ③ 8.2 ④ 1400	⑤欠損⑥かんらん筋(4面使用。)	-	-	-	新七寺8。
115	W-2	IV	筋石	① 8.8 ② 3.7 ③ 5.5 ④ 172	⑤欠損⑥かんらん筋(4面使用。)	-	-	-	新七寺9。
116	T-2	IV	筋石	① 9.1 ② 3.8 ③ 3.1 ④ 143	⑤欠損⑥かんらん筋(2面に溝。(面使用。))	-	-	-	新七寺10。
117	H-16G	IV	凹石	① 5.1 ② 5.6 ③ 3.3 ④ 70	⑤(光形)⑥(横筋)⑦丁寧に平滑。内面も研磨。)	-	-	-	新七寺11。
118	I-4 G	IVZ	凹石	① 9.4 ② 6.9 ③ 5.2 ④ 265	⑤(光形)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺12。
119	G-4 G	IVZ	凹石	① 21.4 ② 18.3 ③ 9.5 ④ 2500	⑤(光形)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺13。
120	G-17G	IV	凹石	① 27.4 ② 13.2 ③ 9.1 ④ 1200	⑤(光形)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺14。
121	I-4 G	-	凹石	① 28.5 ② 24.7 ③ 13.2 ④ 7500	⑤(光形)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺15。
122	W-1	IV	凹石	① 24.4 ② 19.8 ③ 10.7 ④ 2500	⑤(光形)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺16。
123	I-4 G	IVZ	凹石	① 16.5 ② 16.4 ③ 8.3 ④ 1600	⑤(光形)⑥(横筋)⑦安山岩(裏面に毛並状の溝形成。)	-	-	-	新七寺17。
124	T-2	IV	臼臼	①(15.4) ② (9.9) ③ (11.6) ④ (2200)	⑤(欠損)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺18。
125	T-2	IV	臼臼	①(17.5) ② (13.8) ③ (9.6) ④ (2000)	⑤(欠損)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺19。
126	W-9	IV	臼臼	①(19.4) ② (11.1) ③ (14.0) ④ (2400)	⑤(欠損)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺20。
127	T-2	IV	臼臼	① 28.3 ② 27.8 ③ 11.8 ④ 12200	⑤(欠損)⑥(横筋)⑦安山岩	-	-	-	新七寺21。
128	H-16G	IV	ガラス玉	① 0.5 ② 0.5 ③ 4.0 ④ 0.1	⑤(光形)⑥(ガラス)	-	-	-	新七寺22。
129	W-1	IV	菅草	① (1.0) ② 1.0 ③ 0.8 ④ (0.8)	⑤(欠損)⑥(菅草)	-	-	-	新七寺23。
130	F-4 G	IVZ	臼玉	① 1.3 ② 1.3 ③ 0.4 ④ 1.7	⑤(光形)⑥(得石)	-	-	-	新七寺24。
131	K-13G	Vb	臼玉	① 2.4 ② 1.5 ③ 0.9 ④ 3.4	⑤(光形)⑥(得石)	-	-	-	新七寺25。
132	K-13G	Vba	臼玉	① 3.4 ② 2.5 ③ 1.3 ④ 10	⑤(光形)⑥(得石)	-	-	-	新七寺26。
133	D-3 G	VII Z	重ね玉	① 4.6 ② 3.6 ③ 0.8 ④ 21.6	⑤(光形)⑥(得石)	-	-	-	新七寺27。
134	W-2	IV	側膨品	① 4.2 ② 2.1 ③ 0.5 ④ 6.2	⑤(光形)⑥(得石)	-	-	-	新七寺28。
135	E-3 G	IVZ	側膨品	① 3.5 ② 2.2 ③ 0.5 ④ 5.2	⑤(欠損)⑥(得石)	-	-	-	新七寺29。
136	D-3 G	IVZ	打製石盤	① 14.7 ② 7.5 ③ 3.8 ④ 317	⑤(基部欠損)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺30。
137	I-4 G	IVZ	打製石盤	① 17.8 ② 5.6 ③ 2.9 ④ 212	⑤(光形)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺31。
138	J-5 G	IVZ	打製石盤	① 16.6 ② 7.8 ③ 4.2 ④ 765	⑤(光形)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺32。
139	H-17G	IVd	石盤	① (2.8) ② 3.2 ③ 1.2 ④ 18	⑤(欠損)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺33。
140	G-4 G	IVZ	打製石盤	① 16.0 ② 4.0 ③ 1.1 ④ 26	⑤(光形)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺34。
141	I-5 G	IVZ	打製石盤	① 5.7 ② 4.9 ③ 2.8 ④ 144	⑤(欠損)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺35。
142	四区	IX	破石	① 5.1 ② 7.9 ③ 5.5 ④ 527	⑤(光形)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺36。
143	J-5 G	IX	破石	① 23.4 ② 16.1 ③ 6.3 ④ 2200	⑤(欠損)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺37。
144	W-5	IV	破石	① 061.0 ② 25.3 ③ 8.6 ④ 5209	⑤(欠損)⑥(黒色碧玉)	-	-	-	新七寺38。
145	H-17G	IVd	斜平瓦	①(中軸)②(良好)③(直筒)④(外縁)⑤(直筒)	内面開きに3.0-直張式。斜もつ。	-	-	-	新七寺39。
146	I-17G	IVd	丸瓦	①(中軸)②(良好)③(直筒)④(外縁)⑤(直筒)	内面開きに直張式。	-	-	-	新七寺40。
147	D-14	IV	平瓦	①(中軸)②(良好)③(直筒)④(外縁)⑤(直筒)	内面開きに直張式。	-	-	-	新七寺41。

Tab. 5 25・Zトレンチ出土遺物察表

番号	出土位置	層位	形 形	大きさ 口径×高さ	①粘土 ②焼成 ③色調 ④焼存	成・整 形 方 法			登録番号	備 考
						口 隅	四 邊	底 部		
1 Z-Q-2G	IV	良序	中柱	②良好 ③灰白 ④—	⑤外表面粗粒、内表面細粒。				ゼ59	【方型】の印記。 【毛目】の裏面。
2 Z-P-3G	IV	良序	中柱	②良好 ③灰白 ④—	⑥頂部目地。内凹部で。				ゼ40	
3 Z-W-1	II	器物	丸柱	13.4 7.1	光沢有。外表面粗粒。内面水滑。口縁内面に風塵が生れる。				イ	
4 Z--	IV	灰釉陶	丸柱	11.0 3.6	①焼成 ②良好 ③灰白 ④—	輪郭外周。輪縁。				
5 Z-W-1	II	土器質皿	丸柱	8.2 1.4	①焼成 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。			ゼ1	
6 Z-W-1	II	土器質皿	中柱	②良好 ③灰白 ④—	⑤外表面粗粒、内表面水滑。(上部質を軽用) 長さ6.3cm・幅5.9・厚32.4mm				イ17	

Tab. 6 27トレンチ出土遺物観察表

番号	出土位置	層位	形 形	大きさ 口径×高さ	①粘土 ②焼成 ③色調 ④焼存	成・整 形 方法			登録番号	備 考
						口 隅	四 邊	底 部		
1 —	—	灯明具	—	5.0	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④高台部有	山形なし。				右側面斜直。
2 E-5 G	IV Z	土器質皿	丸柱	8.0 2.0	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	薄く外縁。口縁部厚み。				右側面斜直。
3 E-4 G	IV	土器質皿	丸柱	[8.0] 2.0	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ300	
4 F-4 G	IV Z	灰釉陶瓶	丸柱	10.8 1.9	①焼成 ②良好 ③灰白 ④—	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。			横け掛け。
5 G-3 G	IV Z	土器質皿	丸柱	9.3 1.9	①中柱 ②良好 ③灰白 ④リープ窓有	薄く外縁。	右側面斜直。			
6 G-7 G	IV Z	土器質皿	丸柱	9.0 1.0	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④リープ窓无	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ225	
7 G-6 G	IV N	土器質皿	丸柱	7.6 1.8	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	薄く外縁。口縁部厚み。	電線。右側面斜直。		ゼ456	
8 F-5 G	IV	土器質皿	丸柱	9.7 2.2	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④—	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ88	
9 E-6 G	IV Z	土器質皿	丸柱	[9.2] 2.2	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。			
10 G-3 G	IV D	土器質皿	丸柱	8.6 2.1	①中柱 ②良好 ③灰白 ④元形	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。			
11 F-4 G	IV Z	土器質皿	丸柱	8.6 1.9	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。			手。
12 D-6 G	IV N	土器質皿	丸柱	[9.4] 2.3	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	薄く外縁。口縁部厚み。	電線。右側面斜直。			
13 G-3 G	IV Z	土器質皿	丸柱	9.7 2.5	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④—	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。			灯明具に使用。
14 D-6 G	IV D	土器質皿	丸柱	9.4 2.1	①焼成 ②良好 ③灰白 ④リープ窓有	薄く外縁。輪縁。	右側面斜直。			
15 F-5 G	IV D	土器質皿	丸柱	[10.0] 3.1	①中柱 ②良好 ③灰白 ④元形	外縁。輪縁。	右側面斜直。			
16 D-6 G	IV	十輪置	丸柱	10.4 3.4	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ308	
17 F-5 G	IV	圓盤	丸柱	[12.3] 4.1	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ86	
18 F-5 G	IV	須恵杯	丸柱	[13.4] 3.7	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ83	
19 C-3 G	IV Z	須恵杯	丸柱	[12.2] 3.6	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			
20 D-7 G	IV Z	土器質杯	丸柱	12.2 4.2	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	山形等や外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ425	
21 C-7 G	IV Z	十輪置	丸柱	[10.4] 3.4	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			
22 E-5 G	IV	圓盤	丸柱	[12.6] 2.9	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			
23 G-3 G	IV Z	須恵杯	丸柱	[12.2] 3.1	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。口縁部等や外縁。輪縁。	右側面斜直。			自然検付済。
24 F-4 G	IV Z	須恵杯	丸柱	[13.1] 3.5	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			自然検付済。
25 F-4 G	IV Z	須恵杯	丸柱	[14.0] 3.0	①中柱 ②良好 ③焼成 ④—	山形等や外縁。輪縁。	右側面斜直。			
26 F-4 G	IV Z	須恵杯	丸柱	[11.4] 4.5	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			横付着。
27 E-5 G	VI	須恵杯	丸柱	[13.6] 2.9	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			
28 F-5 G	IV	須恵杯	丸柱	[14.4] 3.4	①焼成 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ128	
29 C-7 G	IV Z	須恵杯	—	7.0	①燒成 ②良好 ③灰白 ④—	輪縁。	右側面斜直。			
30 F-5 G	IV Z	須恵杯	[10.4] 1.0	①中柱 ②良好 ③焼成 ④—	輪縁。	右側面斜直。				自然検付済。
31 E-5 G	IV Z	土器質杯	[16.6] 0.8	①中柱 ②良好 ③焼成 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。				
32 C-8 G	IV	十輪置	丸柱	12.0 4.5	①焼成 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。口縁部等や外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ398	高台欠損。
33 D-6 G	IV Z	圓盤	丸柱	[11.4] 0.7	①焼成 ②良好 ③焼成 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			高台欠損。
34 C-4 G	IV	須恵杯	丸柱	15.2' 5.3	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。口縁部等や外縁。輪縁。	右側面斜直。			
35 C-7 G	IV	土器質杯	丸柱	11.0 4.0	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	半外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ400	
36 D-6 G	IV Z	須恵台皿	丸柱	13.6 3.2	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	堆積や外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ592	
37 G-4 G	IV Z	須恵台皿	丸柱	[13.6] 3.2	①焼成 ②焼成 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。			
38 C-7 G	IV	須恵台皿	丸柱	16.2 3.3	①中柱 ②良好 ③灰白 ④—	外縁。輪縁。	右側面斜直。		ゼ411	

番号	出土地点	層位	層 形	大きさ T往 B横	①風土 ②地盤 ③色調 ④性質	成 築 方 法		登録番号	地 号
						口 穴	脚 部		
39	C-7G	IV	土師質板	11.8 4.0	①織紋②板質③灰白④硬	外反。粗穢。	右回転手切削。	#406	
40	D-8G	IVZ	土師質板	- 4.0	①中空②良好③灰白④硬	粗穢。	右回転手切削。		
41	G-3G	IVZ	直腹壁	[14.0] 2.5	①織紋②平直③灰白④硬	外傾し縫を持つ。	右回転手切削。		
42	D-7G	IVZ	直腹壁	[14.0] 1.8	①織紋②板質③灰白④硬	外反。	右回転手切削。		
43	G-3G	IVZ	直腹壁	[14.0] 1.4	①中空②良好③灰白④硬	外反。	右回転手切削。		
44	F-4G	IVZ	土師質板	[10.4] 5.3	①中空②良好③灰白④硬	口部直や外反。			
45	E-4G	IV	直腹板	[12.0] 4.0	①織紋②板質③灰白④硬	右回転手切削。	#451	書書き器 IV-1.	
46	D-7G	IVZ	土師質板	[32.0] 12.0	①中空②良好③板質④織部弱	内凹。正二角形の縁。		#453他	
47	G-4G	IVZ	直腹壁	[15.0] 2.7	①織紋②良好③灰白④硬	直腹近右側斜面削り。	粗穢。凹状の縁。		
48	C-8G	IVD	直腹壁	14.4 2.5	①織紋②良好③灰白④硬	直腹近右側斜面削り。	粗穢。凹状の縁。	#462	振りを有する。 自然粘付着。
49	E-5G	IVZ	直腹壁	[17.0] 3.1	①中空②良好③灰白④硬	直腹近右側斜面削り。	粗穢。凹状の縁。		
50	D-7G	IVZ	直腹壁	[17.0] 5.2	①細密②良好③灰白④硬	直腹近右側斜面削り。	粗穢。凹状の縁。		
51	G-2G	IV	直腹壁	[10.0] 3.7	①織紋②板質③灰白④硬	投を持って外反。粗穢。	右回転挫削り。		
52	G-3G	IV	直腹板	11.2 4.2	①中空②良好③板質④硬	内側斜面削り。端部に段。	左回転挫削り。	#463	
53	G-3G	IVD	直腹板	12.4 5.5	①細密②良好③灰白④硬	内凹。内面に擦跡。	丸底。茎割り。		丸底。
54	G-3G	VII	土師杯	[13.0] 5.4	①中空②良好③灰白④硬	内凹。内面に擦跡。	丸底。茎割り。		丸底。
55	E-5G	VII	土師杯	13.2 4.2	①中空②良好③灰白④硬	内斜口縁。内面に擦跡。	丸底。茎割り。		丸底。
56	G-3C	IVZ	上部斜	13.5 4.6	①中空②良好③灰白④硬	内斜口縁。内面に擦跡。	丸底。茎割り。		丸底。
57	E-5G	VII	土師杯	12.0 4.6	①中空②良好③灰白④硬	内斜口縁。	丸底。茎割り。	#470	丸底。
58	G-3G	IVZ	+脚杯	[13.4] 6.11	①中空②良好③灰白④硬	内斜口縁。内面に擦跡。	丸底。茎割り。		丸底。
59	G-3G	IVZ	土師杯	[14.0] 5.0	①織紋②良好③灰白④硬	極端外側付後腹斜削。	丸底。茎割り。斜側の擦跡。		丸底。
60	G-3C	IVZ	土師質板	(4.0) 0.21	①細密②良好③灰白④硬	内斜口縁の凸部と推定。	斜側の擦跡。	#476	丸底。
61	G-3C	IVZ	土師杯	12.4 6.3	①少空②良好③灰白④硬	施して作りが悪。			
62	E-5G	IV	+脚杯	[17.0] 8.0	①織紋②良好③灰白④硬	口部斜外反。底部鋸歯。		#474他	右斜～丸底 1.~ 右斜 1.~
63	F-5G	VII	黄玉	① 1.7 ② 0.5 ③ 0.5 ④ 0.5 ⑤ 完好				#475	
64	F-5G	VII	青玉	① 2.0 ② 0.6 ③ 0.6 ④ 0.5 ⑤ 完好				#476	
65	G-3G	IVZ	白玉	① 1.1 ② 1.3 ③ 1.3 ④ 2.7 ⑤ 完好⑥ 青石				#476	
66	H-3G	IVD	白玉	① 2.1 ② 1.4 ③ 0.7 ④ 2.6 ⑤ 完好⑥ 青石				#476	
67	H-2G	IVS	白玉	① 2.2 ② 1.6 ③ 0.7 ④ 2.6 ⑤ 完好⑥ 青石				#476	
68	E-3G	VII	上玉	① 2.7 ② 2.5 ③ 2.7 ④ 11.7 ⑤ 完好				#471	
69	E-5G	VII	青羽口	①織紋②良好③灰白④					
70	G-3G	IVZ	土師質板	(4.0) (幅1.0) (厚1.1) (重20.0)	①中空②良好③外黄褐色④完形 (十脚土瓶の表面を軽用。)				
71	G-3G	IVD	青玉	① 8.5 ② 3.6 ③ 2.8 ④ 11.0 ⑤ 完好					
72	G-2G	IV	大座	① (3.0) ② (3.7) ③ (1.0) ④ (4.0) ⑤ 大座 ⑥ 青石				#478	
73	D-5G	IVZ	円石	① (7.5) (幅12.9) (厚17.0) (重596.0) ② 大座 ③ 電気炉山岩					
74	C-7G	IVZ	凹石	① (19.0) (幅11.0) (厚5.0) (重343.0) ② 大座 ③ 直接炉山岩				#485	
75	W-3	IVZ	右石	① (13.0) (幅13.7) (厚9.0) (重110.0) ② 大座 ③ 直接炉山岩					
76	C-7G	IVZ	下瓦	①中空②良好③青白灰④外表面有目底。内面無。文字瓦「阿」の梵文字?。				#486	
77	E-4G	V	平瓦	①中空②良好③切妻④外表面有目底。系切底。内面無。文字瓦「木」。				#498	
78	C-8G	IVD	平瓦	①織紋②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。内面無。文字瓦「八」。				#493	
79	W-2	V	平瓦	①織紋②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。内面無。津字瓦「光」?。				#44	
80	F-4G	IVD	平瓦	①織紋②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。内面無。津字瓦「光」?。					
81	D-7G	IVZ	平瓦	①織紋②良好③灰白④外表面有目底。内面無。文字瓦「那利傳」。					
82	E-6G	IVZ	平瓦	①少空②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。内面無。津字瓦「勢」。					
83	E-6G	IVD	平瓦	①中空②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。格子目の印。津字瓦「東」の梵文字。					
84	D-6G	IVZ	平瓦	①織紋②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。内面無。文字瓦「製」不規。					
85	E-6G	IVZ	平瓦	①中空②良好③青白灰④外表面有目底。系切底。内面無。格子目の印					

注1. 土質百式表・黒色土型については以下の基準による。

上部質土層・総成形。乾燥地盤のもの。

黒色土 層=総成形。入念な粗面を施し、完成後表面の微粒を内面に施したもの。

2. 乾燥・調査土基の観察項目は、①地土②地盤塗色調査③文様・施設方法の順で記載した。

3. 石膏・石炭灰の検査項目は、①最大寸法大さき②最大粒度大きさ③残存④石材の種で記載した。

4. ① 地土は透水性(0.9m以下)、中砂(1.0m~1.9m)、粗粒(2.0m以上)とし、特徴的な氣泡が入る場合に其名を記載。

② 地成は無気、良好、不良の3段階評価。

③ 色調は上部外因を施し、色名は新規標準上色名(小山・竹原1976)によった。

④ 大きさの単位cmで示す。現地を〔〕、測定値〔 〕で示した。その他の小片については所要部位を記載した。

5. 並び番号のゼリフ・レンチ全修復し番号を示す。イ…各選択箇所の選択番号。ダ…1m単位グリッド毎の選択番号。

6. Yトレンチ地土剖面の項目で記載したI~IV区は、およそ次の範囲である。

I区…ミクイン以東。II区…ミクイン以西。

III区…6~8フィンの合算。IV区…13~17フィン・Kフィン以西。

Tab. 7 Yトレンチ木器計測表

番号	出力グラフ	層位	種類	長さ	幅	厚さ	番号	地土グリッド	層位	種類	長さ	幅	厚さ
1 306	J -11G	VII中	杵(完形)	77.4	8.4	6.0	41 581	I -15G	VII下	杭	122.0	4.0	3.8
2 423	J 10G	VII中	杵	43.8	11.0	8.8	42 415	L 11G	II	柄	18.8	7.4	1.2
3 305	K -9G	VII中	杵	42.4	7.0	5.2	43 415	L -11G	II	柄	19.2	6.4	1.2
4 74	K -9G	VII	杵	38.0	8.4	9.6	44 415	L -11G	II	柄	15.8	3.8	1.2
5 314	J -13G	VII中	杵	44.8	10.2	8.0	45 415	L -11G	VII	柄	16.5	3.6	1.2
6 141	L -16G	VII	杭(杵)	44.4	6.3	5.2	46 415	L -11G	II	柄	15.4	4.4	1.2
7 613	M 16G	VII	杵	46.4	10.6	11.4	47 415	L 11G	II	柄	20.2	9.6	1.6
8 438	J -13G	VII中	ナスビ形着柄繩	52.4	11.0	1.2	48 415	L -11G	II	柄	19.0	4.8	1.2
9 99	J -13G	VII	容器	26.8	11.0	4.2	49 415	L -11G	II	柄	19.2	3.2	1.2
10 120	K -13G	VII	ナスビ形着柄繩	31.2	4.2	2.0	50 415	L -11G	VII	柄	18.8	7.3	1.2
11 130	M -14G	VII	ナスビ形着柄繩	48.6	14.8	2.0	51 415	L -11G	II	柄	25.8	6.4	1.4
12 231	J 12G	VII中	容器	37.2	24.0	5.2	52 415	L 11G	II	柄	28.0	7.0	1.4
13 76	K -9G	VII	建築材	72.8	14.6	4.8	53 415	L -11G	II	柄	18.5	2.2	1.2
14 131	M -14G	VII	杭	44.0	12.0	3.8	54 415	L -11G	II	柄	18.5	2.6	1.2
15 420	K -10G	VII中	加工材	43.6	17.4	3.2	55 415	L -11G	II	柄	19.8	6.4	1.6
16 126	L -13G	VII	板材	36.8	15.4	24.2	56 152	L -18G	VII	杭	39.2	2.6	2.8
17 508	J 12G	VII中	板材	42.4	38.0	1.4	57 107	J 14G	VII	加工材	41.2	6.8	6.0
18 330	H -15G	VII中	建築材	80.4	17.8	3.2	58 422	K -10G	VII中	杭	44.8	6.8	8.2
19 203	L -14G	VII中	容器	63.2	13.4	1.8	59 304	L 8G	VII中	杭	38.4	6.5	5.0
20 588	J -11G	VII下	容器	38.2	15.2	1.4	60 117	K -14G	VII	杭	48.4	3.6	3.4
21 168	L -13G	VII	樹皮製品	30.8	11.6	0.4	61 153	M -16G	VII	杭	33.6	5.4	8.4
22 590	J 11G	VII下	樹皮製品	14.0	3.8	0.4	62 218	L -12G	VII中	杭	31.6	6.0	7.0
23 522A	J -13G	VII中	樹皮製品	26.4	10.0	0.4	63 164	M -15G	VII	加工材	20.4	14.4	7.8
24 522B	J -13G	VII中	樹皮製品	14.8	8.2	0.4	64 209	L 14G	VII中	杭	100.0	4.4	3.6
25 522C	J -13G	VII中	樹皮製品	9.8	7.8	0.4	65 149	L 15G	VII	杭	95.2	5.6	9.0
26 591	J -11G	VII下	樹皮製品	38.0	4.2	0.4	66 150	M -15G	VII	杭	78.8	6.2	5.3
27 221	K -11G	VII中	建築材(ぼぞ穴)	146.8	13.6	7.0	67 659	L -16G	VII下	杭	72.0	12.0	6.2
28 169	L 14G	VII	加工材	32.0	14.6	3.0	68 554	K -13G	VII中	杭	43.2	2.6	1.9
29 65	H -3G	VII	加工材(ぼぞ穴)	33.8	6.2	1.4	69 455	H -3G	VII中	杭	50.4	8.0	5.8
30 142	L -16G	VII	板材(加工材)	36.8	6.2	1.2	70 125	M 13G	VII	杭	63.2	4.2	5.2
31 421	J -10G	VII	加工材(ぼぞ穴)	70.0	11.2	2.2	71 132	M -14G	VII	杭	61.6	3.2	3.6
32 206	L -16G	VII中	繩	148.4	24.8	7.8	72 404	J -12G	VII中	杭	74.8	3.0	3.8
33 234	J -11G	VII中	加工材	164.0	20.0	3.8	73 450	J -3G	VII中	杭	64.8	5.8	6.0
34 352	J 12G	VII中	加工材(ぼぞ穴)	80.8	9.4	4.4	74 77	K -9G	VII	杭	84.0	4.6	5.8
35 97	K -13G	VII	杭	163.2	7.8	4.6	75 188A	I -15G	VII中	杭	106.4	4.2	6.0
36 303	K -15G	VII	柄	44.8	4.0	2.4	76 567	L 10G	VII下	杭	116.8	8.8	4.4
37 320	J -12G	VII中	棒状	24.0	1.6	1.2	77 196	M -14G	VII中	杭	60.4	7.6	5.8
38 166	N -15G	VII	棒状	32.0	2.0	1.6	78 190	L -14G	VII中	杭	56.4	2.2	2.0
39 655	D 3G	VII	柄	44.8	2.4	1.4	79 188B	I -15G	VII中	杭	41.2	6.8	3.2
40 104	J -14G	VII	柄	55.6	3.6	2.0							

(単位: cm)

Tab. 8 27トレンチ木器計測表

番号	品目	出土グリッド	層位	形	種	長さ	幅	厚さ
1 529		G - 4 G	IVZ	人形		66.0	5.8	0.8
2 468		E - 6 G	IVZ	人形		34.4	9.6	0.6
3 446		F - 4 G	IV	人形		21.2	2.4	0.6
4 685		F - 4 G	IVD	木製品		15.4	2.8	0.4
5 360		F - 3 G	IVD	木製品		22.6	4.2	0.8
6 366		E 5 G	IV	曲物		14.8	3.6	0.5
7 620		E - 5 G	VII	錐の柄		34.6	2.0	1.0
8 619		E - 5 G	VII	弓		62.4	2.4	1.2
9 570		E - 5 G	VII	零件		48.3	8.1	7.2
10 629		F - 5 G	VII	鍛錠		39.3	6.3	5.7
11 622		E 5 G	VII	加工材		28.4	4.8	0.8
12 701		G - 3 G	VII	盤		39.0	18.2	3.0
13 607		F - 4 G	IVZ	板材		36.4	2.4	1.5
14 599		E - 6 G	VII	板材		47.2	15.8	2.8
15 537		G - 3 G	IVZ	杭		120.8	5.6	5.6
16 501		G 3 G	IVS	杭		46.8	4.8	4.0
17 546		F - 4 G	IVZ	杭		66.0	4.0	3.6
18 545		F - 4 G	IVZ	杭		38.4	5.2	4.8
19 544		G - 4 G	IVZ	杭		87.2	4.8	4.0
20 552		F - 4 G	IVZ	杭		109.2	3.6	3.6
21 551		F 5 G	IVZ	杭		109.8	4.8	4.0
22 502		G - 3 G	IVS	杭		68.0	4.8	4.0
23 567		E - 5 G	VII	杭		52.4	4.8	4.0
24 661		E - 6 G	VII	杭		27.6	5.2	6.0
25 631		E 5 G	VII	杭		54.8	5.6	3.2
26 569		E - 5 G	VII	棒状		71.2	2.8	2.0
27 566		E - 5 G	VII	杭		69.6	4.8	3.6
28 556		E - 5 G	VII	杭		72.8	5.2	5.2
29 558		E 5 G	VII	棒状		82.4	4.0	3.2
30 565		E - 5 G	VII	杭		95.6	6.8	4.8
31 602		F - 5 G	VII	杭		74.0	7.2	3.6
32 683		F - 4 G	VII	杭		63.2	4.8	3.6
33 560		E 5 G	VII	杭		67.2	6.4	3.6
34 642		F - 5 G	VII	杭		32.4	4.8	5.6
35 703		G - 3 G	VII	加工材		84.8	8.0	2.0
36 541		F - 4 G	VII	杭		98.0	5.6	6.0
37 653		E - 6 G	VII	加工材		90.0	4.4	3.8
38 680		E 5 G	VII	加工材		107.6	5.2	4.0
39 711		G - 3 G	VII	横歯		25.4	10.0	2.0
40 634		E - 6 G	VII	杭		22.0	4.4	4.0
41 —		—	VII	杭		21.6	3.6	3.6
42 723		F - 4 G	VII	杭		29.6	4.4	4.4
43 706		G - 2 G	VII	柱(ほぞ穴・仕口)		327.2	22.4	15.2
44 724		F - 4 G	VII	棒状		39.6	3.2	3.2
45 694		F - 4 G	VII	加工材		181.6	7.6	3.2
46 657		E 5 G	VII	杭		130.0	5.2	4.0
47 643		E - 5 G	VII	加工材		95.2	3.6	0.8
48 723		F - 4 G	VII	加工材		29.6	4.4	4.4
49 727		F - 5 G	VII	板状		20.4	5.6	2.0
49 686		F 4 G	VII	ヒントリ・ヒョウタン		12.2	11.0	4.2

(単位: cm)

Tab. 9 元總社明神遺跡出土獸骨類一覧表

番号	トレンチ名	測定値	出土位置	層位	種類・性別・部位	備考
1	27 44	F - 5 G	IV			
2	27 131	E - 4 G	IV		ウマ第二切歎	Fig. 53
3	27 175	E - 4 G	IV		ウマ左中足骨	
4	27 176	E 4 G	IV		ウマ下顎臼齒	
5	27 335	D - 5 G	IV			
6	27 336	I - 1 G	IV			
7	27 337	H 1 G	IV		ウマ下顎臼齒	
8	27 340	G - 2 G	IV			
9	27 344	C - 6 G	IV		ウマ? 対骨?	
10	27 352	D 5 G	IVN		ウマ左下顎	Fig. 54
11	27 353	D - 6 G	IV			
12	27 354	D - 6 G	IV			
13	27 355	D - 6 G	IVN			
14	27 363	D - 6 G	IV			
15	27 367	D - 5 G	IV		ウマ右脛骨	Fig. 53
16	27 372	D - 5 G	IV			
17	27 374	F 4 G	IV		ウマ左上腕骨	Fig. 53
18	27 375	F - 4 G	IV		ウマ左大脛骨	Fig. 54
19	27 378	D - 5 G	IV			
20	27 391	H - 2 G	IV			
21	27 392	H 2 G	IV		シカ下顎臼齒	
22	27 393	E - 5 G	IV		シカ脛骨	
23	27 394	E - 5 G	IV		ウマ脛骨(尺骨)	
24	27 397	C - 7 G	IV			
25	27 399	F 5 G	IV		ウマ下顎臼齒	Fig. 53
26	27 401	H - 2 G	IV		ウマ上顎臼齒	
27	27 402	H - 2 G	IV		ウマ上顎臼齒	
28	27 403	F - 5 G	IV		ウマ右脛骨	Fig. 53
29	27 409	C 7 G	IV		ウマ上顎臼齒	
30	27 410	C - 7 G	IV		ウマ左下顎	Fig. 54
31	27 412	F - 5 G	IV			
32	27 415	H - 2 G	IVD		ウマ左下第一切歎	
33	27 416	II - 2 G	IVD		ウシ下顎臼齒	
34	27 417	H - 2 G	IVD		ウマ左下第二切歎	
35	27 418	F - 5 G	IVZ		ウマ頸蓋骨	PL. 9
36	27 420	F - 4 G	IVD			
37	27 421	F 5 G	IVZ			
38	27 422	I - 1 G	IVN			
39	27 424	D - 7 G	IV		ウマ?	
40	27 432	I 1 G	IV			
41	27 433	II - 1 G	IV			
42	27 434	D - 7 G	IV			
43	27 435	D - 7 G	IV		ウマ? 対骨?	
44	27 436	D 7 G	IV			
45	27 439	E - 5 G	IVD		ケシ上顎臼齒	
46	27 442	E - 5 G	IVD			
47	27 443	E - 5 G	IVD		ウマ右脛骨	Fig. 54
48	27 444	E - 5 G	IVD		ウマ右大脛骨	Fig. 54
49	27 448	F 4 G	IVD		ウマ? 対骨?	
50	27 457	E - 4 G	IVZ		イヌ頭蓋骨	

番号	トレンチ名	番号	出土位置	部位	種類・性別・部位	備考
51	27	458	E-5 G	IV Z	ウマ左下第三切歯	
52	27	459	R-4 G	IV	シカ?肋骨	Fig.53
53	27	464	C-8 G	IVD	ウマ上顎臼歯	
54	27	467	E-6 G	IVS	ウマ下顎臼歯	
55	27	473	G-3 G	IVN		
56	27	475	E-6 G	IVZ	ウマ?胸骨	
57	27	476	E-5 G	IVZ	ウマ第四中足骨	
58	27	478	E-6 G	IVD	シカ左脛骨+シカ歯	
59	27	480	E-6 G	IVZ	ウマ右枕骨	
60	27	483	E-6 G	IVZ	シカ後肢骨(前肢)	
61	27	484	E-6 G	IVZ		
62	27	486	E-6 G	IVZ		Fig.54
63	27	496	G-4 G	IVSa	ウマ臼歯	
64	27	497	G-4 G	IVSa		
65	27	498	G-4 G	IVSa		
66	27	503	E-5 G	IVZ	ウマ下顎臼歯	
67	27	504	E-5 G	IVZ	ウマ上顎臼歯	
68	27	505	E-5 G	IVZ	ウシ下顎臼歯	
69	27	506	E-5 G	IVZ	ウマ上顎臼歯	
70	27	518	G-4 G	IVD	ウシ茎突骨(前肢)	
71	27	519	G-4 G	IVD	ウシ左中足骨	
72	27	520	G-4 G	IVD		
73	27	522	G-4 G	IVD	ウマ焼骨	
74	27	523	G-4 G	IVD	ウシ肱筋骨(後肢)	
75	27	527	G-4 G	IVD		
76	27	528	G-4 G	IVD	イヌド婆骨	
77	27	588	E-5 G	IVZ	ウシ頭椎	
78	27	589	F-5 G	IVZ	ウシ左脛骨	Fig.53
79	27	604	F-4 G	IVZ	ウマ、ウシ肋骨	Fig.53
80	27	612	G-3 G	IVZ	ウマ下顎臼歯	
81	27	682	E-5 G	VII	イヌ犬歯	
82	27	708R	G-3 G	VII	ヒト右上腕骨	
83	27	F 1	—	—		
84	27	F 2	D-5 G	IVZ		
85	27	F 3	D-6 G	IVZ	ウマ下顎臼歯	
86	Y 1	J-5 G	IVD	ウマ上顎臼歯(個A)		
87	Y 2	I-5 G	IVZ	ウマ上顎臼歯(個B)		
88	Y 5	I-4 G	IVZ	ウマ下顎臼歯		
89	Y 11	I-4 G	IVZ	ウマ下顎臼歯		
90	Y 12	I-4 G	IVZ	ウマ下顎臼歯		
91	Y 13	H-4 G	IVZ	ウマ下顎臼歯		
92	Y 15	I-4 G	IVZ	ウマ上顎臼歯(個D)		
93	Y 17	G-4 G	IVZ	シマ下顎臼歯		
94	Y 19	G-4 G	IVZ	ウマ下顎臼歯		
95	Y 20	H-4 G	IVZ	ウマ上顎臼歯(個A)		
96	Y 21	H-4 G	IVZ	ウマ下顎臼歯		
97	Y 148	L-17G	VII	イヌ下顎骨	PL. 5	
98	Y —	G-16G	IV	ウマ下顎臼歯(個D)	グ1122	
99	Y —	G-5 G	IVZ	ウマ上顎臼歯(個D)		
100	Y —	H-16G	IV	ウマ上顎臼歯(個C)	グ370	

番号	トレンチ名	番号	出土位置	部位	種類・性別・部位	備考
101	Y —	H-16G	IV	ウマ上顎臼歯(個C)	グ1114	
102	Y —	H-16G	IV	ウマ上顎臼歯(個D)	グ1094	
103	Y —	H-16G	IV	ウマ上顎臼歯(個C)	グ1027	
104	Y —	H-16G	IV	ウマ上顎臼歯(個D)	グ1112	
105	Y —	H-16G	IV e	ウマ下顎臼歯	グ1115	
106	Y —	H-16G	IV	ウマ上顎臼歯(個D)	グ728	
107	Y —	H-16G	IV	ウマ下顎臼歯(個D)	グ1117	
108	Y —	T-2	IV	ウマ下顎臼歯	イ43	
109	Y —	J-16G	IV	板鰓類(サメ類)	グ145	
110	Z 52	Q-34G	IV	ウマ下顎臼歯		
111	Z 52	Q-34G	IV	ウマ下顎臼歯	133-1	
112	Z 52	Q-34G	IV	ウマ下顎臼歯	133-2	
113	Z 136	N-37G	IV	ウマ上顎歯		
114	Z 137	N-37G	IV	ウマ上顎歯		
115	Z 138	N-37G	IV	ウマ上顎歯		
116	Z —	—	IV	ウマ上顎歯		

a) 個A～個Eは複数個体Aの略称である。

Y・Zトレンチについては宮崎重雄氏の付録表から作成したものであるため、これ以外にも図十がある。

Tab. 10 元総社明神遺跡出土白磁・青磁観察表

番号	出土地点	種類	断面	形状	時期	产地	器形・技術の特徴など
1	Y・H 17G	244	IV	白磁 裏 体部	口縁部~ 底	—	中国 胎土は灰白色で緻密化する。外側には輪のない箇所を片側面で持つ。胎内は質人が入り、たゞかに水色味を帯びる。
2	Y・G-16G	—	—	白磁 裏	口縁部	19世紀後半~ 21世紀初頭	中国 胎土は灰白色で緻密化する。胎内は質人が入り、たゞかに水色味を帯びる。胎内は質人が入り、たゞかに水色味を帯びる。
3	V・H-16G	368	IV	白磁 裏	口縁部~ 底	19世紀末~ 21世紀初頭	中国 口縁部は薄く、体部内面には段を有する。胎土は灰白色。緻密でよく緻密化する。胎内は質人が入り、厚い部分では水色味を帯びる。表面には質人が入る。口縁部唇部と内面唇部が肥厚し、368ト同個体か。
4	Y・W-1	562	IV	白磁 裏	口縁部	19世紀後半~ 21世紀初頭	中国 胎土は灰白色で緻密。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。口縁部唇部は薄く、表面には質人が入る。
5	V・H-16G	776	IV	白磁 裏	口縁部	19世紀末~ 21世紀初頭	中国 口縁部は外側する。胎土は灰白色。ガラス質でよく緻密化する。口縁部~体部外側はヘリによる耐候性評定。胎内は質人が入り、よく緻密化する。
6	Y・W-1	1742	IV	白磁 裏 底?	体部下位 底?	19世紀~ 19世紀	中国 胎内は質人が入り、よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
7	Y・W-1	780	IV	白磁 裏	体部下位 底	19世紀後半~ 21世紀初頭	中国 胎土は灰白色でやや粗い。よく緻密化している。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
8	Y・W-2	126	IV	白磁 裏	体部	10世紀~ 12世紀	中国 胎土は灰白色。緻密でよく緻密化する。ガラス質。内面のクロロ目は薄く。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
9	Y・D-8	185	IV	白磁 裏	高台~ 底	11世紀~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でやや粗い。よく緻密化し、ガラス質。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
10	Y・G 17G	251	IV	白磁 裏	体部	11世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
11	Y・H-16G	496	IV	白磁 裏	口縁部	11世紀後半~ 前?	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
12	Y・H-16G	—	—	白磁 裏	口縁部	11世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
13	Y-—	—	—	白磁 裏	口縁部 — 外側	12世紀後半~ —	中国 玉縁部分の外側のみの断面。胎土は灰白色を呈し、緻密。胎土は灰白色で緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
14	Y・T-2	282	IV	白磁 裏	体部下位 底	10世紀~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化している。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
15	Y-IVB	—	—	白磁 裏	体部	10世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
16	Y・H-16G	524	IV	白磁 裏	—	10世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
17	Y・D-13	14	IV	白磁 裏	底部	10世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
18	Y・W-1	1732	IV	白磁 裏	体部中位 底	11世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色で緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
19	Y・D-11	66	IV	白磁 裏	体部下位 底	11世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
20	Y-IV区	—	—	白磁 裏	体部下位 底	11世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でやや粗い。ややガラス質。外側体部下位は無釉。
21	Z・Q 33G	145	IV	白磁 裏	口縁部	11世紀後半~ 12世紀後半	中国 口縁部は外側する。胎内は質人が入り、表面には質人が入る。
22	Z・Q-33G	139	IV	白磁 裏	体部下位 底	10世紀後半~ 12世紀後半	中国 胎土は灰白色でやや粗い。緻密でよく緻密化する。ややガラス質。内面体部下位は無釉。
23	Z-—	—	—	白磁 裏	底部	11世紀後半~ 底?	中国 大型化した玉縁を有する瓶の底部か? 胎土は灰白色でガラス質。よく緻密化する。
24	Z-—	—	—	白磁 裏	口縁部	11世紀後半~ 底	中国 胎土は灰白色でよく緻密化する。胎土の色調は白色に近い灰白色外側体部中位下位はハタケアリ。胎内は質人が入り、外側体部下位には無釉。

番号	出土地点	編目	柱頭形	特徴	導	時 期	年 代	書 形・模 法 の 特 譲 な ど
25	Z・Q 33G	31	IV 白磁 鏡	口輪部～ 体部下位	11世紀後半～ 12世紀前半	中国	口輪部の下端は人型。脚十はやや短いがよく纏化する。外表面は白磁器までヘッケズリ。内面体部下位は断面「V」字形の窓跡。脚は黄釉向味を帯びる。外表面部下位に無地。口輪部と玉筋外側、内面頂部上の肥厚部の部分は無地。	
26	27・D-6 G	377	IV 白磁 鏡	口輪部	11世紀後半～ 12世紀前半	中国	口輪部の唇部は薄く、輪部は小さく折り返して玉筋となす。地肌も悪く、やや白開した透明釉に似る。	
27	27・II-2 G	396	IV 白磁 鏡	口輪部	10世紀末～ 11世紀初頭	中国	胎上はわずかに灰白色を帯びる。纏化しているが、ガラス質ではなく、軟らかみがある。外表面は蘭草文。脚は薄く、わざかに乳頭する。	
28	27・D-5 G	373	IV 白磁 鏡	口輪部	11世紀後半～ 12世紀前半	中国	白釉下被膜山筋窓跡。玉筋はやや小さく弱い。胎土のや調は灰白色。脚はガラス質でわざかに灰白色を帯びる。	
29	27・D-5 G	362	IV 白磁 鏡	体部下位	11世紀～ 12世紀初半	中国	玉筋部の体部。胎土は灰白色で微光。よく纏化。外表面のヘラケズリは強。外表面下位は無地。(13世紀の青緑上体の時期にも少しある)	
30	27・D-6 G	361	IV 白磁 鏡	体部下位	11世紀後半～ 12世紀後半	中国	胎土は灰白色。よく纏化する。体部外表面下位はヘラケズリ。体部下位には無地。脚は灰白色を帯びる。	
31	Y・T-3	303	IV 青磁	口輪部	9世紀～ 10世紀	中国	胎土は灰白色で微光。よく纏化しやガラス質。縁は薄く、オリーブ色を呈する。胎土の差別はあまりない。脚十、輪溝から略青磁系青磁の可能性がある。	
32	Y・W-1	395	IV 青磁	体部	12世紀中期～ 後半	中国	脚十は灰白色でよく纏化。ガラス質。体部外表面下位はヘラケズリ。内面体部中位に白土山筋窓跡。窓跡周囲に粗かい無地。脚は白色でガラス質。四足窓ある。	
33	Y・D-10	6	IV 青磁	体部下位	12世紀	中国	外表面はグン目。内面には片切形に入る文様を施す。四足窓系。	
34	27-----	—	IV 青磁	体部下位	12世紀～ 13世紀	中国	内外表面に有磁痕を残す。胎土は灰白色で無地。脚十はやや弱い。他の色は薄く、胎土が染みて見える。輪溝口はローリングを受けやや膨張。被片が凸合縫部分のため不明確であるが、外表面には網の纏化した基文が残されていると思われる。地肌不良で纏化していない。地肌底無。	
35	27・I-2 G	—	IV 青磁 鏡?	体部中位	13世紀	中国	胎上は灰白色を呈し、輪溝でよく纏化する。脚は厚く踏まれ、色はよく小気泡も多く含む。内外表面に文様を施す。底急落。	

註1. 上記の數値表は、御経馬糸歴史文化財産事業團園企画室蔵人西原広氏の観察に基づいて作成した。

2. Fig. 36のうち36-40は移動陶器である。36は27トレンチC-5 G・IV層。37は27トレンチI-2 G・IV層。423。38は27トレンチI-4層下で復元。39はYトレンチI-16 G・IV層。40は3 G・16 G・IV層。41は6 Gが接合したもの。40はYトレンチT-2・IV層。421。41はYトレンチT-2・IV層。422である。縁はこの他に、YトレンチW-1・IV層。4150が1点出土している。

3. Zトレンチについては解説省略したため、上記説明に記載した以外にも14点の白磁が出土している。次巻の『元代青白磁調査報告書』に掲載予定。

トレンチ別白磁・青磁・緑釉出土件数表

	白磁	青磁	緑釉	合計
Yトレンチ	2.0	3	5	2.8
Zトレンチ	1.9	—	—	1.9
27トレンチ	5	2	3	1.0
合計	4.4	5	8	5.7

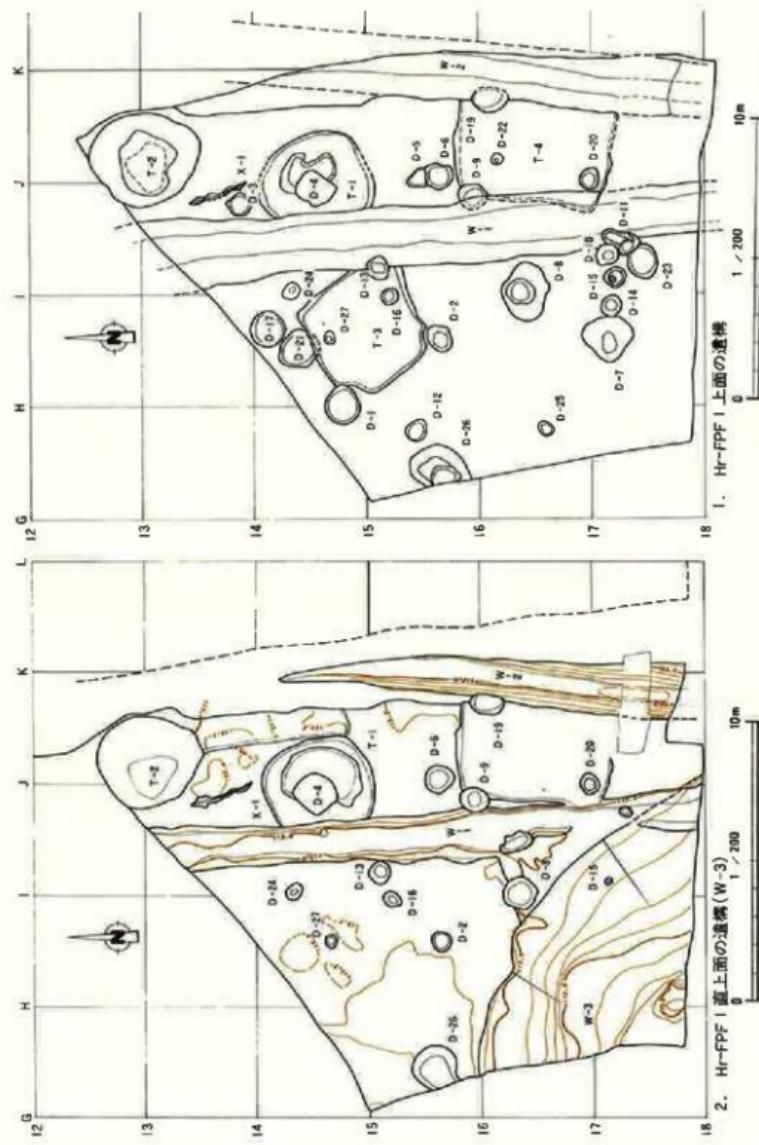


Fig. 7 Y トレンチ全体図 (1)

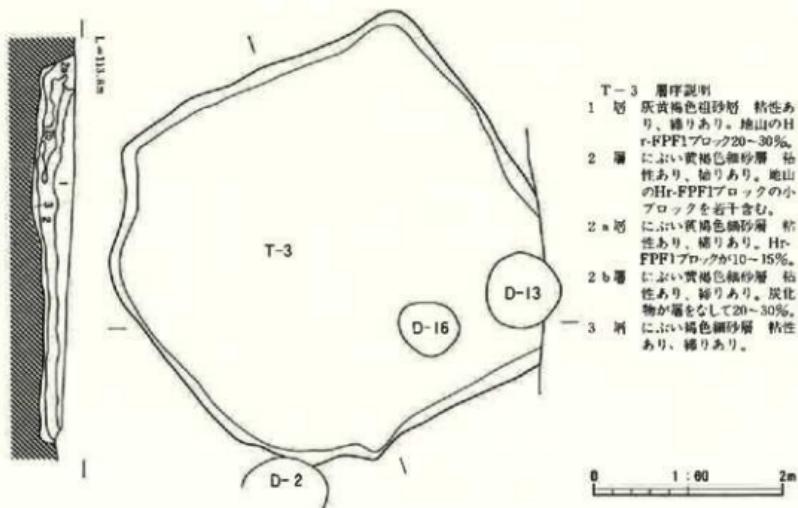
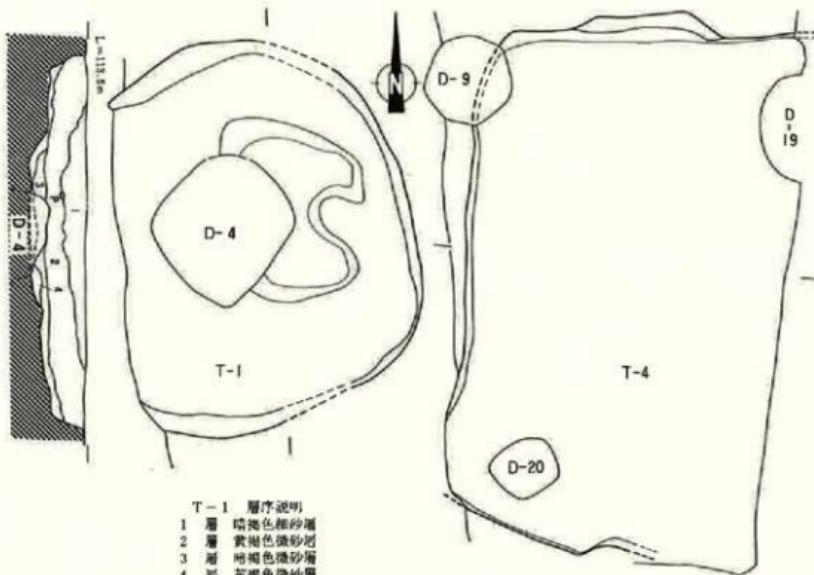
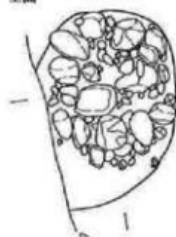


Fig. 8 Yトレンチ遺構図(1)

D-26

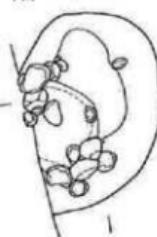
上面



中面



下面

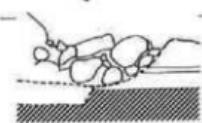


E=27.1

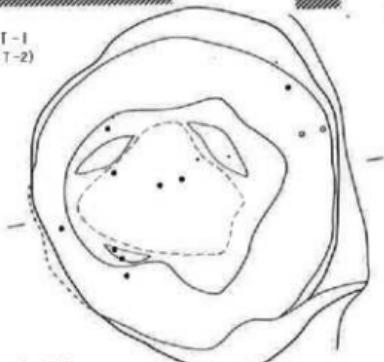
2m

0

1 : 60



(T-2)



L = 113.5m



T-2

- 1 a 層 鮎い黄褐色粗砂層
1 b 層 鮎い黄褐色粗砂層
1 c 層 黄褐色粗砂層
2 a 層 喷出褐色粗砂層
2 b 層 黄褐色粗砂層
2 c 層 黄褐色粗砂層

- 2 d 層 喷出褐色粗砂層
2 e 層 喷出褐色粗砂層
3 a 层 喷出褐色粗砂層
3 b 层 喷出褐色粗砂層
3 c 层 喷出褐色粗砂層
4 层 黑褐色粗砂層

- 4 a 层 鮎い黄褐色粗砂層
4 b 层 黑褐色粗砂層
4 c 层 鮎い黄褐色粗砂層
4 d 层 鮎い黄褐色粗砂層
4 e 层 黑褐色粗砂層

D-2 層序説明

- 1 a 層 暗灰黃色粗砂層 As-B 火山灰含む
1 b 層 オリーブ褐色粗砂層 As-B
1 c 層 黑褐色細砂層
1 d 層 1 a 層とは同じ As-B 火山灰なし
1 e 層 1 c 層と 1 d 層で構成される
1 f 層 灰化物層
1 g 層 As-B 火山灰層
1 h 層 1 c 層と同質

D-7

- 1 a 層 鮎い黄褐色粗砂層
1 b 層 喷出黄色粗砂層
1 c 層 1 a, 1 b 層は As-B
2 層 黑褐色微砂層
3 層 黄褐色砂砂層

D-11

- 1 層 底灰褐色粗砂層
2 層 黑褐色粗砂層
3 層 喷出褐色細砂層
4 层 黑褐色粗砂層
5 层 黑褐色細砂層
1, 2 層は As-B を含む。

D-8

- 1 层 黑褐色粗砂層
2 层 喷出褐色粗砂層
3 层 黑褐色微砂層
4 层 喷出褐色粗砂層
5 层 黑褐色粗砂層

D-16

- 1, 2, 3 層は T-3 に同じ
4 层 喷出褐色粗砂層
5 层 黄褐色砂砂層

D-9

- 1 層 暗灰褐色微砂層
2 层 黄褐色微砂層
3 层 灰黄褐色微砂層

D-19

- 1 层 暗灰黃色細砂層
2 层 褐色細砂層
3 层 黑褐色微砂層
4 层 オリーブ褐色粗砂層

D-10

- 1 a 層 喷出褐色粗砂層 As-B
1 b 层 黑褐色粗砂層 As-B
2 层 鮎い黄褐色粗砂層

D-20

- 1 层 鮎い黄褐色粗砂層
2 层 黑褐色粗砂層
3 层 鮎い黄褐色粗砂層

D-24

- 1 层 黄褐色粗砂層
2 层 黑褐色粗砂層
3 层 鮎い黄褐色粗砂層
4 层 黑褐色細砂層
1 ~ 3 層は、Hr-FPF1 が 5 % 含む

Fig. 9 Yトレント造構図(2)

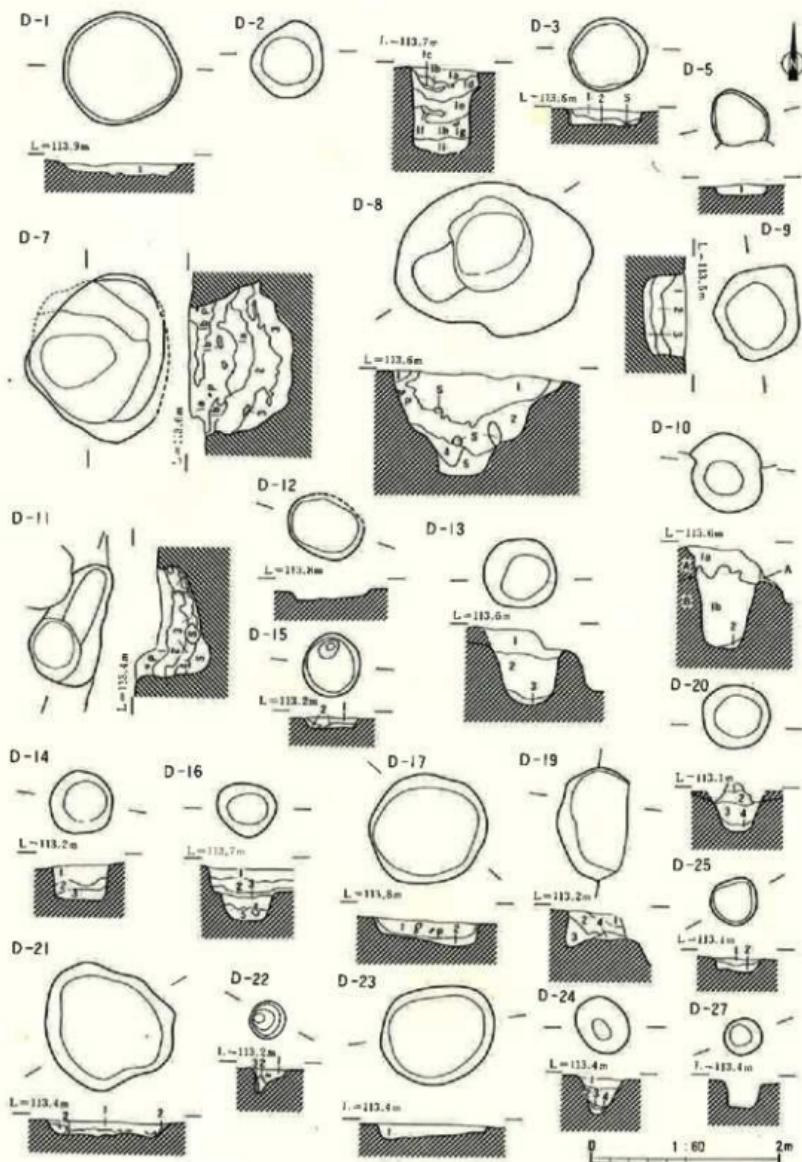


Fig. 10 Y-Trench cross-sections (3)

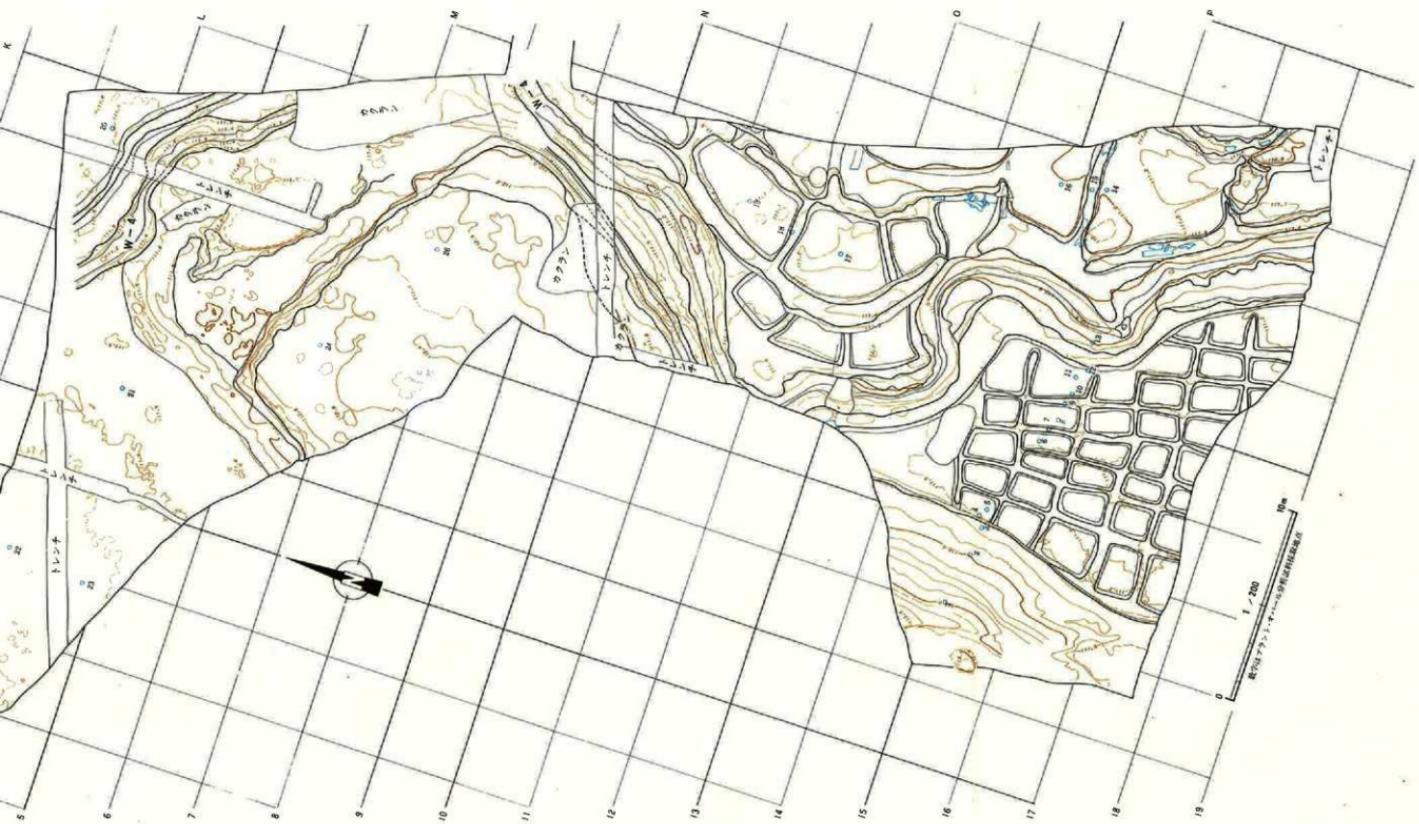


Fig. 11 Yトレンチ全体図(2) Hr-FAT下水田地

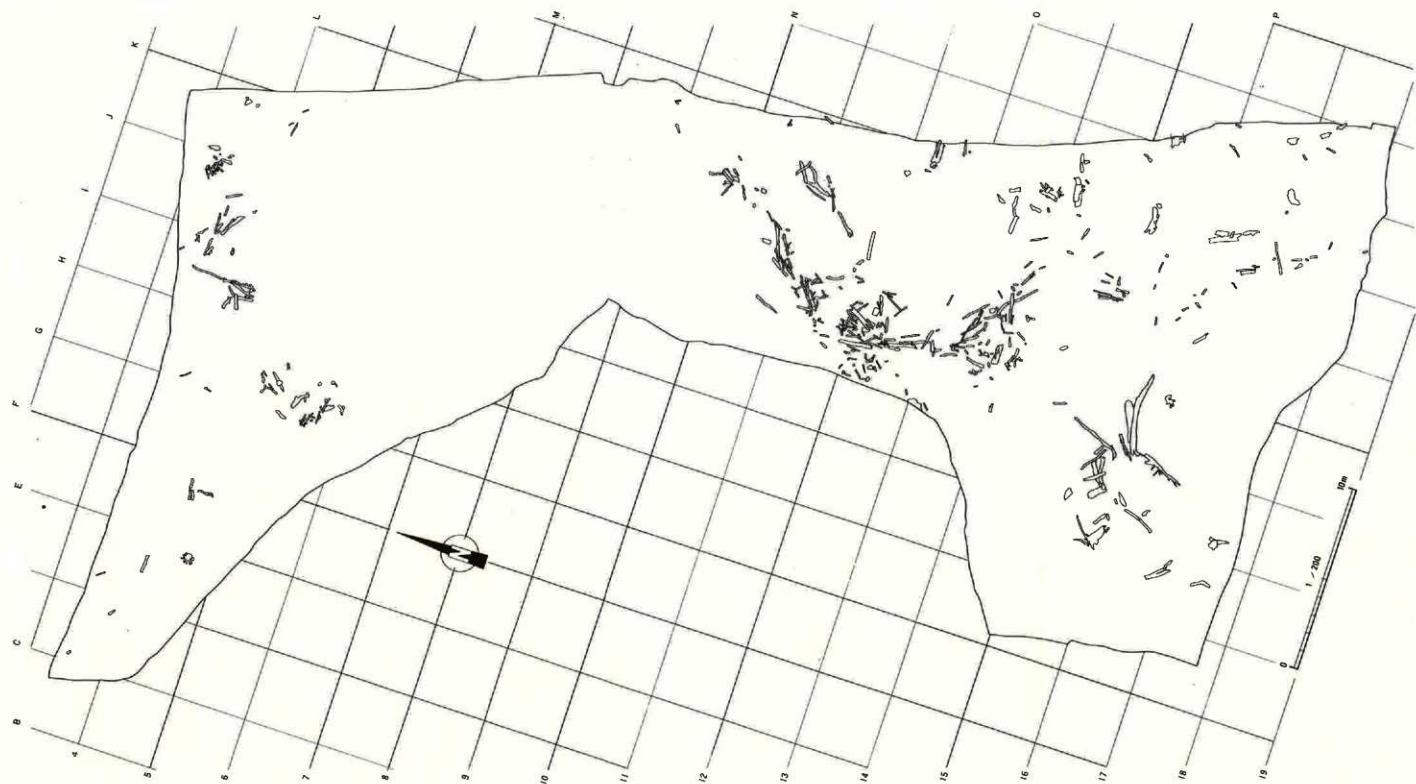


Fig. 12 Yトレンチ面層木器分布図

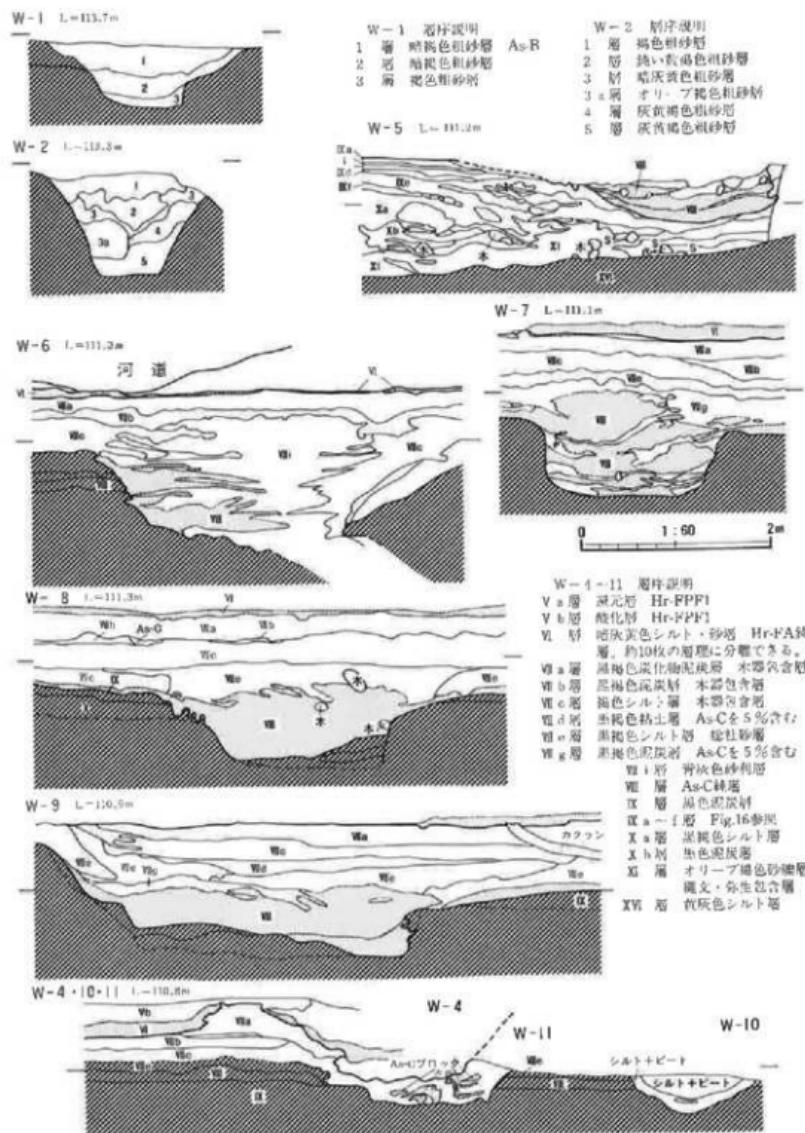


Fig. 13 ャトレンチ溝土層図

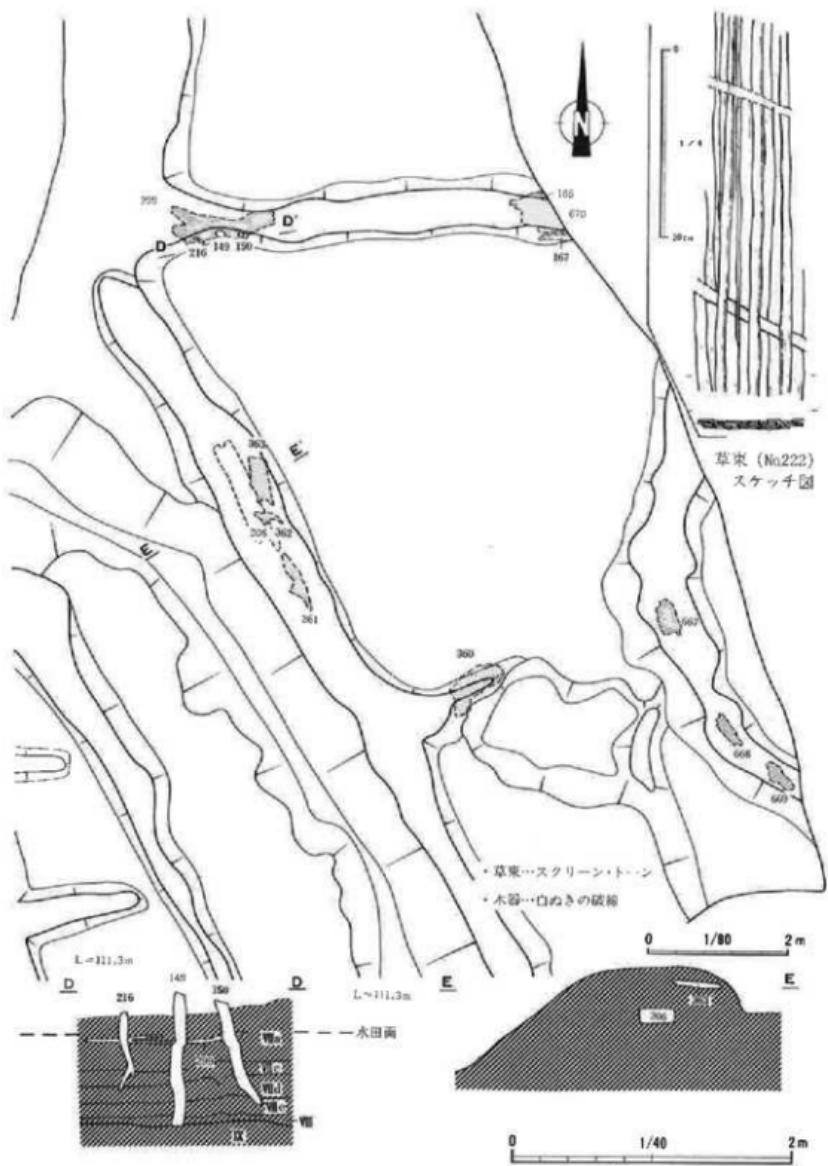


Fig. 14 Yトレンチ畔の施設 (1)

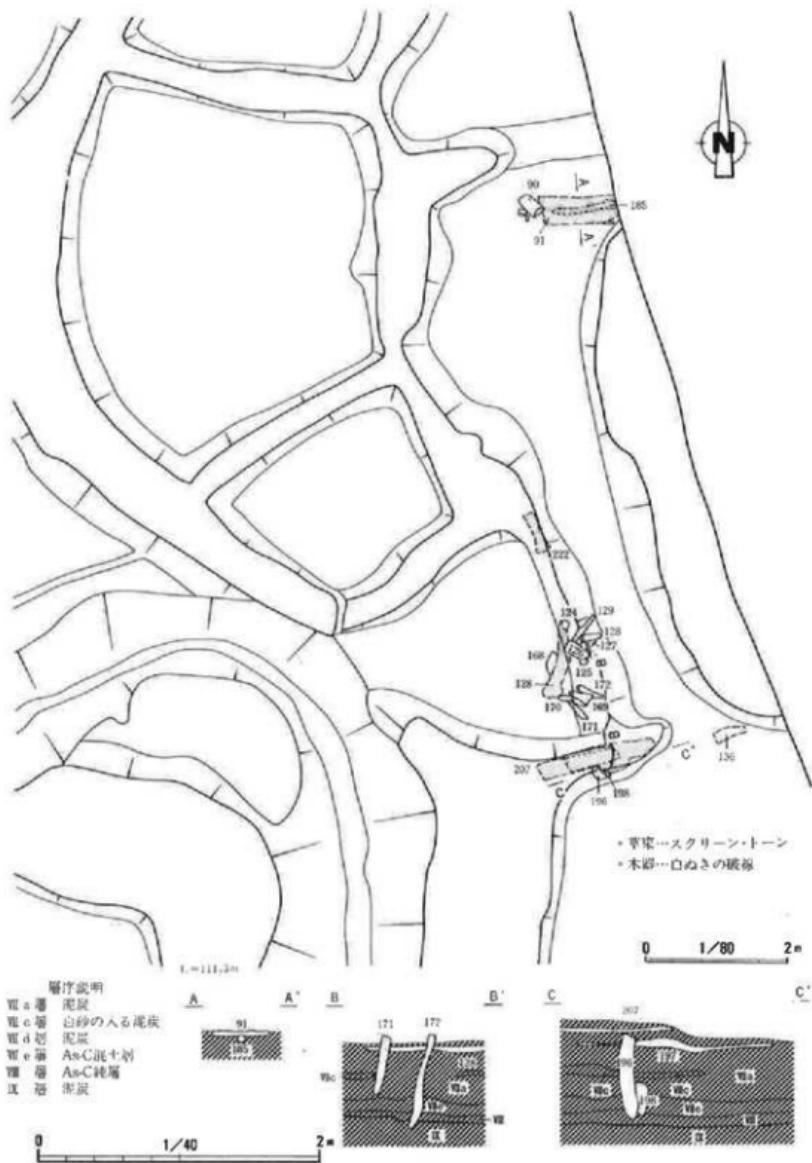
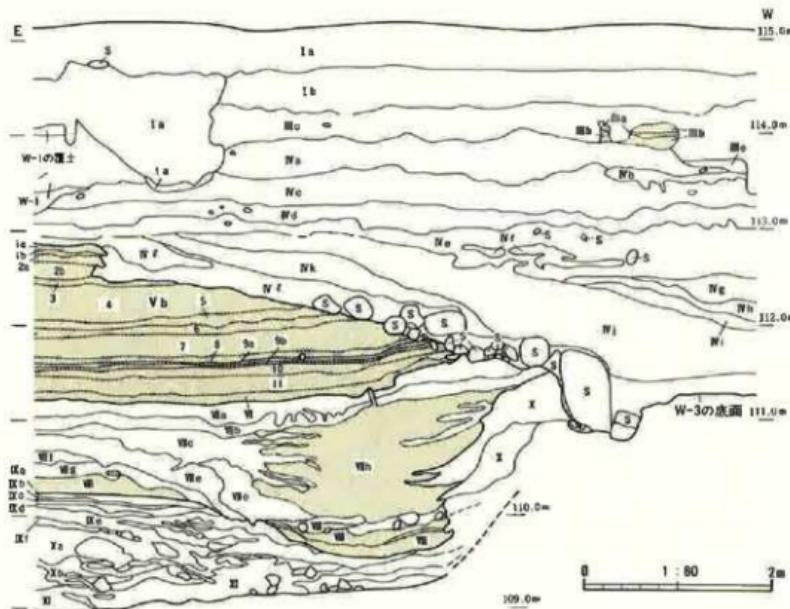


Fig. 15 Y トレンチ町畔の施設 (2)



層序説明

- I a 層 銀い黄褐色細砂層 平安時代遺物包含層。
- I b 層 黒褐色細砂層 古い耕作土層。
- II a 層 暗褐色次元灰岩 As-B火成岩純層。
- III b 層 緑オリーブ色灰岩層 As-B凝灰岩純層。
- III c 層 黑褐色細砂層 As-Bが80%以上。
- IV a 層 黑褐色細砂とAs-B混土層 黏性を有する暗褐色細粒とAs-Bがブロックで混じる。
- IV a 層 黑褐色砂層 平安時代遺物包含層。
- IV b 層 銀い黄褐色細砂層 平安時代遺物包含層。
- IV c 層 銀い黄褐色微砂層 平安時代遺物包含層。
- IV d 層 銀い黄褐色微砂層 平安時代遺物包含層。
- IV e 層 銀い黄褐色粘質層 平安時代遺物包含層。
- V b - 1a 層 銀い黄褐色粘土層 Hr-PPF1。
- V b - 1b 層 銀い黄褐色粘土層 Hr-PPF1。
- V b - 2a 層 黑褐色細砂層 Hr-PPF1。
- V b - 2b 層 黑褐色細砂層 Hr-PPF1。
- V b - 3 層 銀い黄褐色細砂層 Hr-PPF1。
- V b - 4 層 銀い黄褐色細砂層 Hr-PPF1。
- V b - 5 層 銀い黄褐色シルト層 Hr-PPF1。
- V b - 6 層 銀い黄褐色シルト層 Hr-PPF1。
- V b - 7 層 銀い黄褐色細砂層 Hr-PPF1。
- V b - 8 層 黑褐色シルト層 Hr-PPF1。
- V b - 9a 層 黑褐色シルト層 Hr-PPF1。
- V b - 9b 層 黑褐色シルト層 Hr-PPF1。

- V b - 10 層 黑褐色粗砂層 Hr-PPF1。
- V b - 11 層 黑褐色粗砂層 Hr-PPF1。
- VI 層 増灰黃褐色シルト・砂層 Hr-FA純層。粘性極まりあり。約10枚の層理に分離できる。
- VI a 層 黑褐色炭化物混灰岩層 木器包含層。
- VI b 層 黑褐色泥灰岩層 木器包含層。
- VI c 層 黑褐色シルト層 木器包含層。
- VI d 層 黑褐色粘土層 粘性強く締まりあり。As-Cを30%含む。木器包含層。
- VI e 層 黑褐色・灰色粗砂層。粘性・締まりなし。
- VI f 層 黑褐色泥灰岩 As-Cが5%含む。
- VI g 層 一次堆積のAs-C。
- VI h 層 As-C純層。
- VI i 層 黑褐色泥灰岩層。
- VI j 层 黑褐色泥灰岩層。
- VI k 层 黑褐色泥灰岩層。
- VI l 层 黑褐色泥灰岩層。
- VI m 层 黑褐色泥灰岩層。
- VI n 层 黑褐色泥灰岩層。
- X a 層 黑褐色シルト層 粘性極まりあり。
- X b 层 黑褐色泥灰岩 As-YPを20%含む。
- XI 層 オリーブ褐色砂層層 粘性・締まりなし。直徑10mm以下の空洞で構成。調文・弥生時代遺物包含層。

Fig. 16 Yトレント土層図(1)

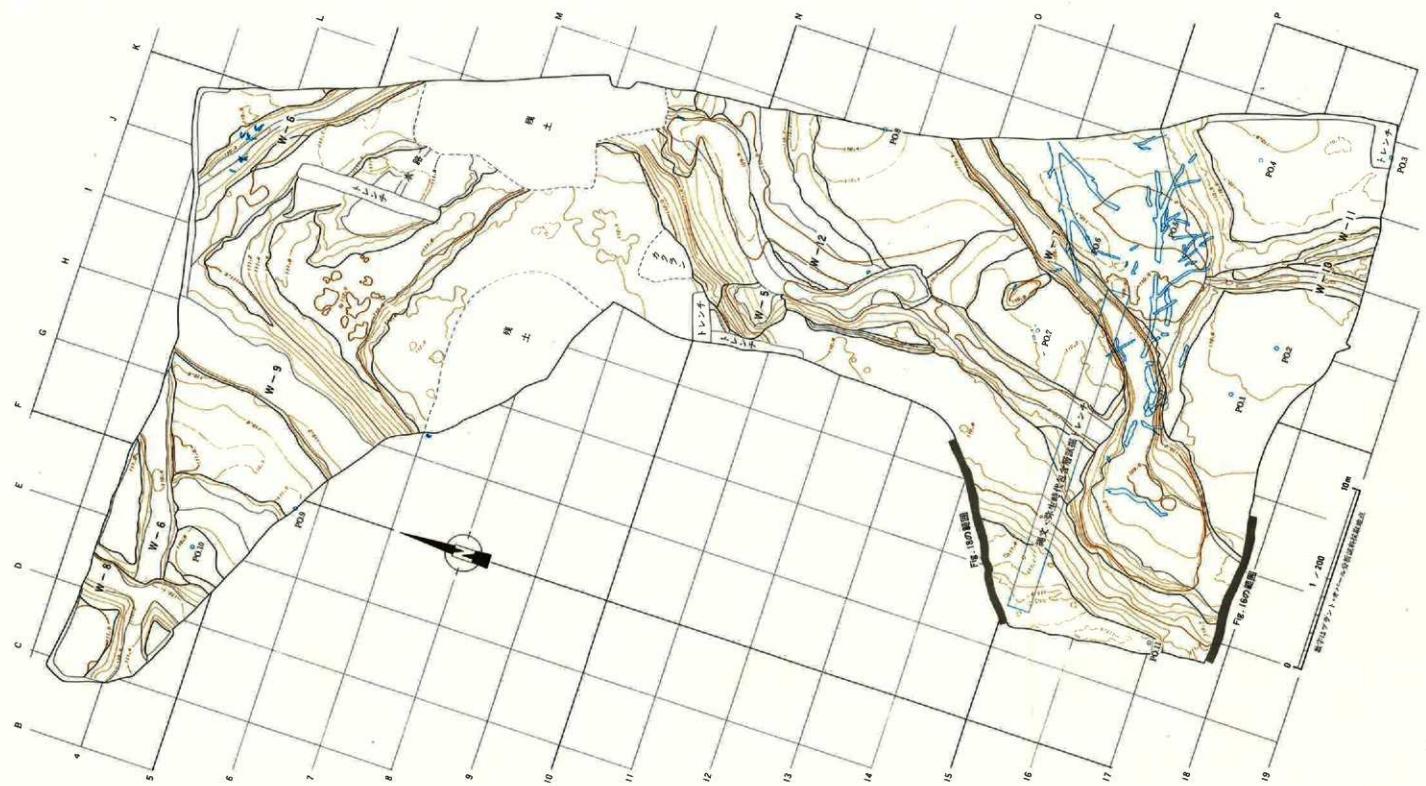


Fig. 17 Yトレンチ全体図 (3) As-C直下面

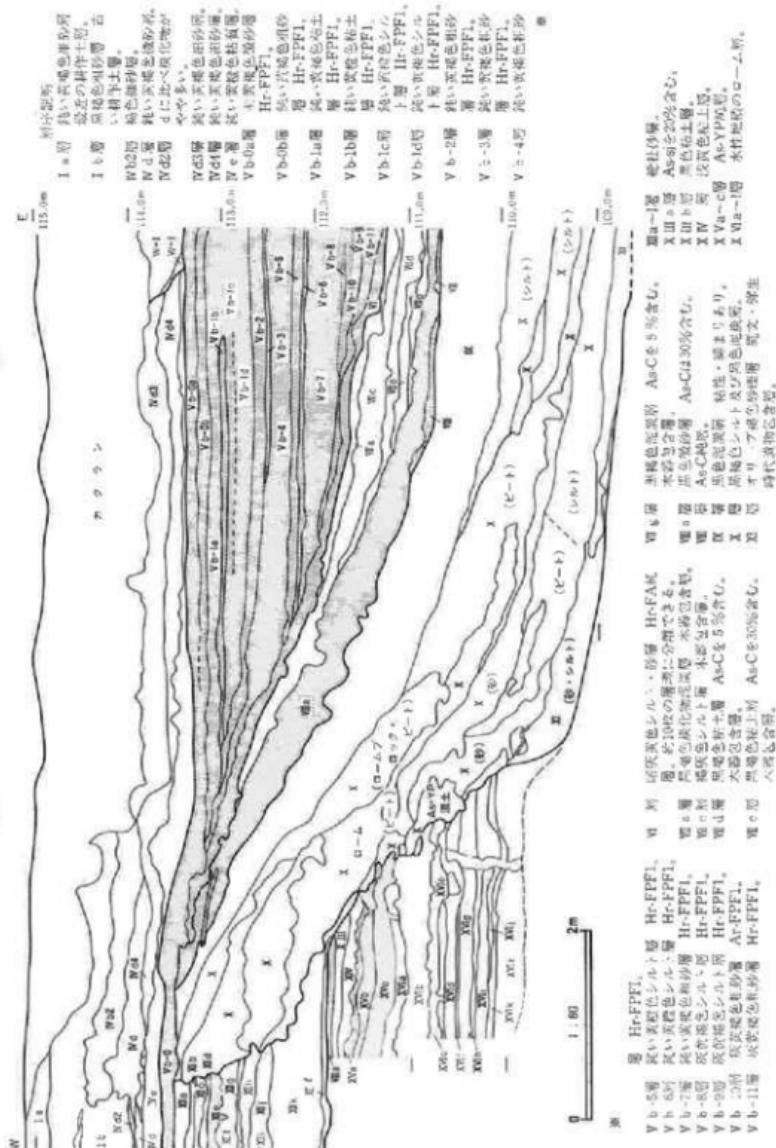


Fig. 18. Yule's test (2)

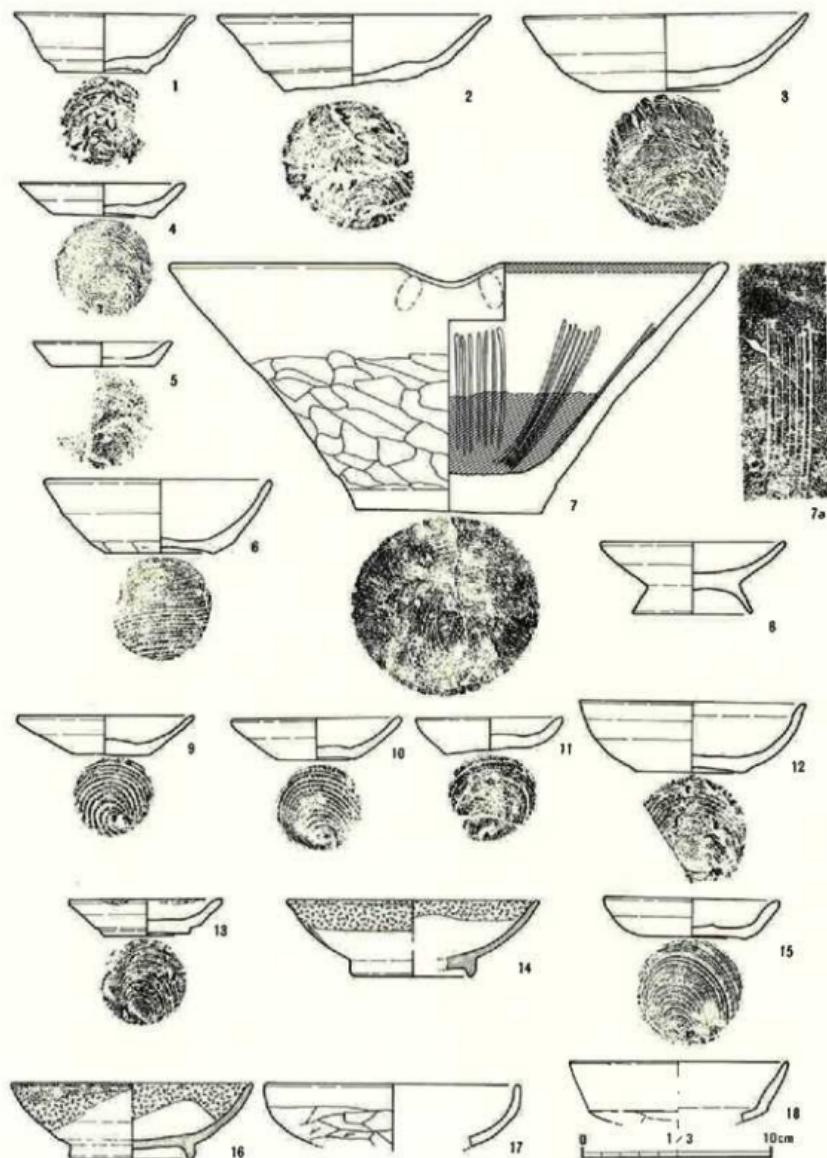


Fig. 19 Y-トレンチ出土遺物 (1)

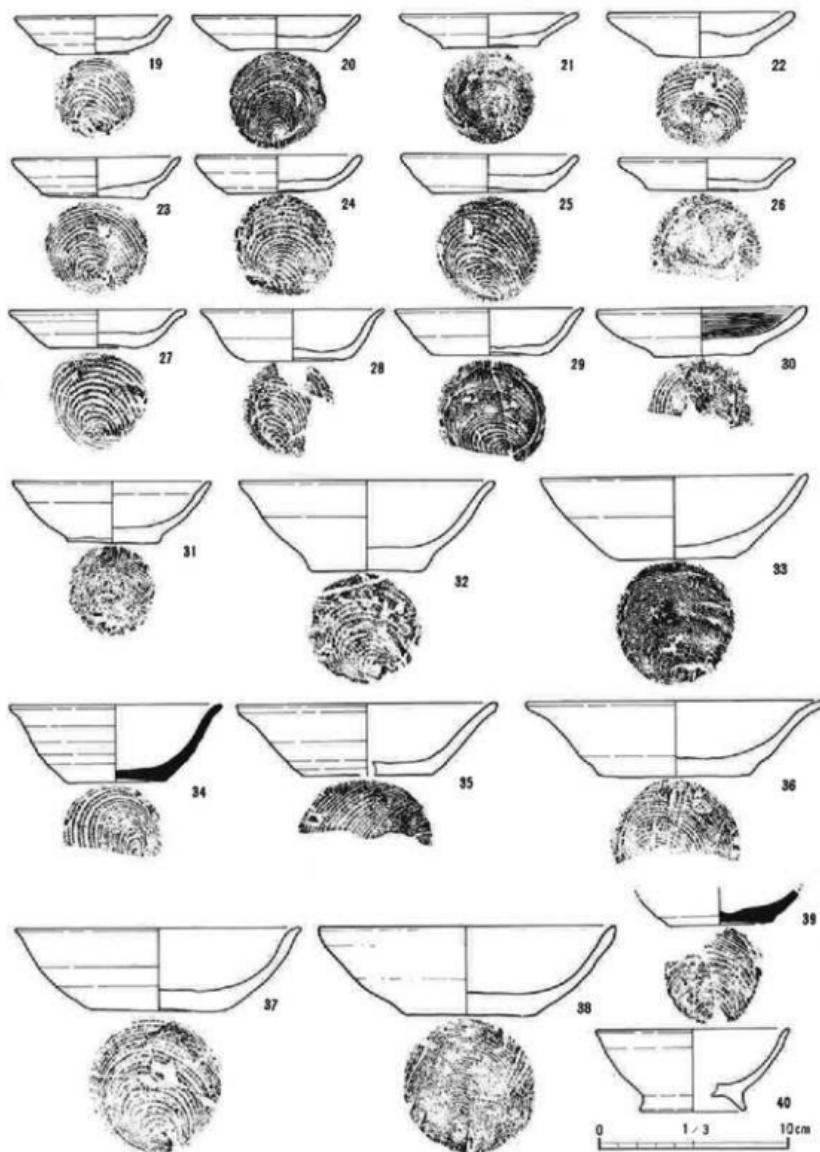


Fig. 20 Yトレント出土遺物 (2)

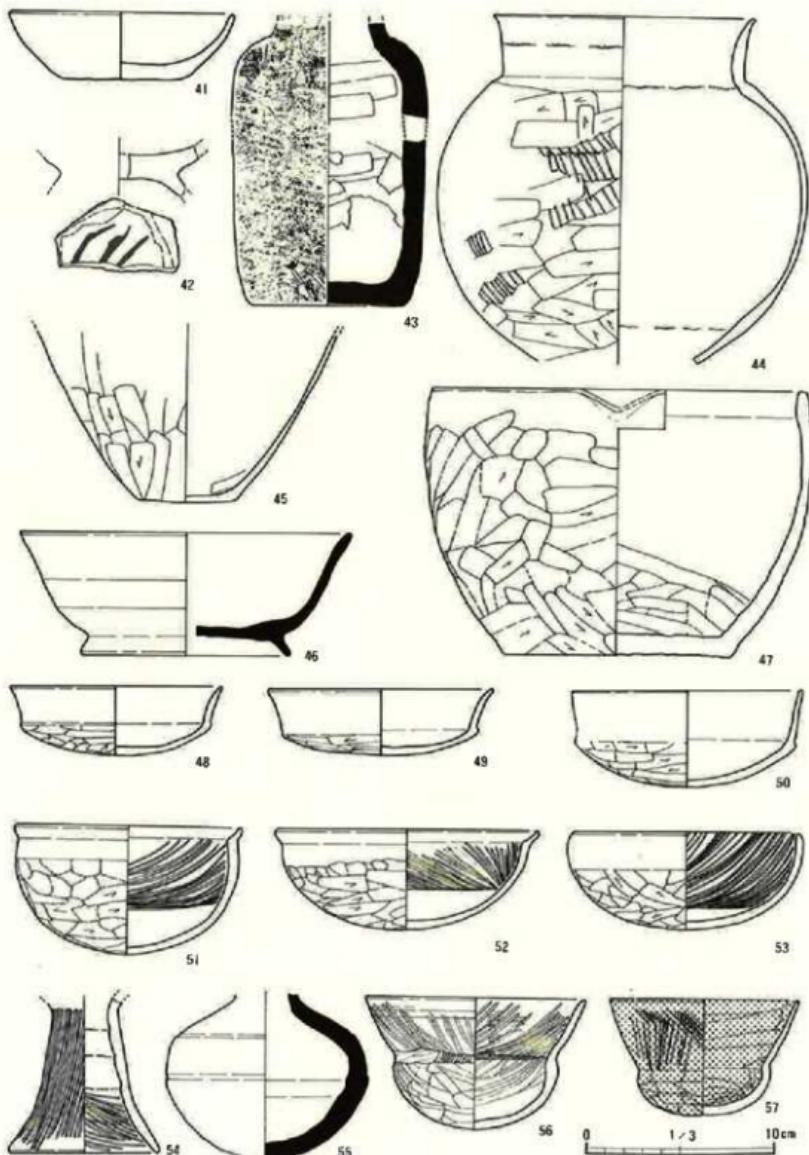


Fig. 21 Yトレンチ出土遺物(3)

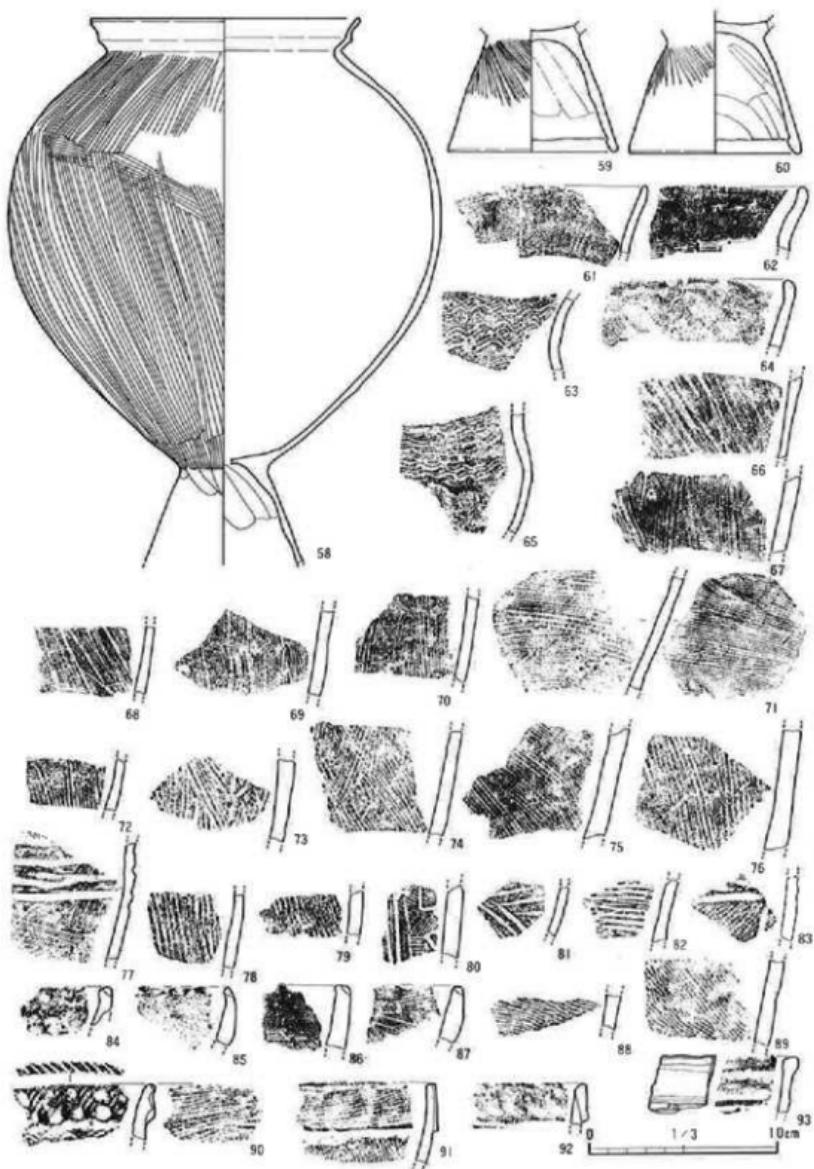


Fig. 22 Yトレンチ出土遺物 (4)

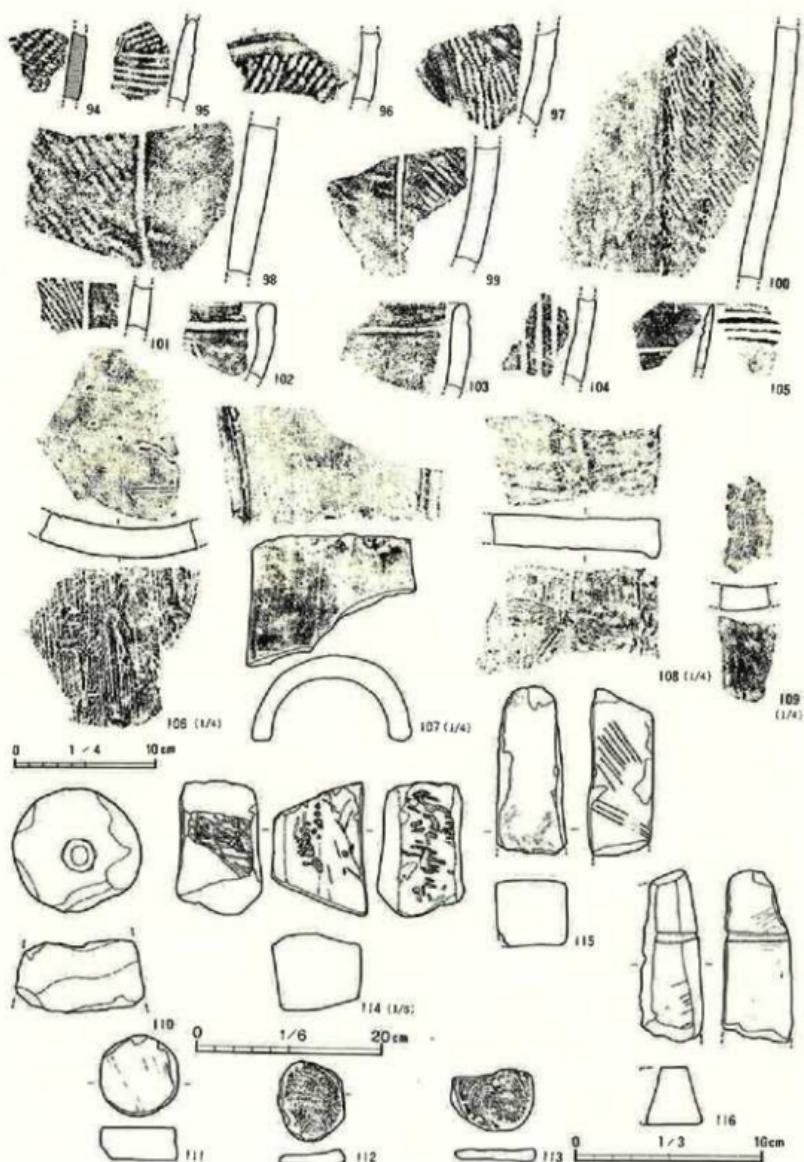


Fig. 23 Yトレンチ出土遺物 (5)

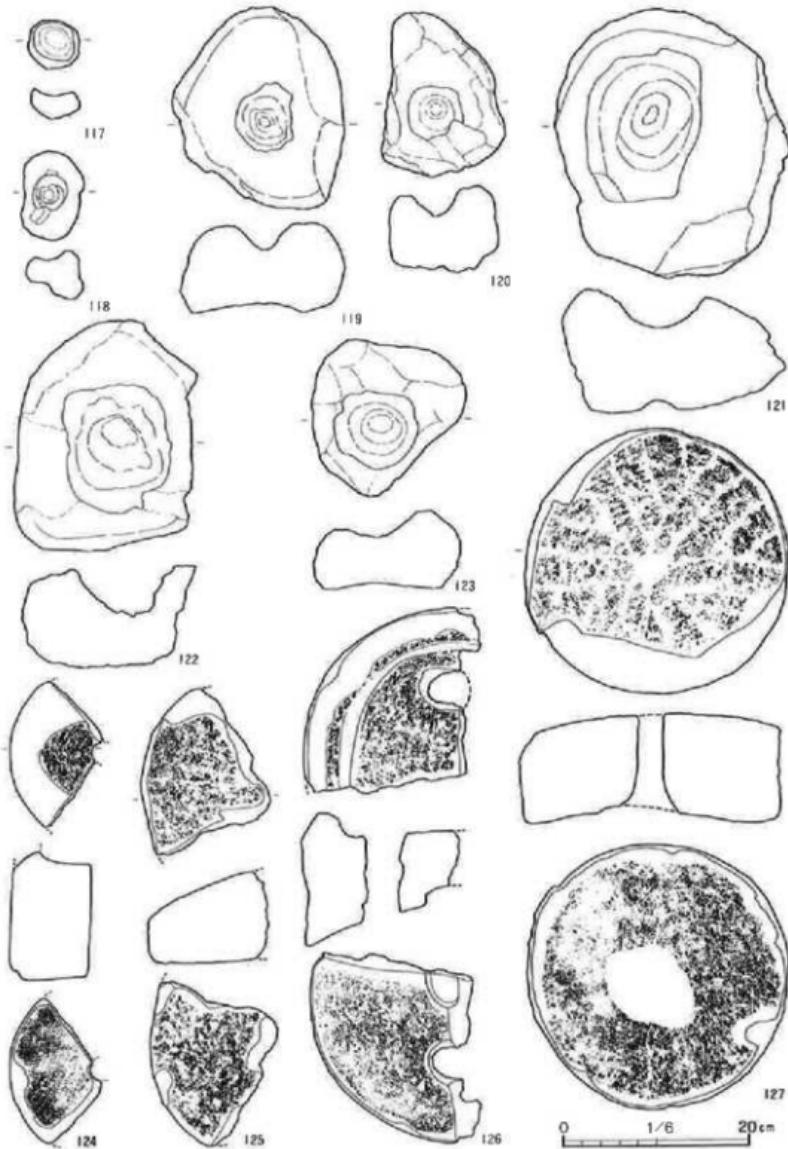


Fig. 24 Yトレンチ出土遺物 (6)

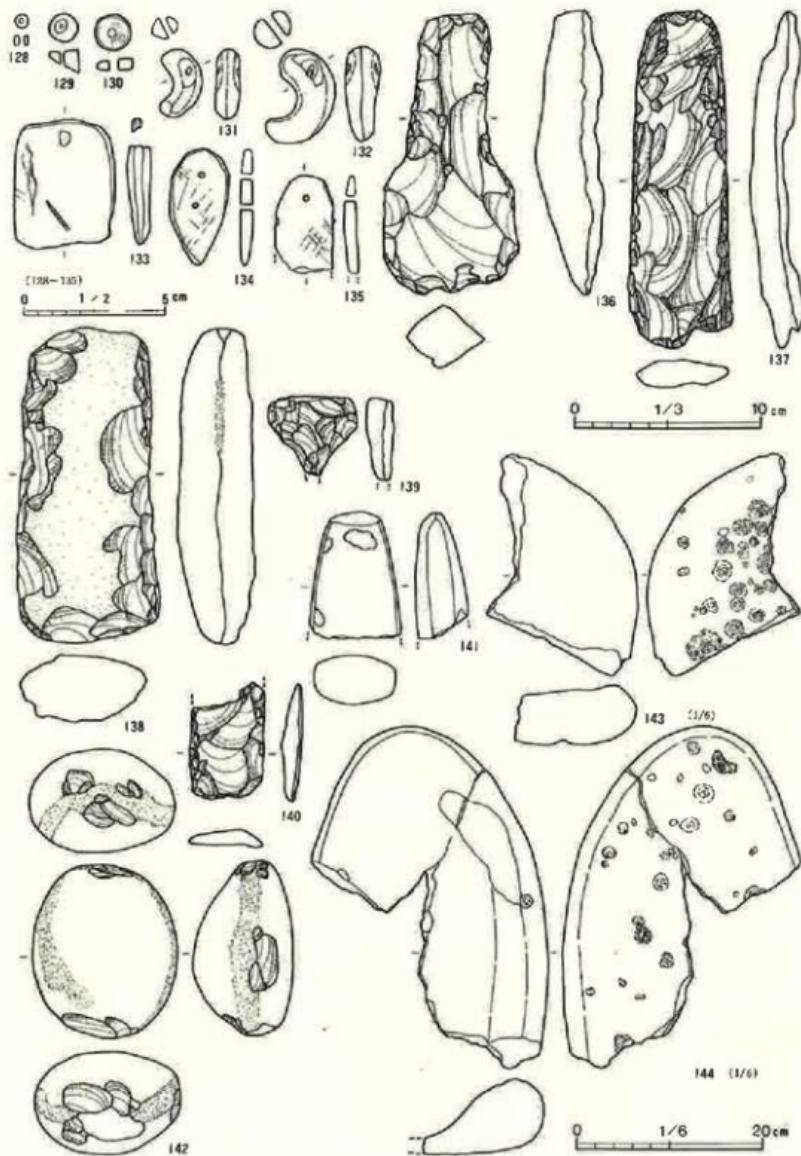


Fig. 25 Yトレンチ出土遺物(7)

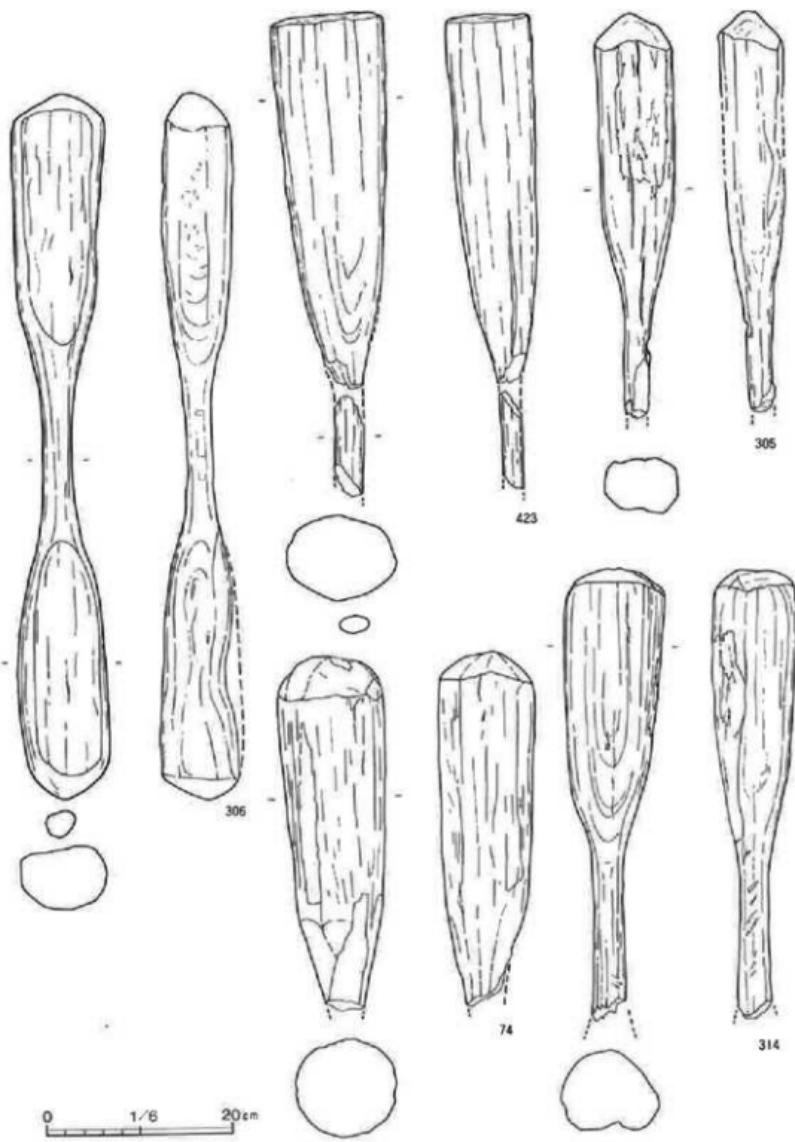


Fig. 26 Yトレンチ出土遺物 (8)

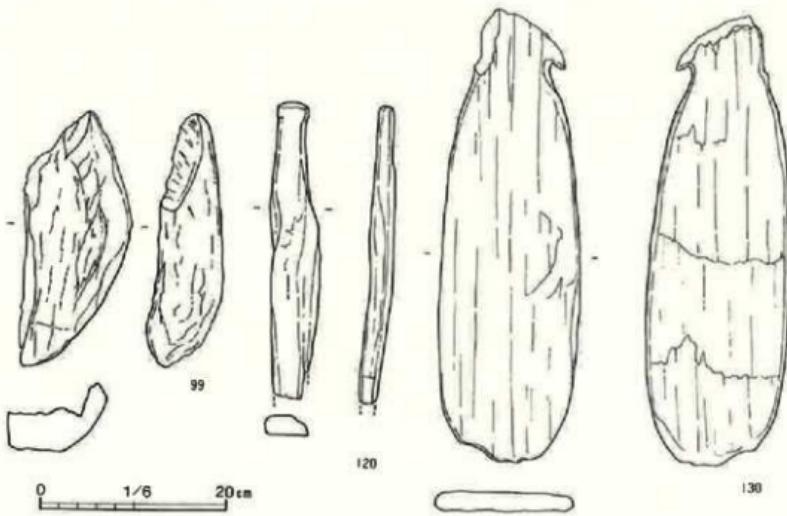
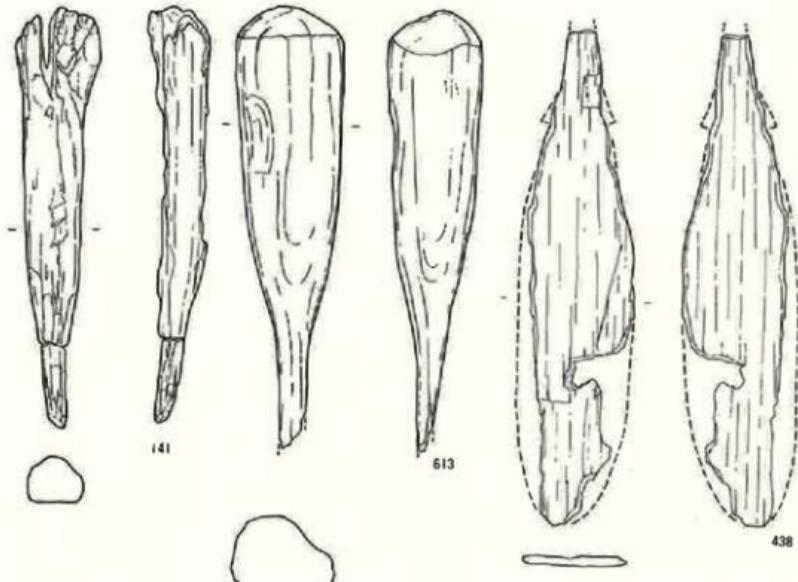


Fig. 27 Yトレント出土遺物 (9)

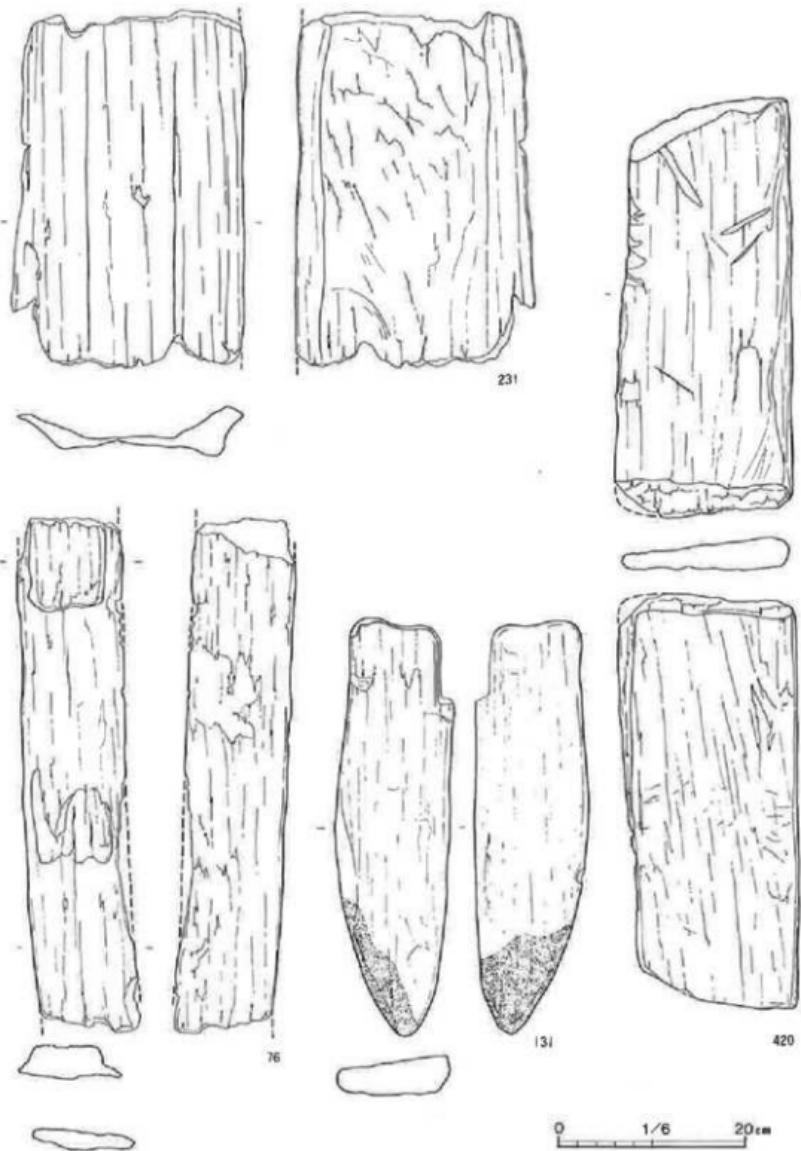


Fig. 28 Y レンチ出土遺物 (6)

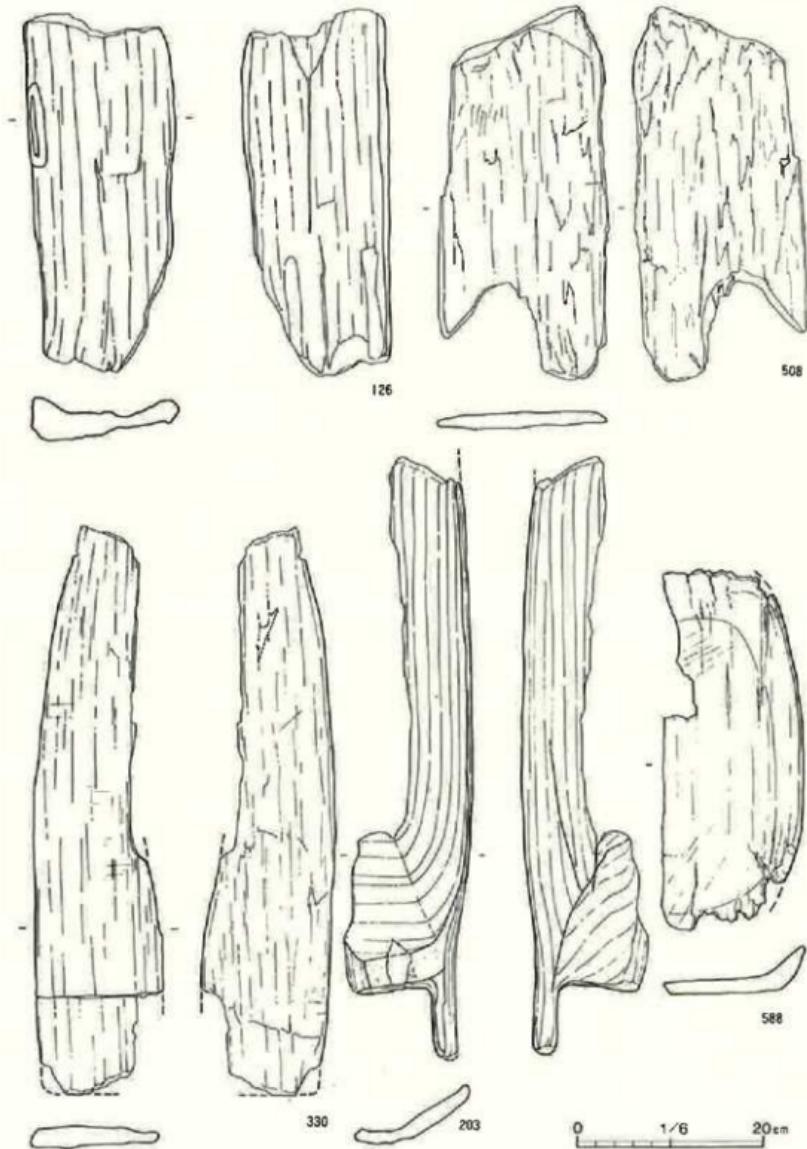


Fig. 29 Yトレンチ出土遺物 (II)

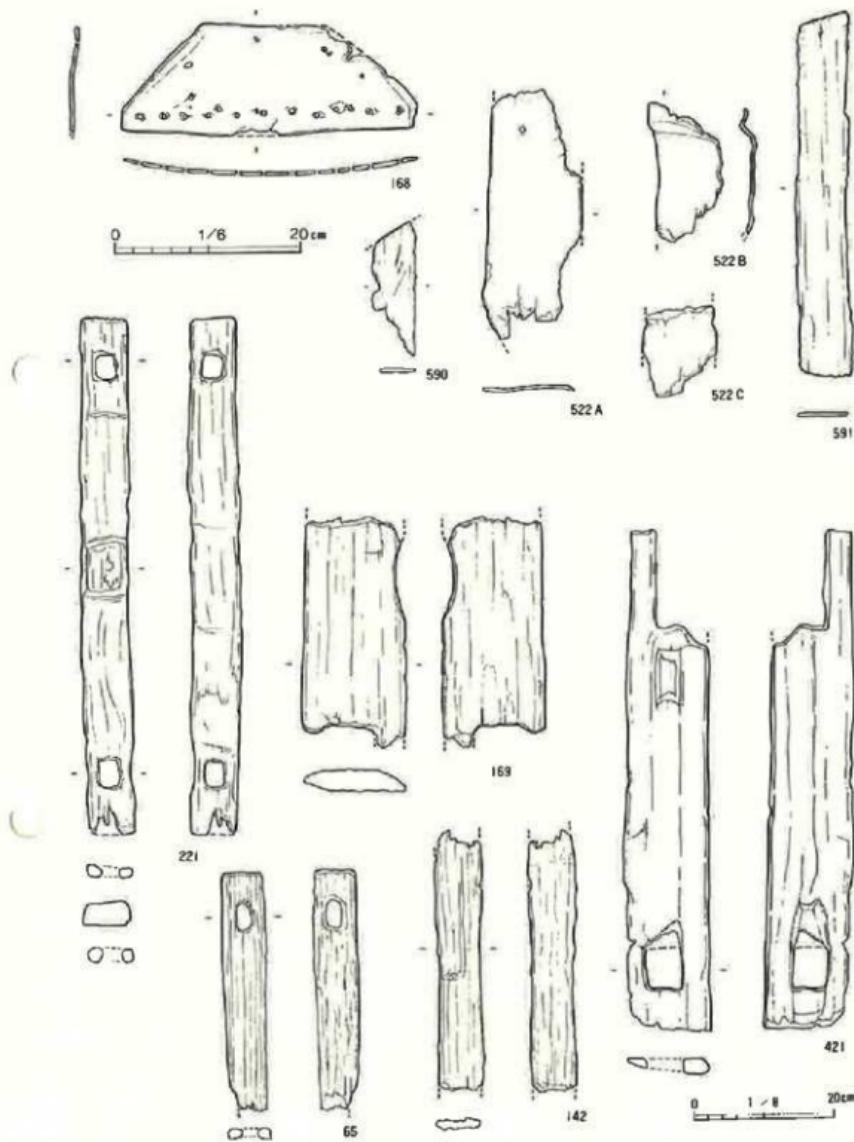


Fig. 30 Yトレンチ出土遺物 (2)

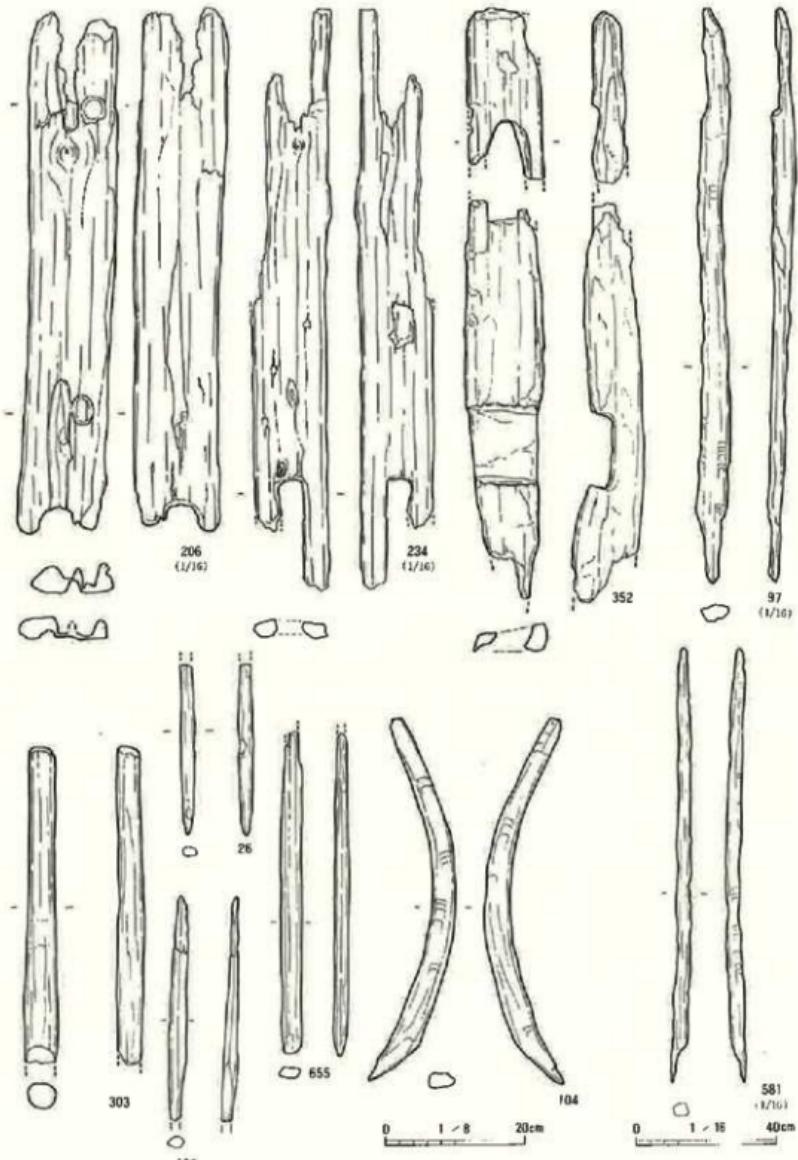


Fig. 31 Yトレンチ出土遺物 (3)

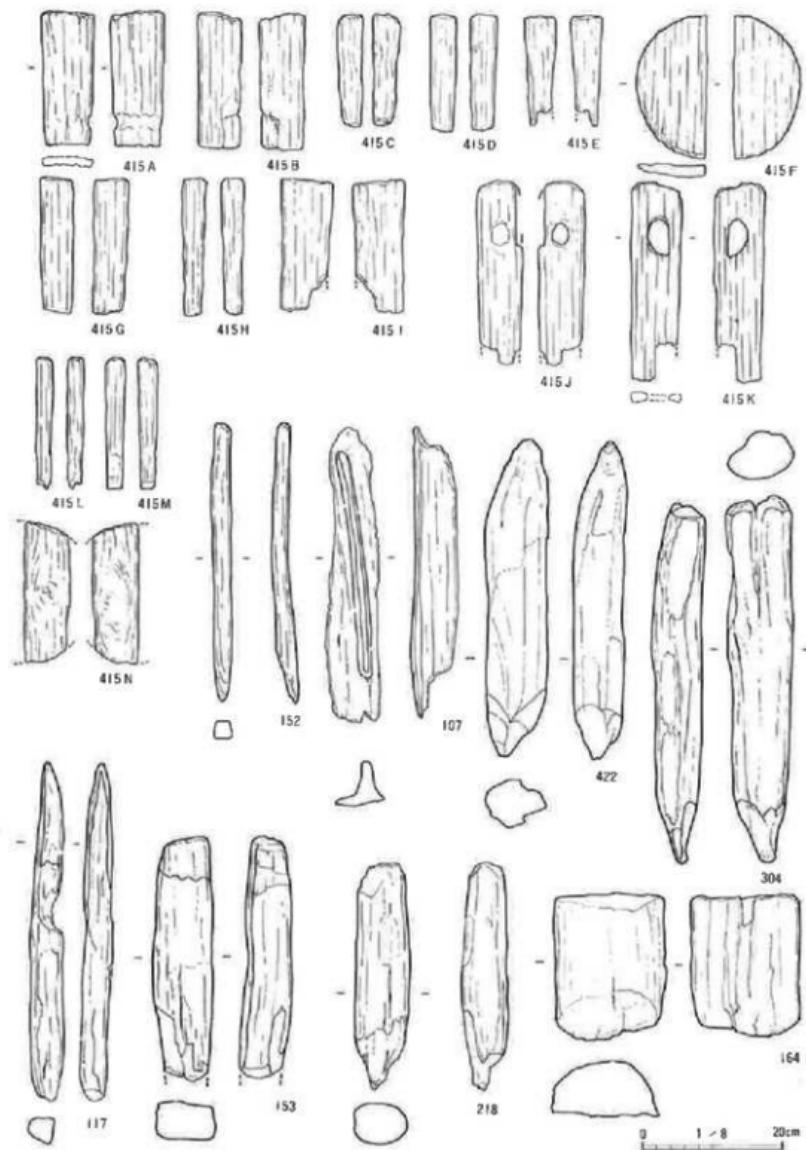


Fig. 32 ヤトレンチ出土遺物 ⑩

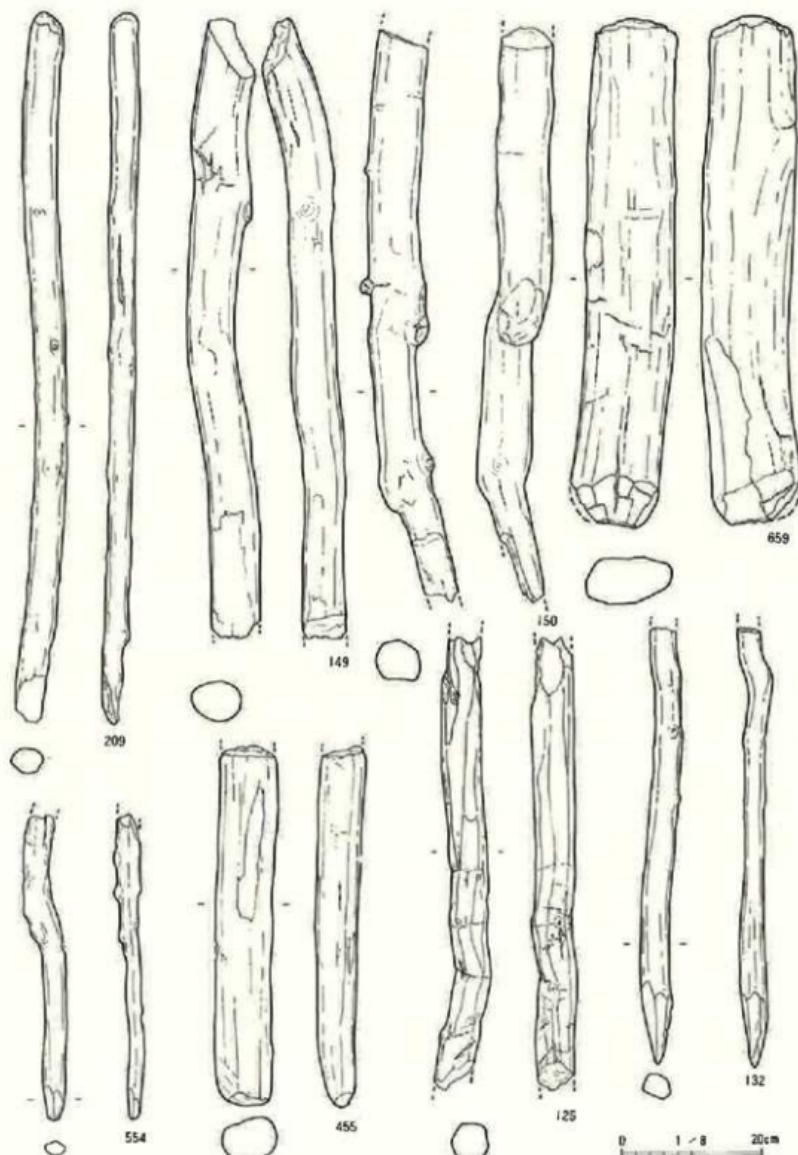


Fig. 33 Yトレンチ出土遺物 (9)

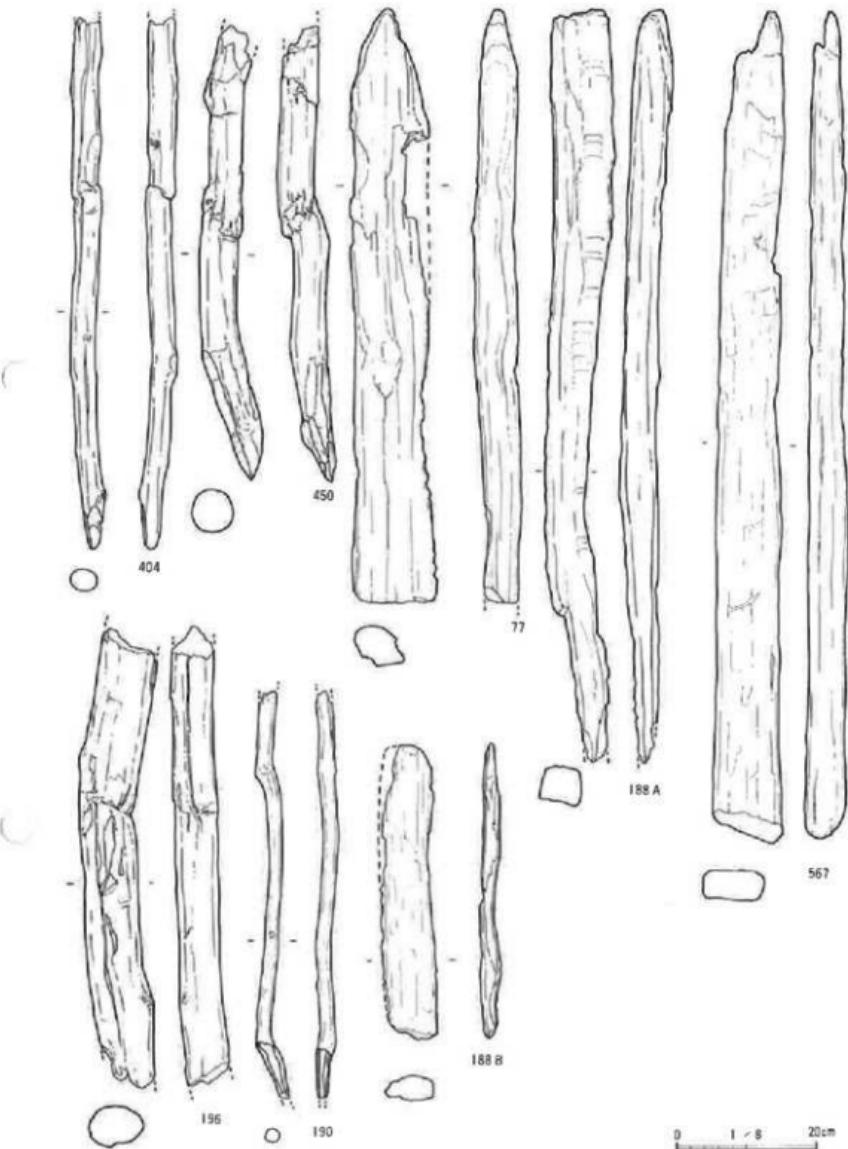
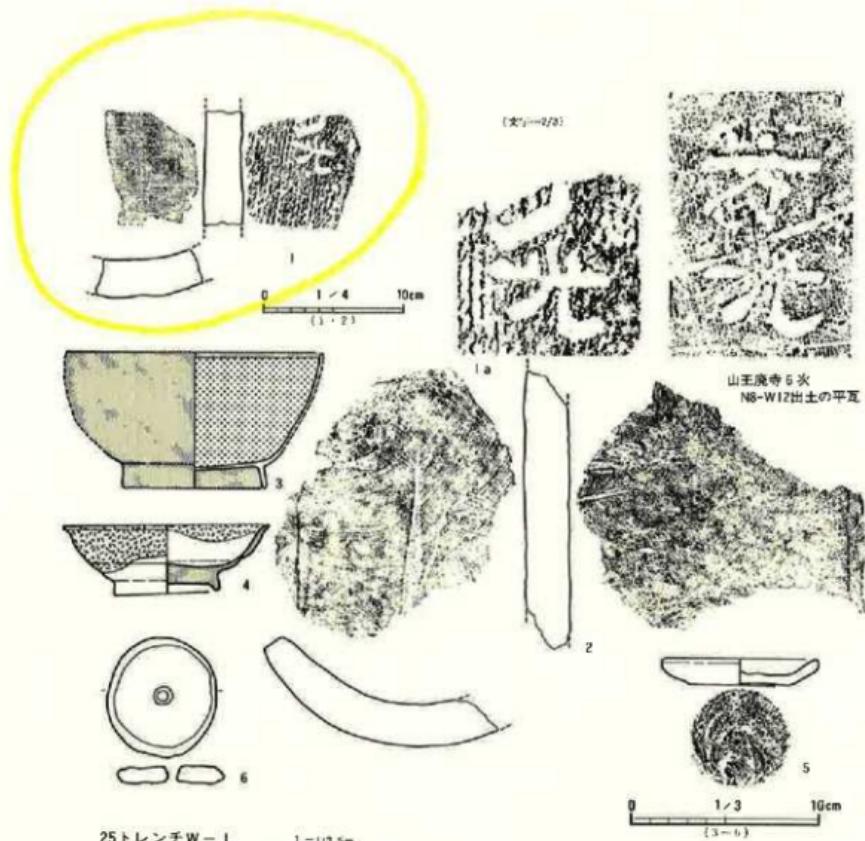


Fig. 34 Yトレンチ出土遺物 00



25トレーナーW-1 L-1:3.5m

- 層序説明
- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 層 順褐色粗砂層 粘性わずかで縦りあり。現代。 | 4 a 層 に述べる黄褐色粗砂層 粘性わずかで縦りあり。 |
| 2 層 黄褐色粗砂層 粘性わずかで縦りあり。 | 4 b 層 に述べる黄褐色粗砂層 粘性わずかで縦りあり。 |
| 3 層 次黄褐色粗砂層 粘性わずかで縦りあり。 | 5 層 喷灰黄色粗砂層 粘性あり、縦りあり。 |
| 4 層 喷灰黄色粗砂層 粘性わずかで縦りあり。 | 6 層 喷灰黄色粗砂層 粘性強く縦りあり。 |

0 1/60 2m

Fig. 35 Z-25トレーナー出土遺物とW-1のセクション図

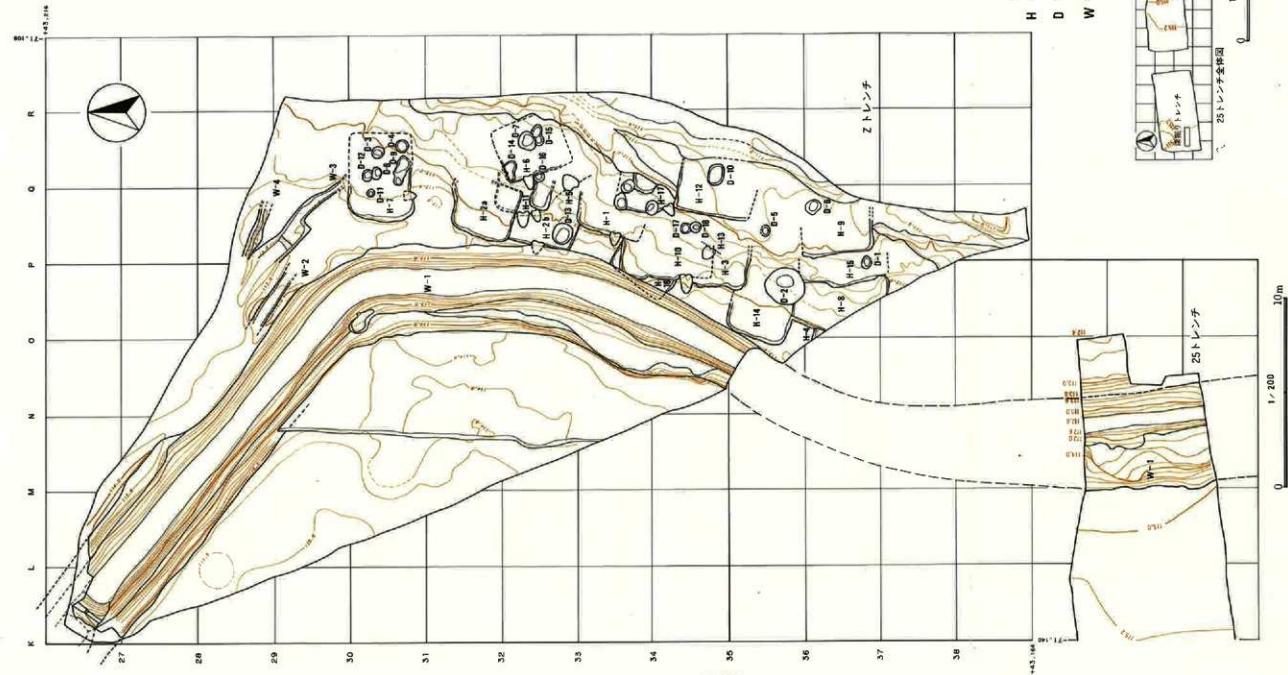
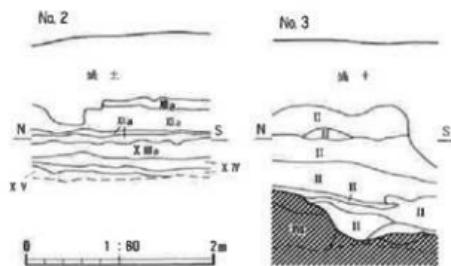
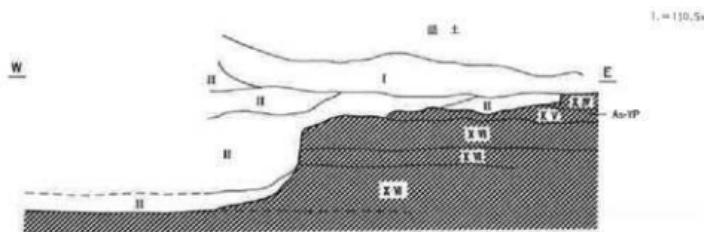
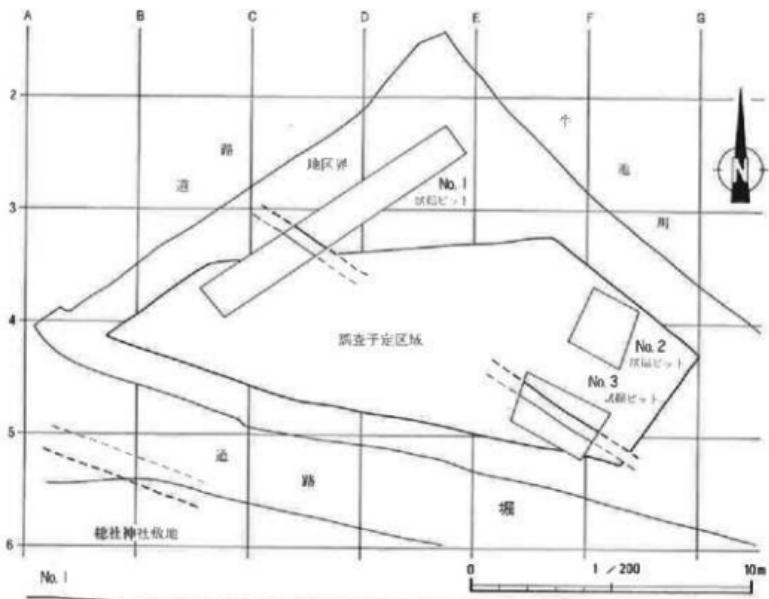


Fig. 36 Z・25トレンチ全体図



No. 1 ~ 3 碾压成明
 I 層 穗い黄褐色粗砂層 最近の耕土層。
 II 層 黒褐色粗砂層 平安時代以前の層。
 III 層 穗い黄褐色シルト層 耕作砂層。
 XIII 層 略底褐色粗石層 直径1~5mmの
 Aa-afを20%含む。
 XIV 層 浅い黄褐色粘土層 粘性強く硬まりあり。
 XV 層 穗い黄褐色粗石層 Aa-YP純層。
 XVI 層 穗い黄褐色シルト層 粘性強く硬
 まりあり。

Fig. 37 26トレンチ試掘調査

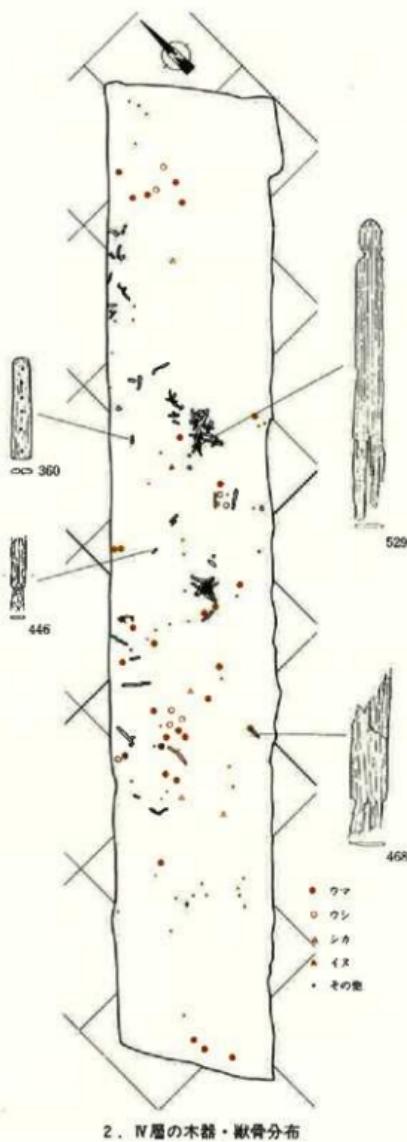
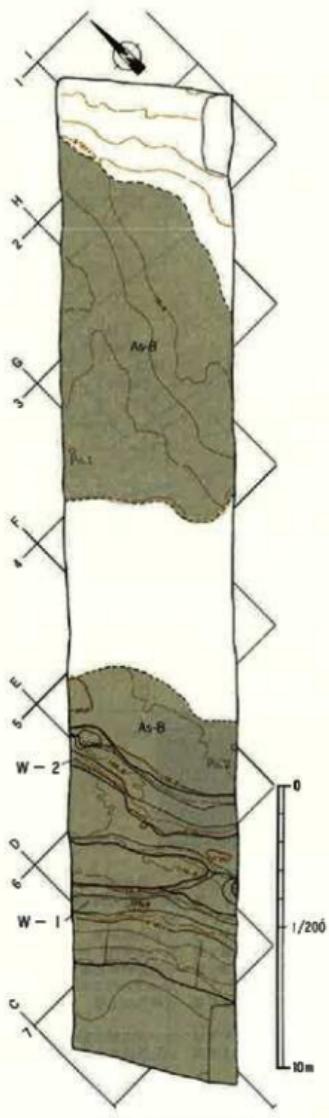
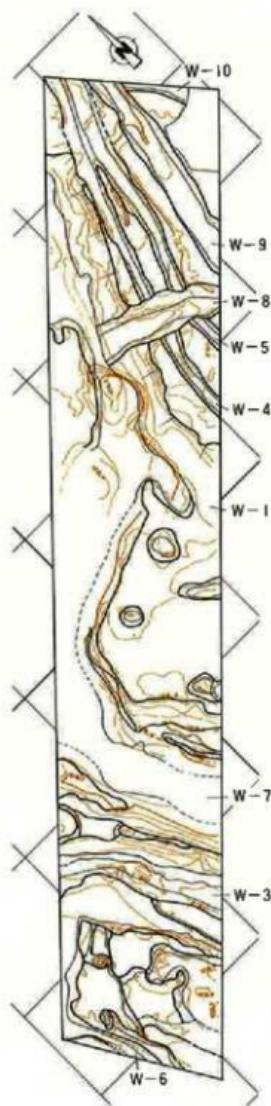


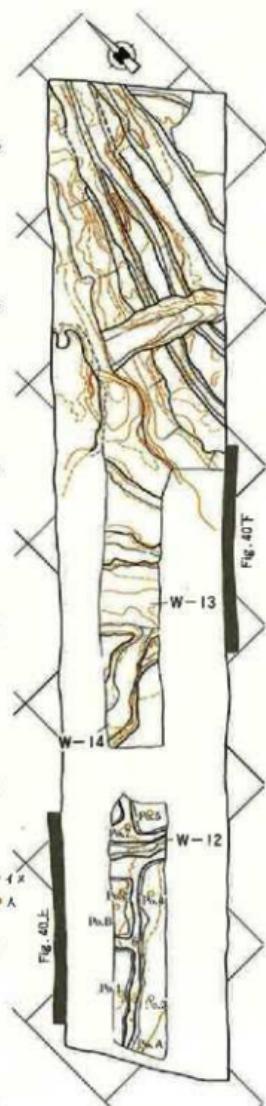
Fig. 38 27トレンチ全体図 (1)



3. Hr-FPFI直上面の遺構

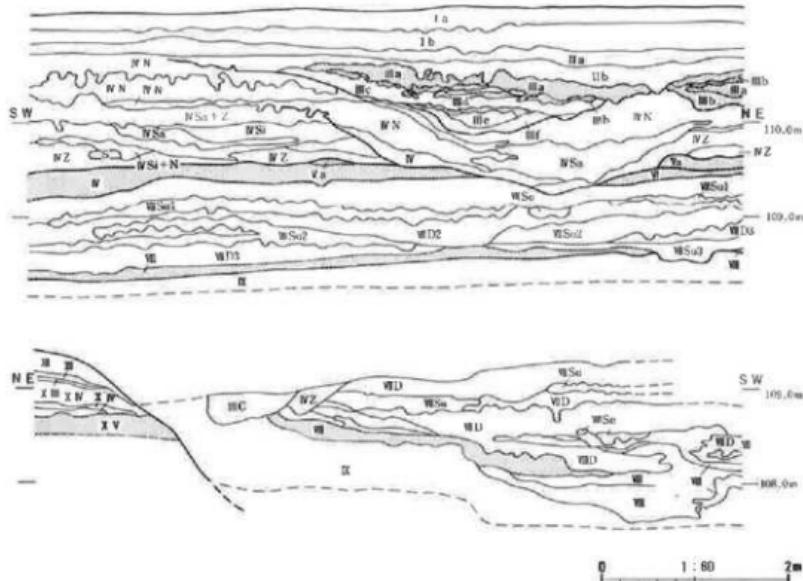


4. 上層の木器分布



5. As-C直下面の水田土

Fig. 39 27トレンチ全体図 (2)



序 説

- | | | | |
|-------------|---|--------|--|
| I-a 层 | 薄い、黄褐色細砂層
最近の積成土層。 | D 1 層 | 黒色泥炭層・粘性・縮まりとも強く。ふかふかとした土である。 |
| I-b 層 | 黒褐色粗砂層
古い堆积土層。 | D 2 层 | オリーブ色泥炭層・粘性・縮まりとも強く、ふかふかした層である。 |
| I-c 層 | 黒褐色粗砂層
平安時代以降の層。 | D 3 层 | 黑色泥炭層・粘性・縮まりともあり。他のビートと同様にふかふかした状況である。 |
| I-b' 层 | 黒褐色粗砂層
平安時代以降の層。 | Su1層 | 灰オリーブ色砂層
As-Cで50%以上。 |
| I-b'' 层 | 灰褐色粗砂層
As-Cで50%以上。 | Su2層 | 灰褐色砂層
An Cの堅石被が7~10%入る。 |
| I-d 层 | 暗赤灰色火山灰層
As-B ₁ ・火山灰鉄層。 | Su3層 | 暗オリーブ色砂層
As-Cを切る溝である。As-Cの黒層と黒Dのビートによって構造される。 |
| I-e 层 | 灰オリーブ色粗砂層
As-B ₂ 性心層。 | Su4層 | 暗オリーブ色砂層 |
| I-f 层 | 浅黄色粗砂層
As-B ₂ 性心層。 | Su5層 | 灰白色泥炭層 |
| N-N' 层 | 灰無色粘質弱風化物・Hr-FPFI粒子? ~10%含む。
平安時代遺物包含層。 | Su6層 | 灰白色粘土層
As-C粘層。 |
| N-Sa 层 | 妙層・織襷層が走った層。 | D 4 层 | 黑色泥炭層。 |
| N-Sa 层 | オリーブ色風化層
無機性なく腐食りややあり。上部には砂層・泥層が互層をなす。
平安時代遺物包含層。 | Su7層 | 前オリーブ色砂層。 |
| N-Si 层 | 灰褐色風化頁岩色シルト層
平安時代遺物包含層。 | D 5 层 | 黑色泥炭層。 |
| N-Si+N-N' 层 | シルトと粘土が混じた層。 | D 6 层 | 黑色泥炭層。 |
| N-N' 层 | 明灰黄色粘土層
無機性なく縮まりややあり。砂と塵が互層をなす。
平安時代遺物包含層。 | D 7 层 | 黑色泥炭層・粘性・縮まりあり。 |
| N' 层 | | D 8 层 | 絶粒性砂層。 |
| Y-Y' 层 | 難元層
Hr FPFI。 | D 9 层 | 黑色粘土層
As-ss。 |
| Y' 层 | 暗灰黄色シルト・砂層
Hr-FA純層。粘性・縮まりあり。
約10枚の層理に分層できる。 | D 10 层 | 浅灰色粘土層
As-YP。 |

Fig. 40 27トレンチ土層図

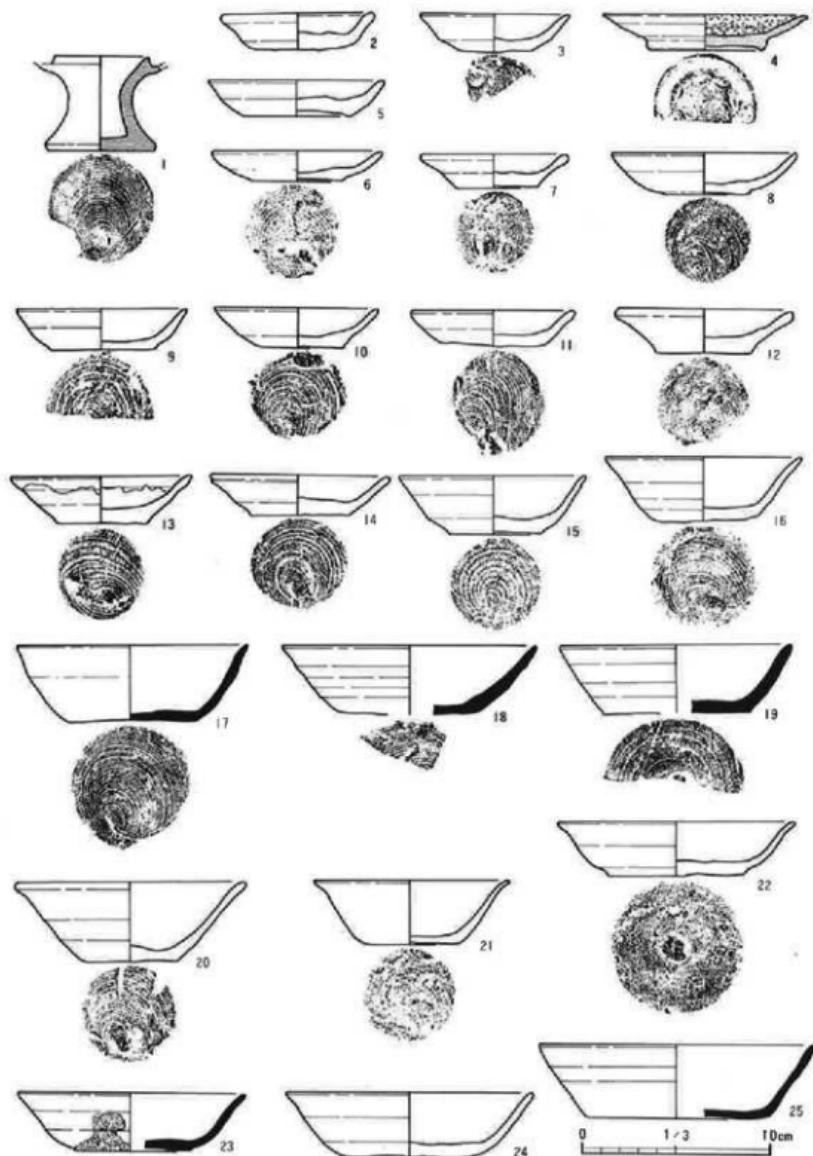


Fig. 41 27トレンチ出土遺物 (1)

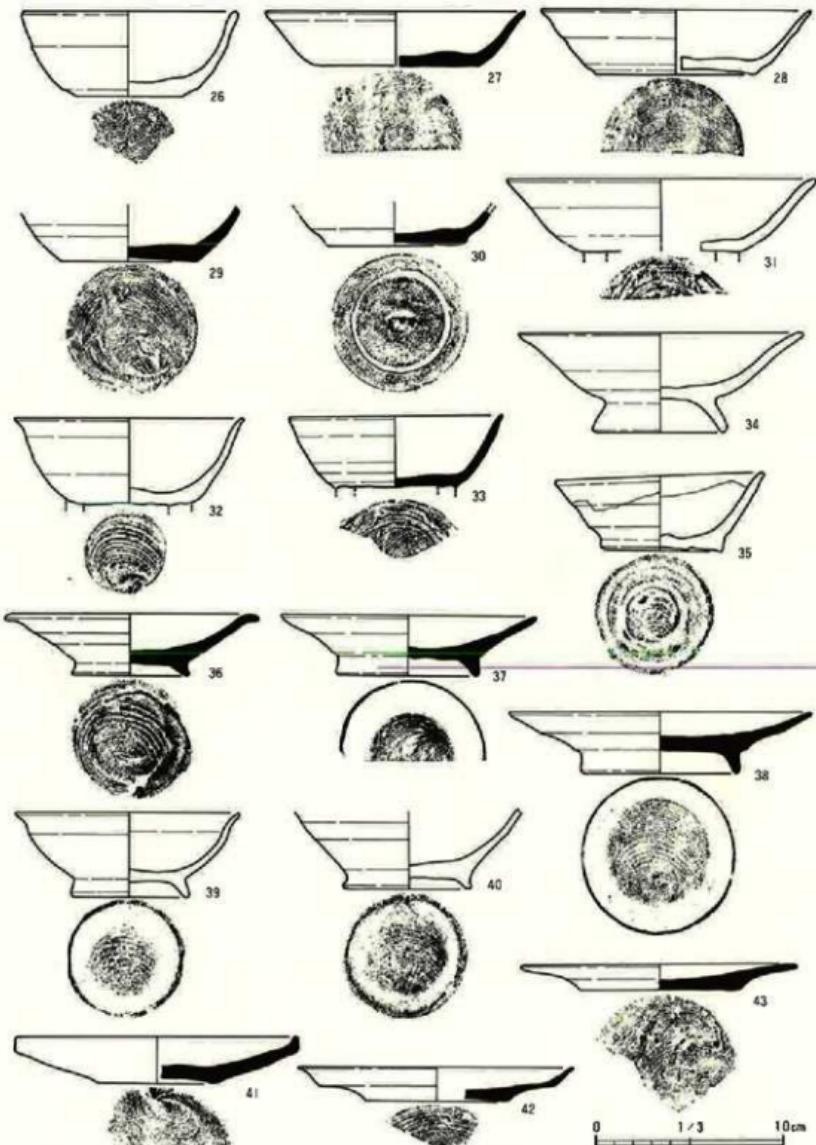


Fig. 42 27トレンチ出土遺物 (2)

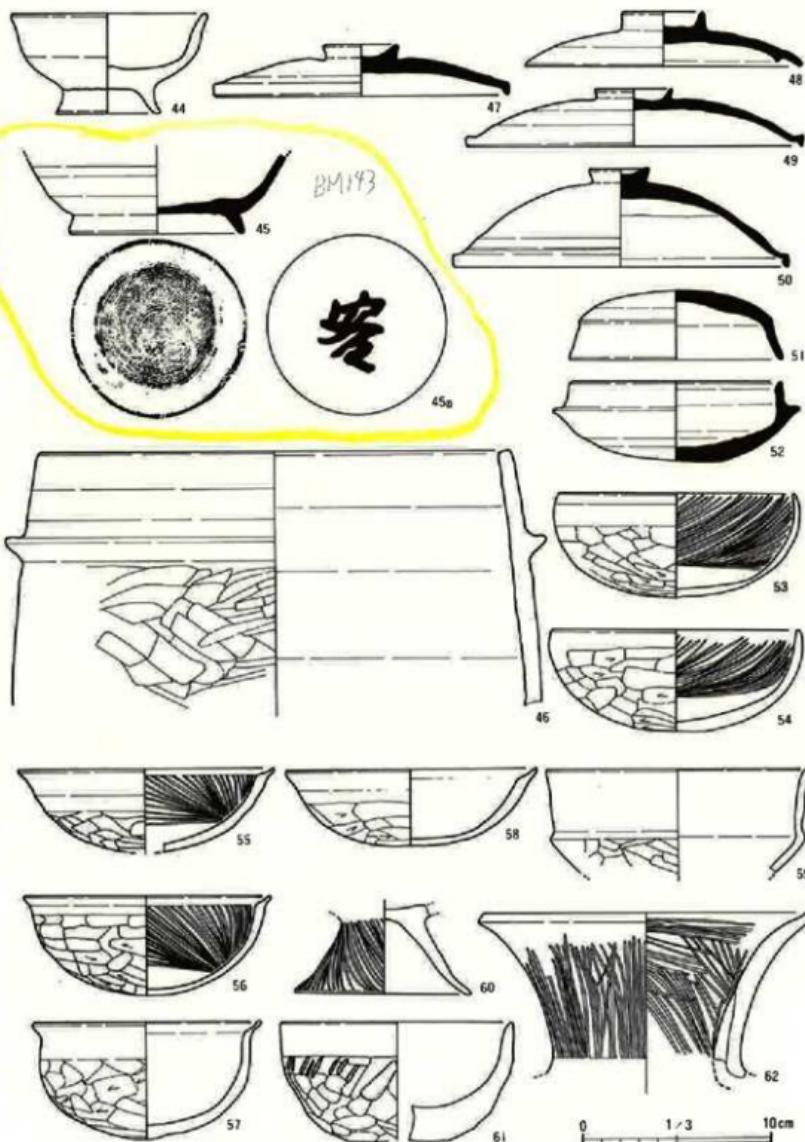


Fig. 43 27トレンチ出土遺物 (3)

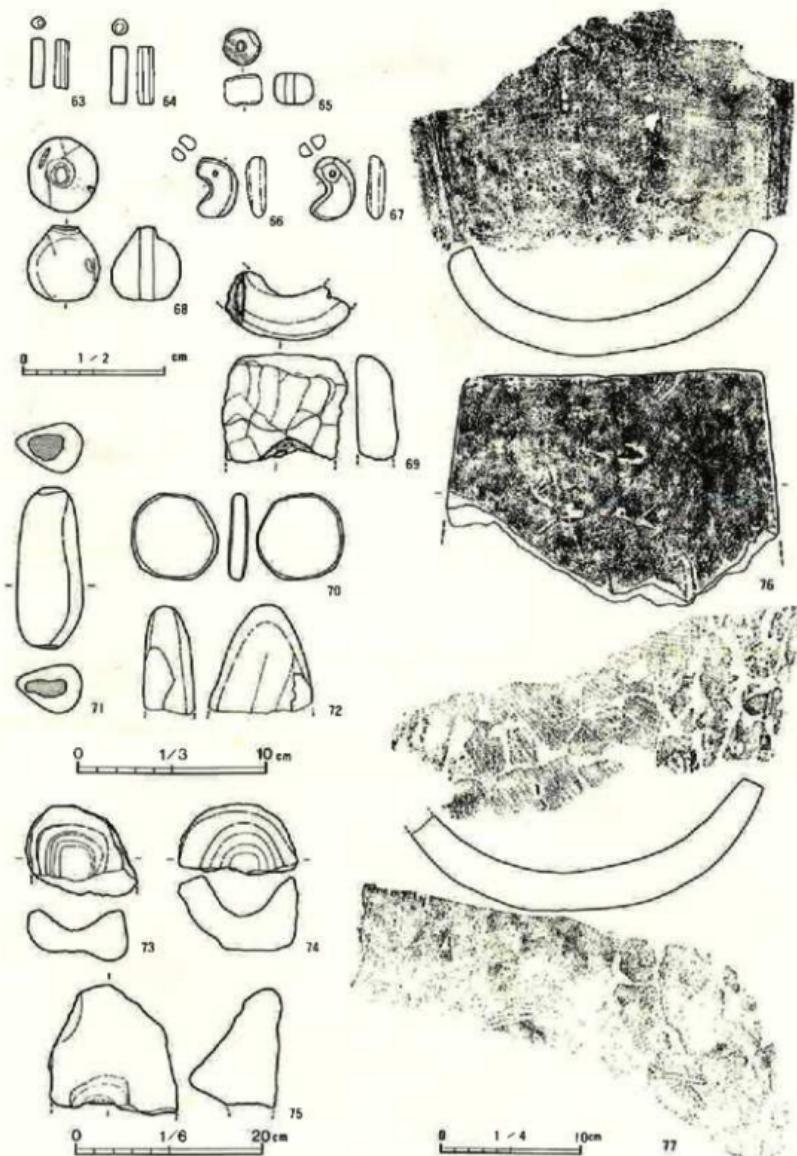
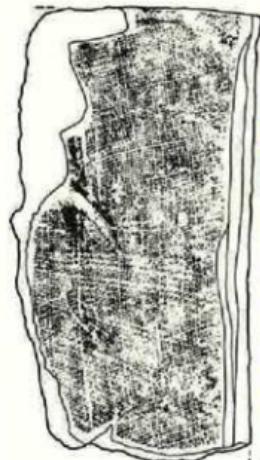
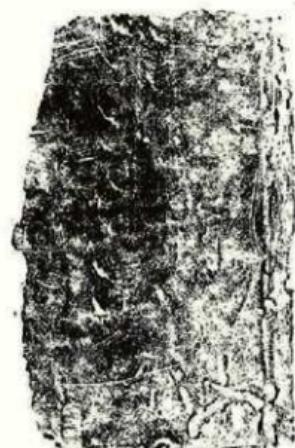


Fig. 44 27トレンチ出土遺物 (4)



0 1 4 10cm

Fig. 45 27トレンチ出土遺物 (5)

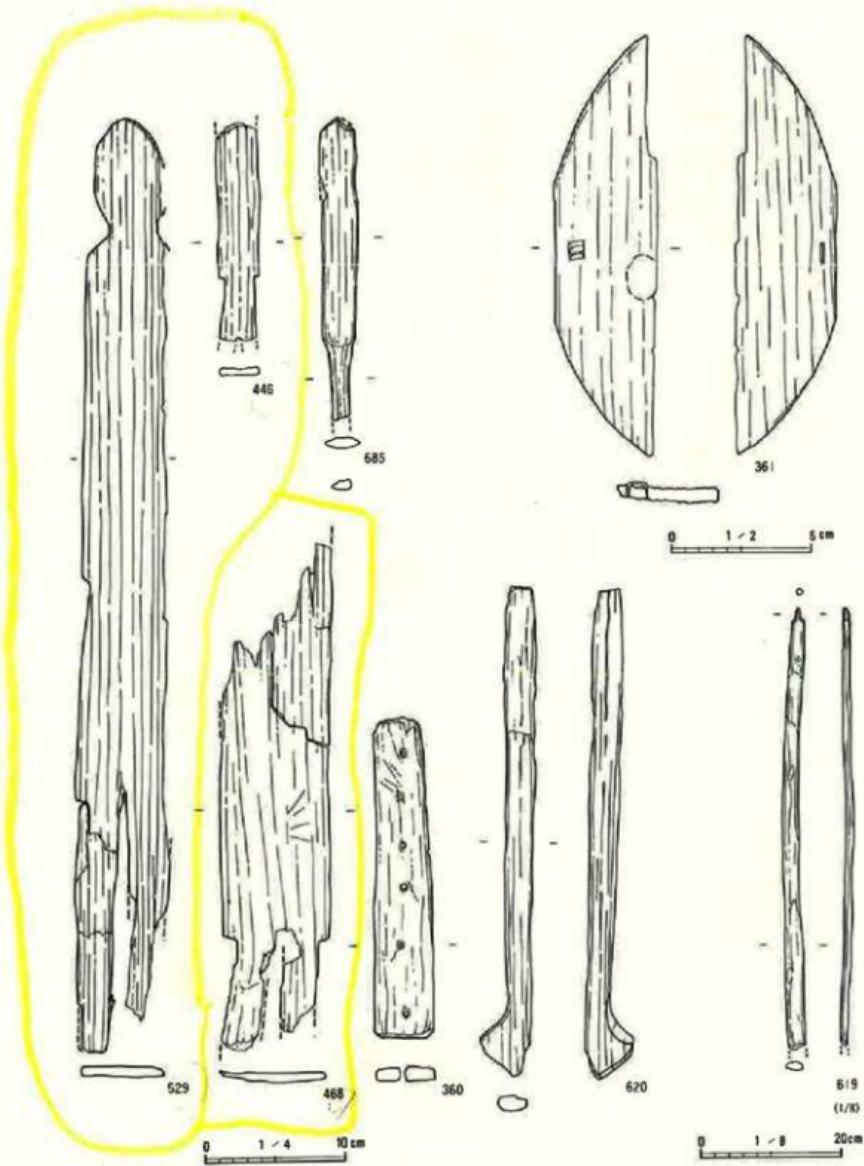
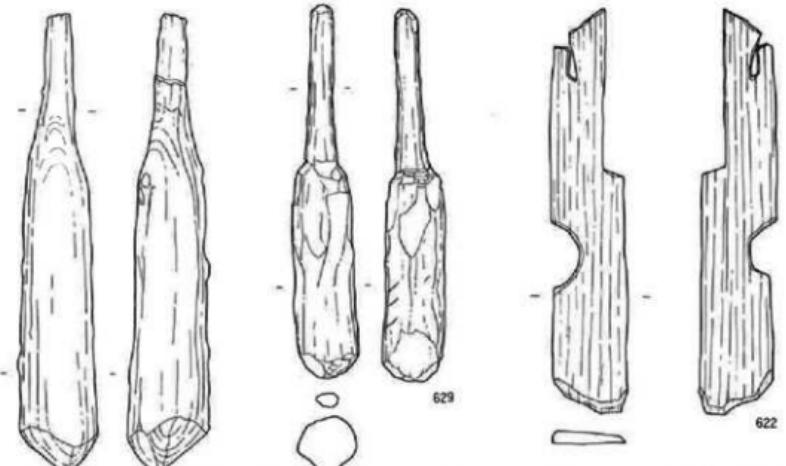
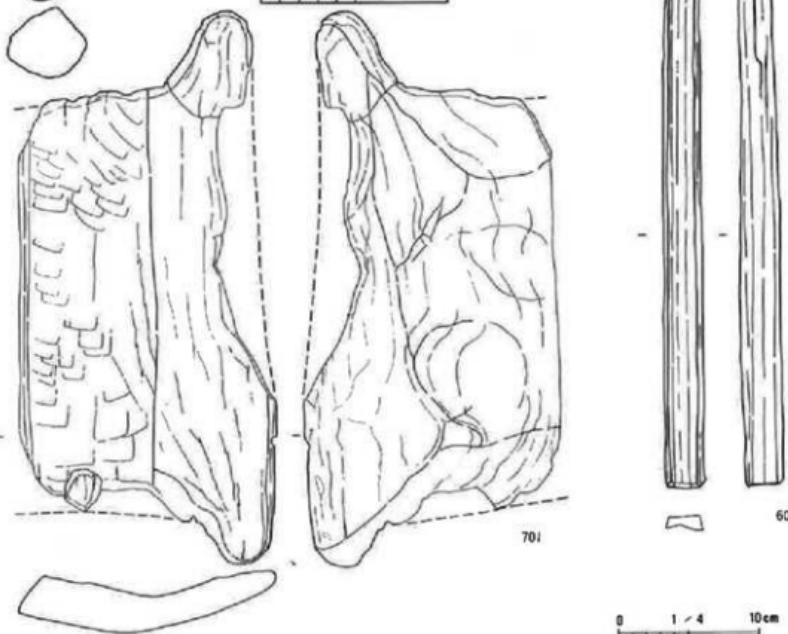


Fig. 46 27トレンチ出土遺物 (6)



570 629 622
0 1/6 20cm



701 607
0 1/4 10cm

Fig. 47 27トレンチ出土遺物 (?)

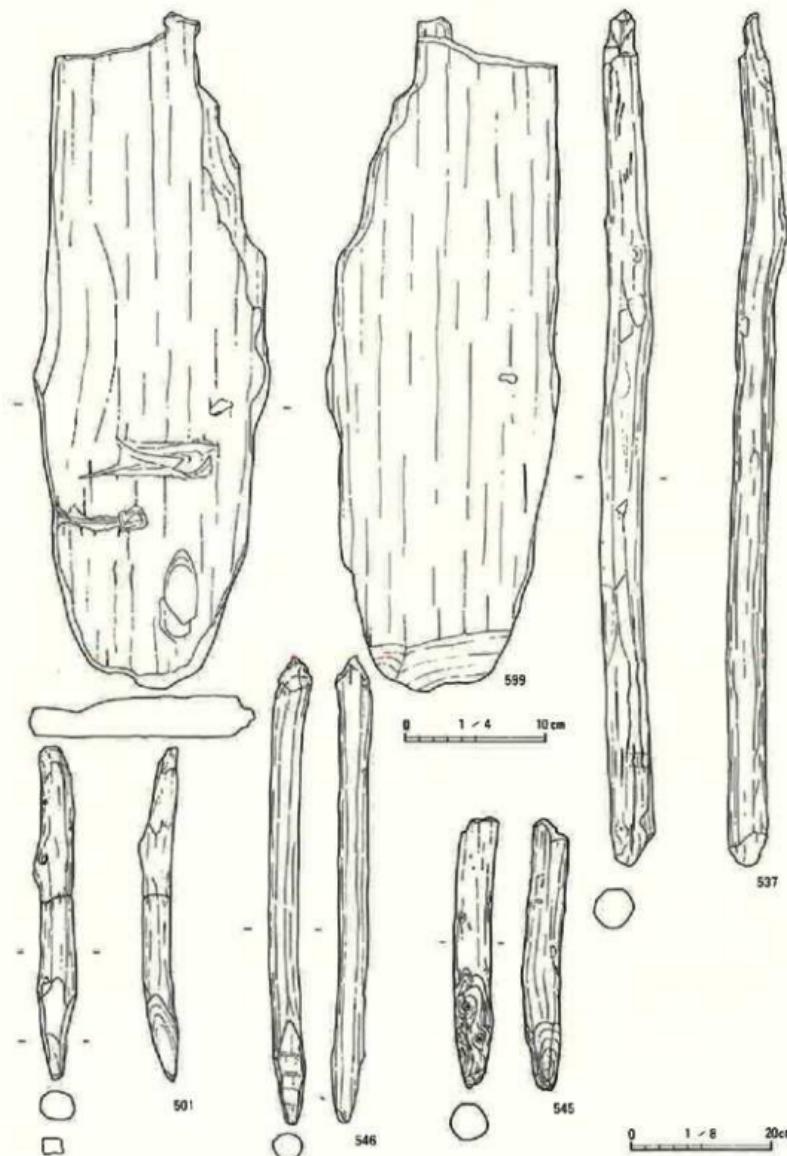


Fig. 48 27トレンチ出土遺物 (8)

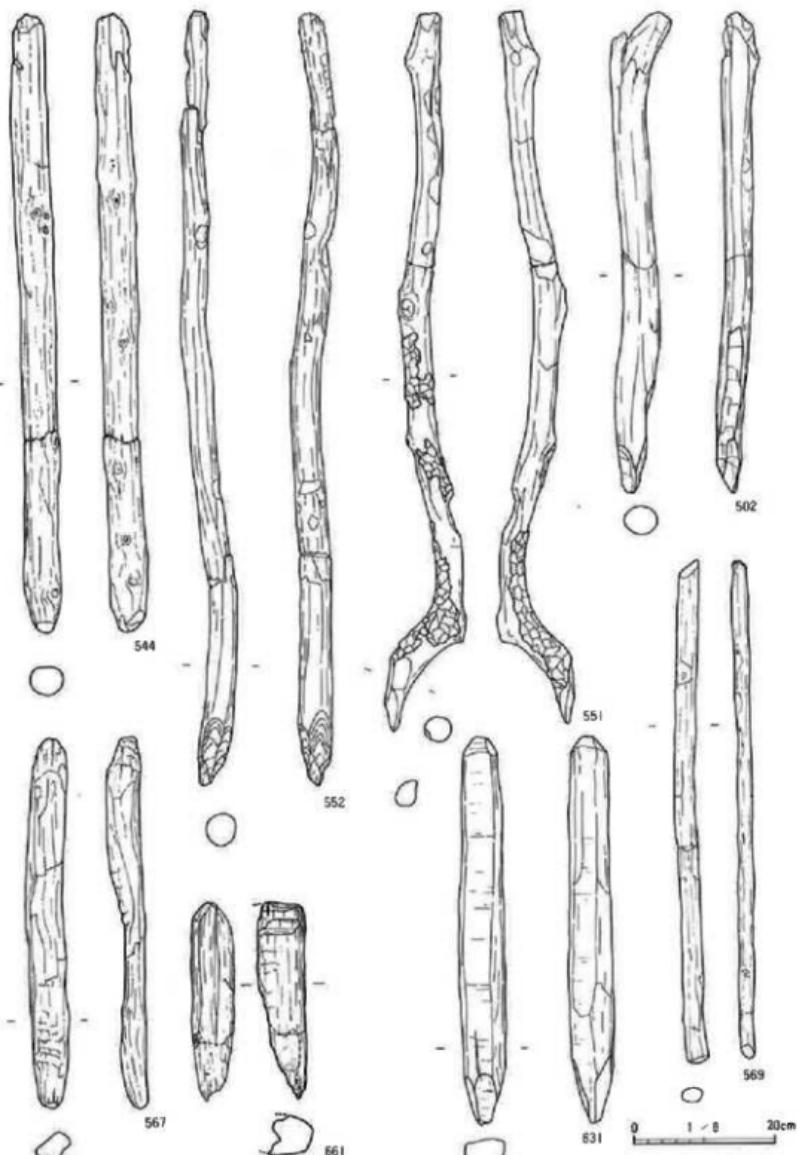


Fig. 49 27トレンチ出土遺物 (9)

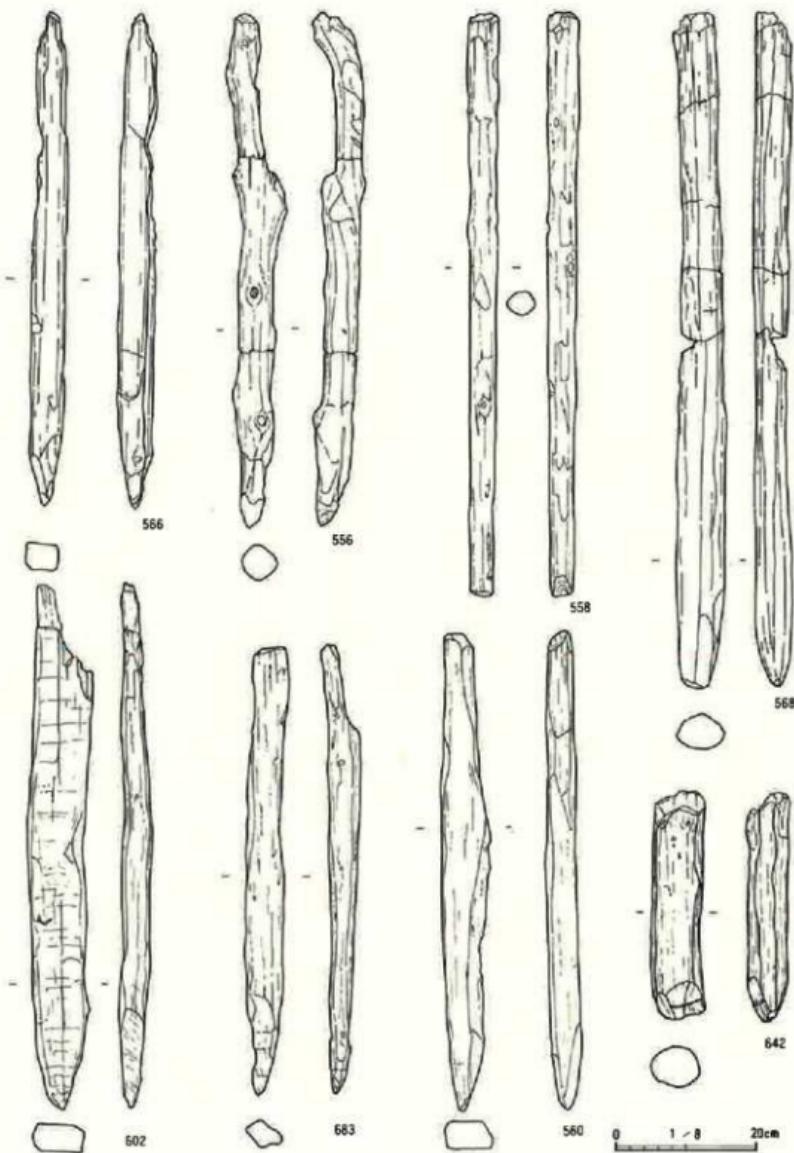


Fig. 50 27トレンチ出土遺物 ⑩

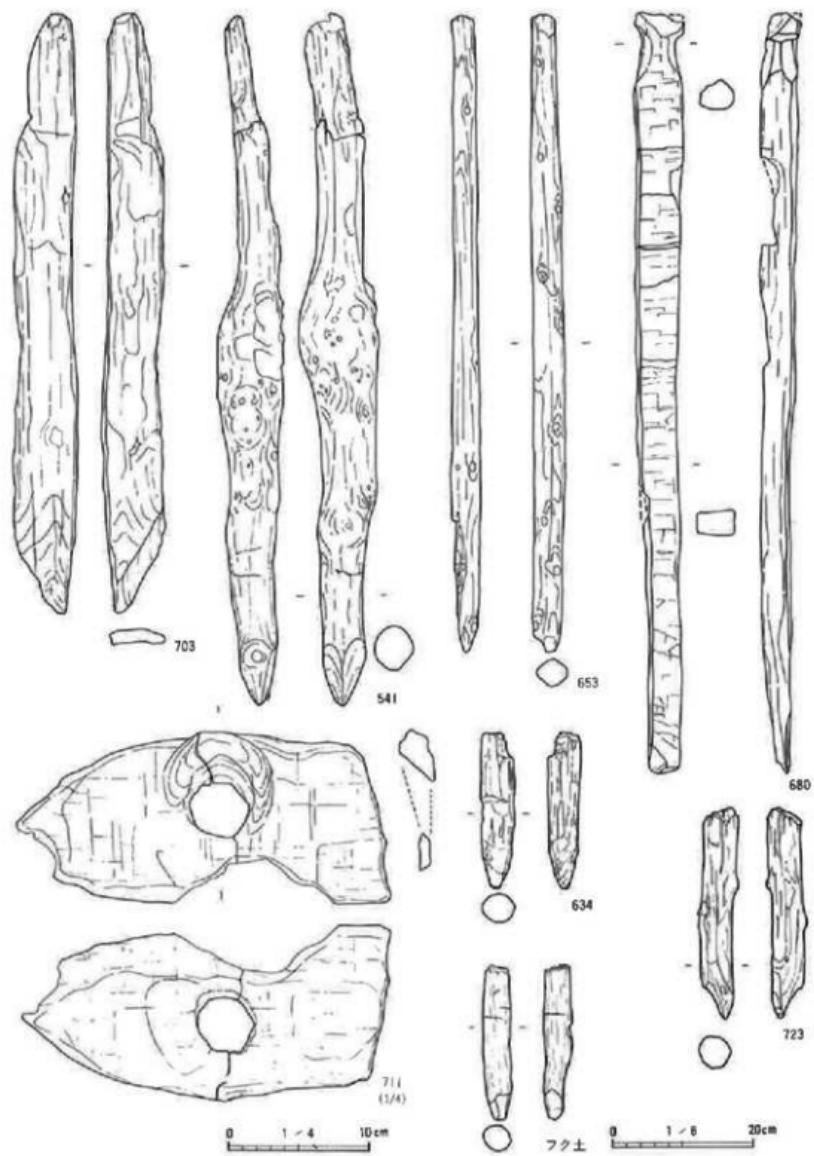


Fig. 51 27トレンチ出土遺物 (II)

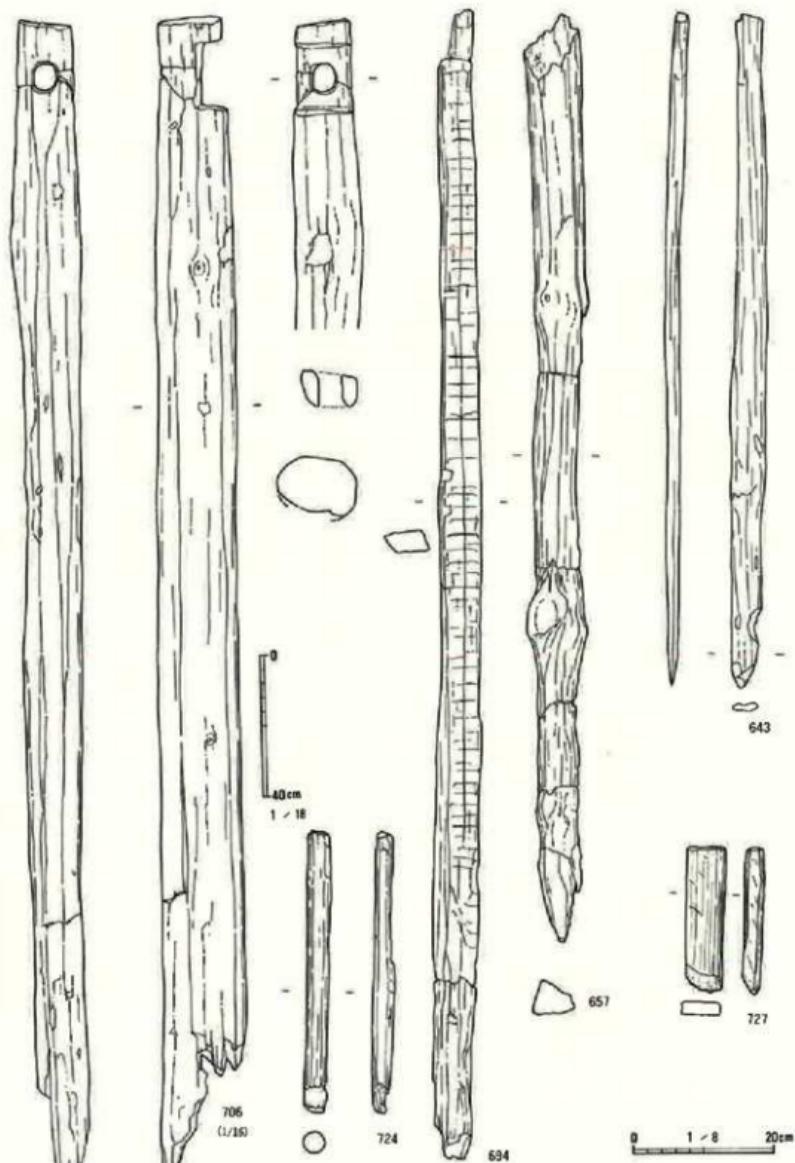


Fig. 52 27トレンチ出土遺物 (2)

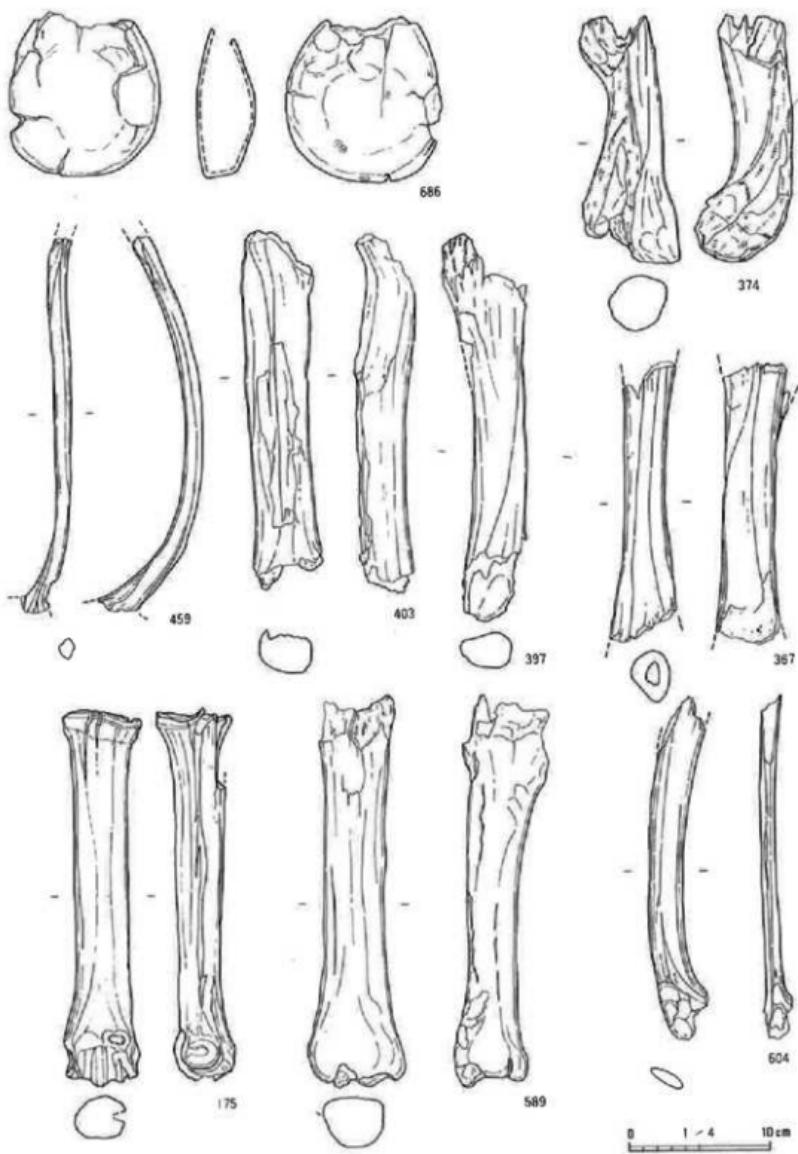


Fig. 53 27トレンチ出土遺物 (3)

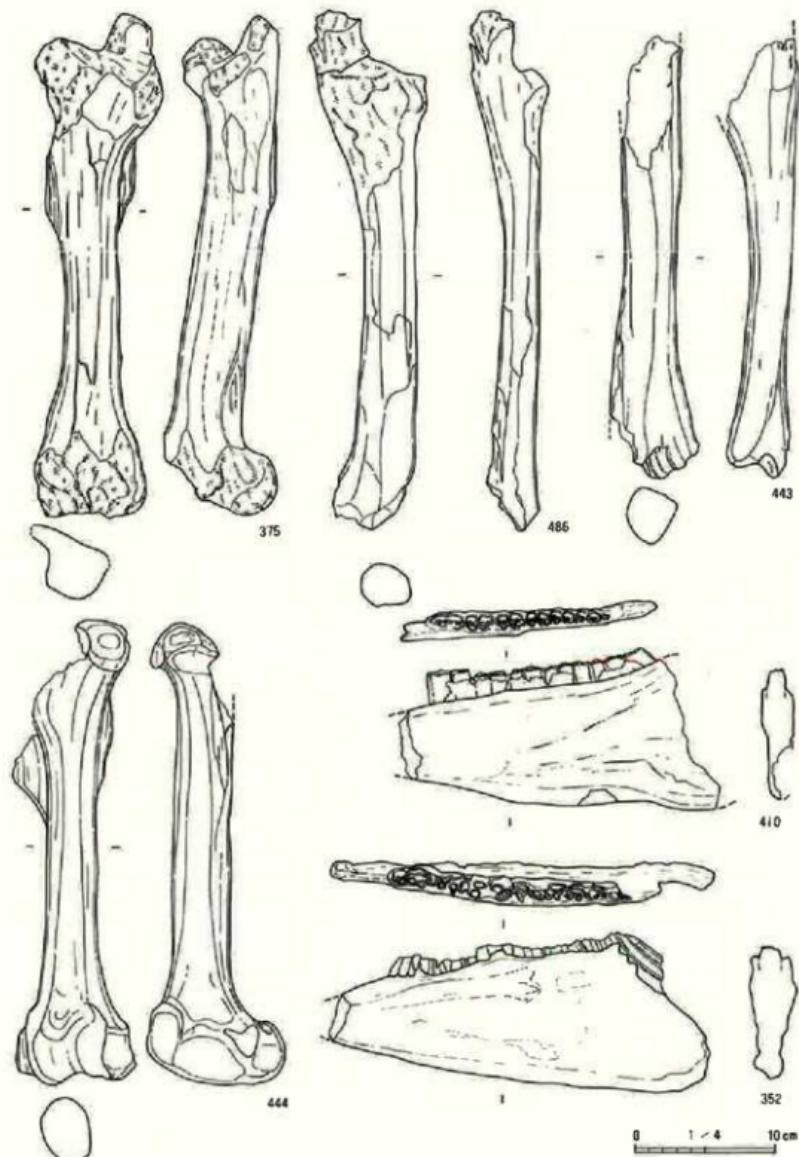


Fig. 54 27トレンチ出土遺物 (16)

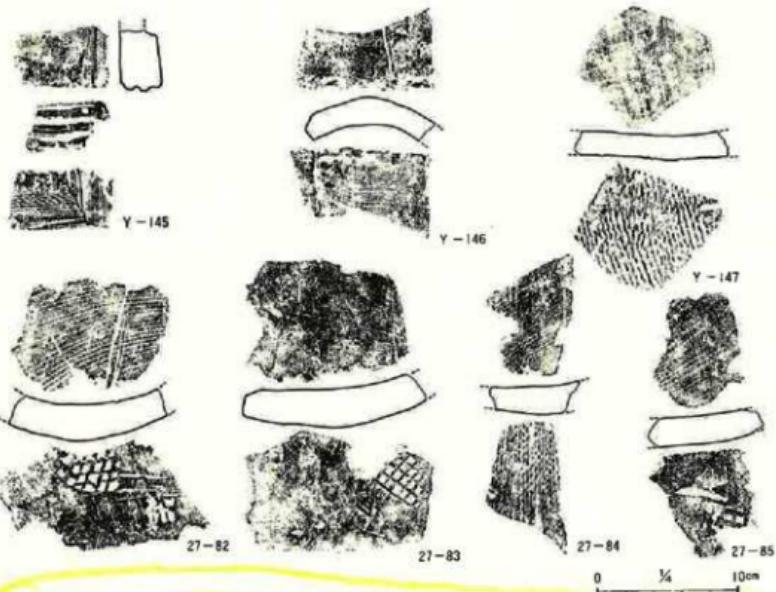


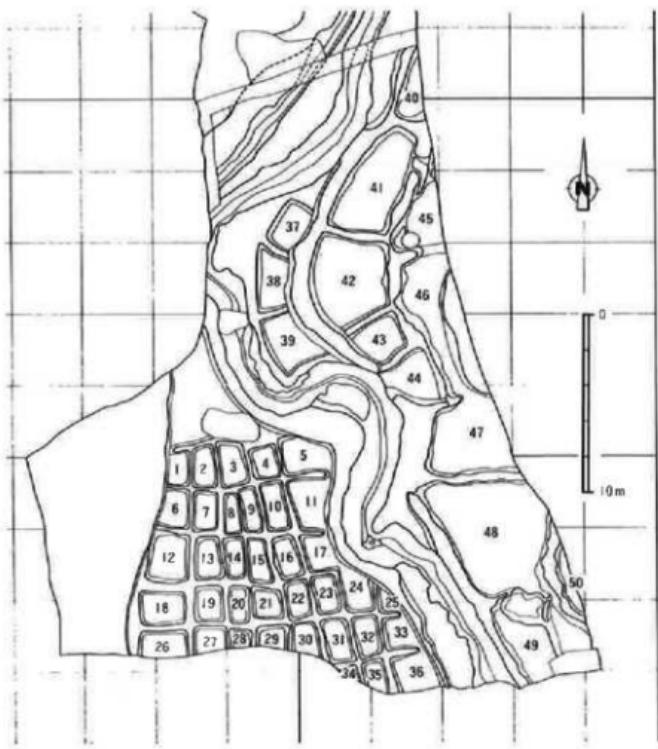
Fig. 55 Y-27トレンチ出土瓦と文字瓦



Fig. 56 白磁・青磁・綠釉

綠釉 256~262

白磁 55~85
青磁 54~57



(単位: cm)

番号	南北	東西	時の場	時高
1	218	(190)	14	0.5
2	250	156	14	2.5
3	272	175	24	4.0
4	210	172	16	0.5
5	(224)	(282)	—	—
6	234	(174)	20	0.5
7	242	168	30	6.5
8	252	111	12	0.0
9	284	129	22	2.5
10	305	150	20	0.5
11	326	(190)	20	—
12	325	255	34	6.0
13	280	177	15	2.5
14	260	148	18	3.5
15	270	130	22	1.5
16	250	162	30	1.5

17	230	(182)	—	—
18	230	310	46	3.0
19	230	290	28	3.5
20	250	140	19	0.5
21	212	185	22	2.5
22	230	141	30	3.0
23	240	160	18	4.0
24	(250)	202	17	3.0
25	(115)	(96)	—	—
26	(160)	330	24	2.5
27	(160)	214	18	4.0
28	(160)	160	22	3.0
29	(162)	154	16	1.5
30	(186)	156	34	2.0
31	267	178	23	0.5
32	250	166	20	—
33	212	(170)	—	—

34	(74)	(280)	20	—
35	182	(158)	40	1.0
36	(218)	(250)	—	—
37	280	(176)	30	—
38	340	(209)	32	—
39	330	(234)	—	—
40	(440)	(105)	52	—
41	685	410	50	—
42	505	530	34	—
43	255	330	45	—
44	380	(800)	—	—
45	(390)	(230)	50	—
46	850	278	45	—
47	460	(470)	58	—
48	698	(600)	30	—
49	(602)	244	—	—
50	(596)	(90)	—	—

Fig. 57 Y-Trench Shallow-FA下水田一観図



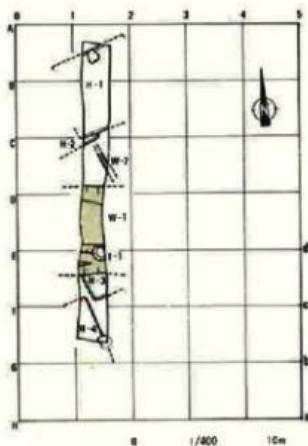
1. 記号調査風景（北から）



2. 同左（北から）



3. 同左（南西から）



61A19 関泉明神北遺跡確認調査

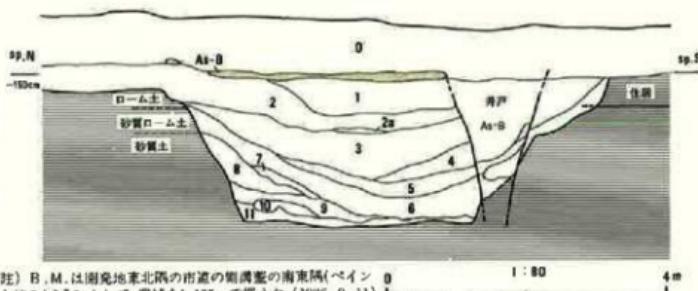
1. 調査の地番・面積 商店市塩町1番地3588-3 314m²
2. 試掘調査の面積 42m²
3. 緯度 緯度61°9月1日確認調査依頼
9月11日確認調査実施
4. 調査方法 陽電子定位に南北2レンチを幅2mで1条設定。バックホーで遺跡所認定まで削削を行い、遺跡の検出に努めた。
5. 調査結果 検出した遺構：大溝1条、小溝…1条。
古墳時代の住居跡…4軒、井戸1基
検出した遺物：上器片…大溝1袋、人骨…若干(大溝腹中)
6. 大溝について 今回発出した大溝は、昭和57年度調査した関泉明神北遺跡大溝の延長部分である。上幅4.4m・下幅3.2m・深さ2.2mで覆土上面にAs-Bの純層を堆積している。また、溝の覆土中から革頭骨(ヒト)が出土した。
※宮崎県埋蔵文化財課鑑定。

凡例：H…住居址、W…報、溝…1・井戸

スクリーントーンは関泉明神跡と接続する大溝

a-dは市道に設置したピンの名称

- | | |
|---------------|------------------|
| 0…耕作土。 | 5…繊維。頭骨や骨片が混じる。 |
| 1…細砂。炭化物5%。 | 6…繊維。 |
| 2…細砂。炭化物5%。 | 7…ロームブロック。 |
| 2a…細砂。炭化物10%。 | 8…ローム・砂質ロームが混じる。 |
| 3…細砂。 | 9…黒色土。 |
| 4…細砂。ローム混じり。 | 10…地山混じりの土。 |



注) B,Mは関免地東北隅の市道の調査の南東隅(ペイント込み)をF0.4として、機械を1.135mで深めた。(1986.9.11)

Fig. 58 関泉明神北遺跡確認調査



1. YトレンチB区全景(南から)



2. YトレンチT-1号空穴状遺構(南から)



3. YトレンチT-3号空穴状遺構(北から)



4. YトレンチD-2号土坑(南から)



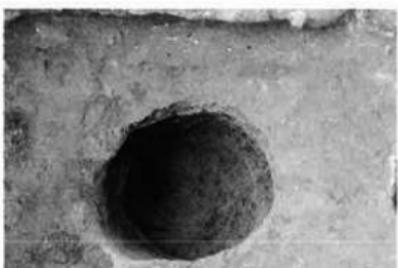
5. YトレンチD-4号土坑(北から)



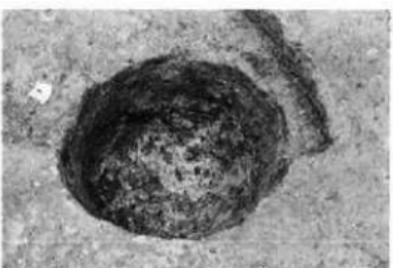
1. YトレンチD-9号土坑(東から)



2. YトレンチD-13号土坑(東から)



3. YトレンチD-14号土坑(南から)



4. YトレンチD-16号土坑(西から)



5. YトレンチD-26号土坑(東から)



6. YトレンチW-1号溝(南から)



7. YトレンチW-2号溝(南から)



8. Yトレンチ背風の後(北から)



1. ヤトレンチ古墳時代の水田址(南から)



2. ヤトレンチ古墳時代の水田址(北西から)



1. Yトレンチ古墳時代の水田跡(北東から)



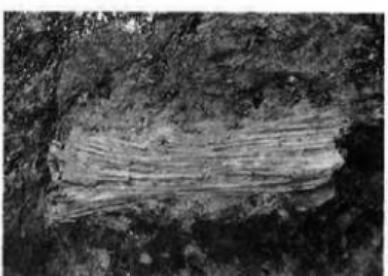
2. YトレンチⅦ層の圧密杭・No149-150(南から)



3. YトレンチⅦ層の杭・No169-172(東から)



4. YトレンチⅧ層の草束・No91(西から)



5. YトレンチⅧ層の草束・No222(北から)



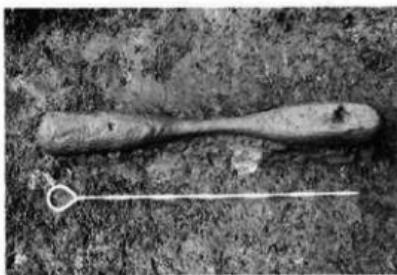
1. ヤトレンチ底層の木製品・No.221(南西から)



2. ヤトレンチ底層の木製品・No.203(南東から)



3. ヤトレンチ底層の堅杵・No.314(東から)



4. ヤトレンチ底層の堅杵・No.306(東から)



5. ヤトレンチ底層のイヌ・No.148(南から)



6. ヤトレンチ底層の堅杵・No.422-423(北から)



7. ヤトレンチ底層の堅杵・No.613(東から)



8. ヤトレンチ底層の遺物・No.251-291(東から)



1. Y トレンチAs-C層底下の面(南から)



2. Y トレンチAs-C層底下の面・北部分(東から)



1. Z トレンチ全景(南東から)



2. W-1 トレンチW-1号溝(東から)



3. W-1 トレンチ全景(南から)



4. W-2 トレンチ平安時代の水田跡(南西から)



5. W-2 トレンチW-2号溝(東から)



1. 27トレンチZ層の人物・No.529(西から)



2. 27トレンチZ層の人物・No.468(南から)



3. 27トレンチZ層の人物・No.529(南西から)



4. 27トレンチD層の人物・No.885(南から)



5. 27トレンチD層の木器・No.446(北東から)



6. 27トレンチD層の木器・No.360(北西から)



7. 27トレンチS層の遺物(南から)



8. 27トレンチS層の土器・No.400(南から)



1. 27トレンチⅡ層のウマ(西から)



2. 27トレンチⅣD層のウマ(東から)



3. 27トレンチHr-PPF1直上面(北東から)



4. 27トレンチⅡ層の木器(南から)



5. 27トレンチⅡ層の木器・No.680(西から)



1. 27トレンチ壁層の堅物・No.629(南西から)



2. 27トレンチ壁層の土器・No.670(南から)



3. 27トレンチ壁層の柱材(南西から)



4. 27トレンチ壁層の柱材(北西から)



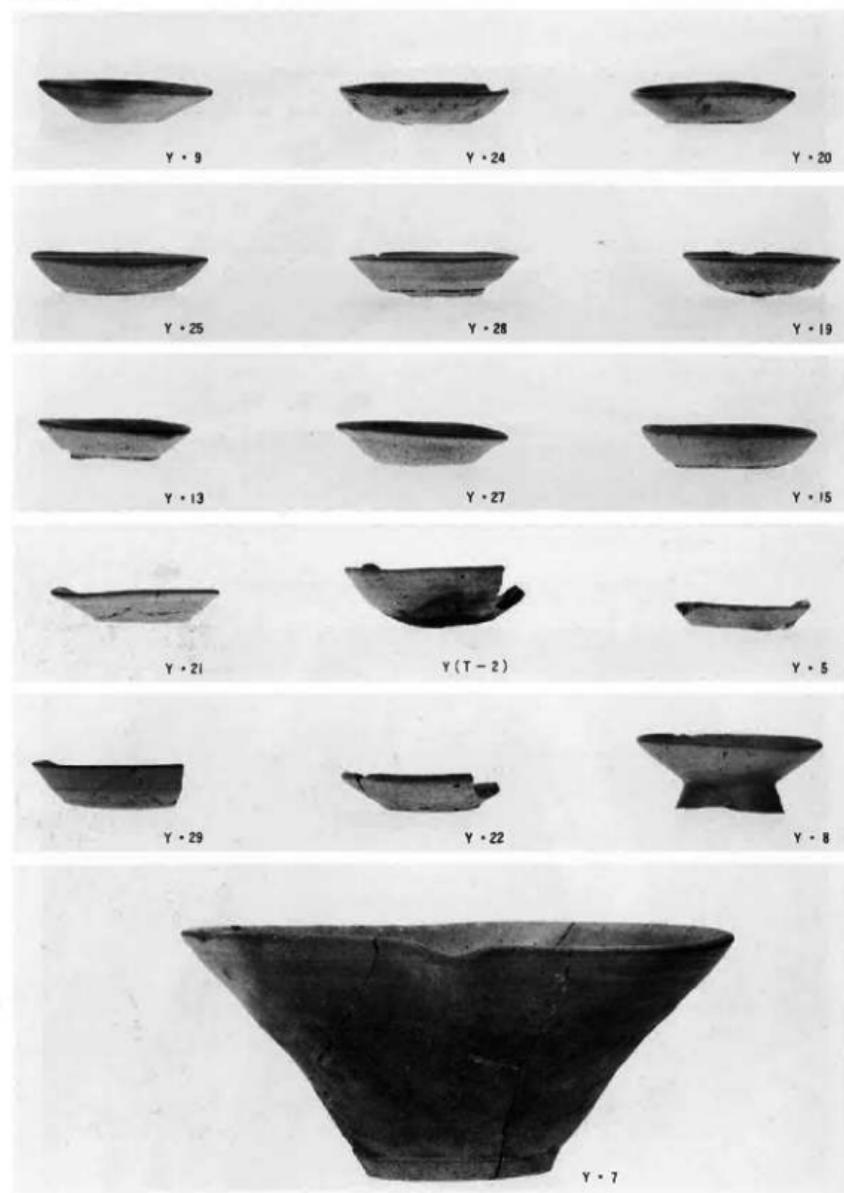
5. 調査を終えて



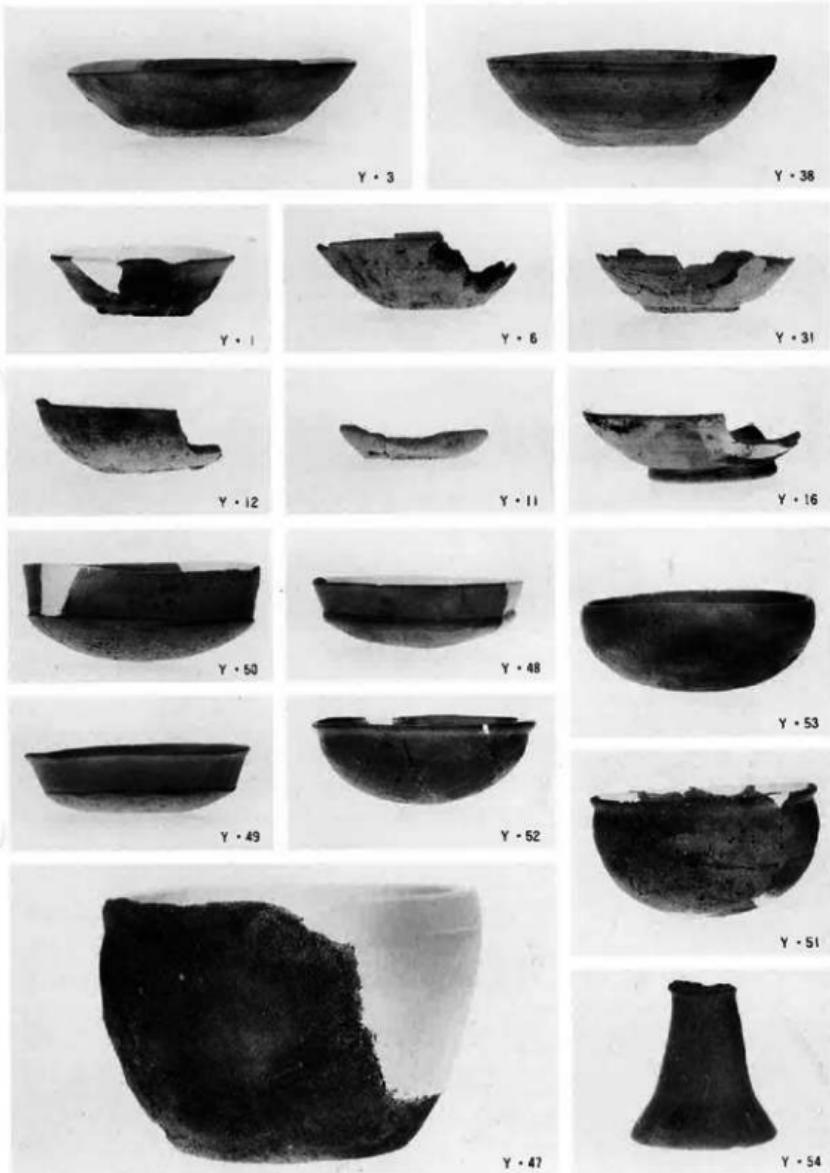
1. 27トレンチ古墳時代の水田址(北東から)



2. 27トレンチ古墳時代の水田址(南西から)



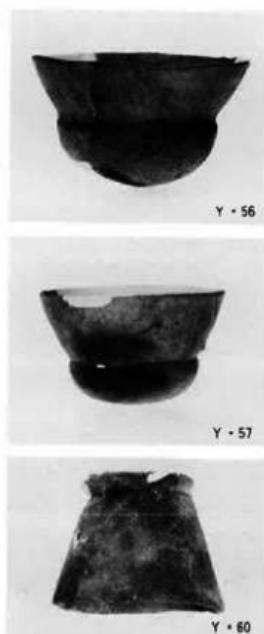
Y トレンチ出土の土器



Y-Trenchi出土の土器



Y・58



Y・56

Y・57

Y・60



Y・2



Y・59



27・10

Y・4

27・6

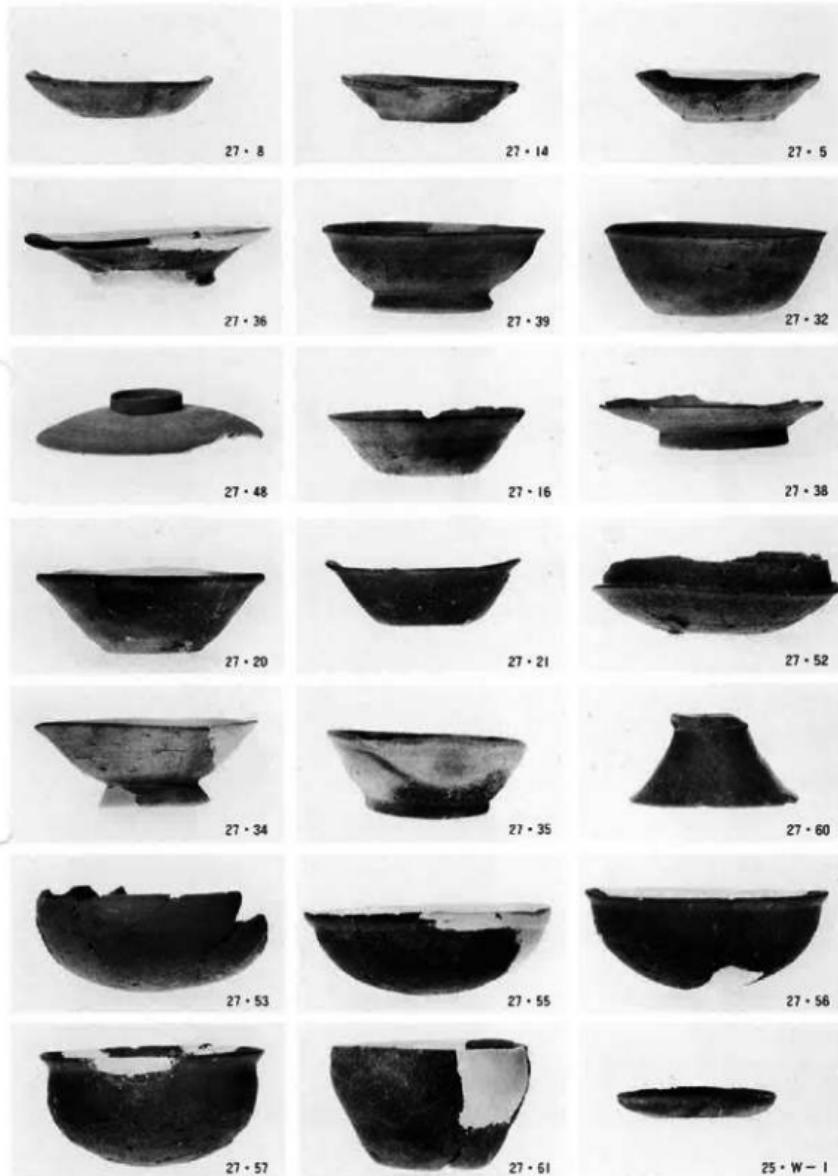


27・11

27・7

27・2

Y・27 トレンチ出土の土器



27トレンチ出土の土器



Y・613



Y・314



Y・190



Y・166



Y・26



Y・74



Y・305



Y・231

Yトレンチ出土の木器



Y・99



Y・306



Y・50



Y・423



Y・153



Y・177



Y・218



Y・104



Y・120



Y・304

Yトレンチ出土の木器



Y-141



Y-420



Y-438



Y-132



Y-508



Y-130



Y-421



Y-421

Yトレンチ出土の木器



Y-126



Y-203



Y-352



Y-76



Y-588



Y-169

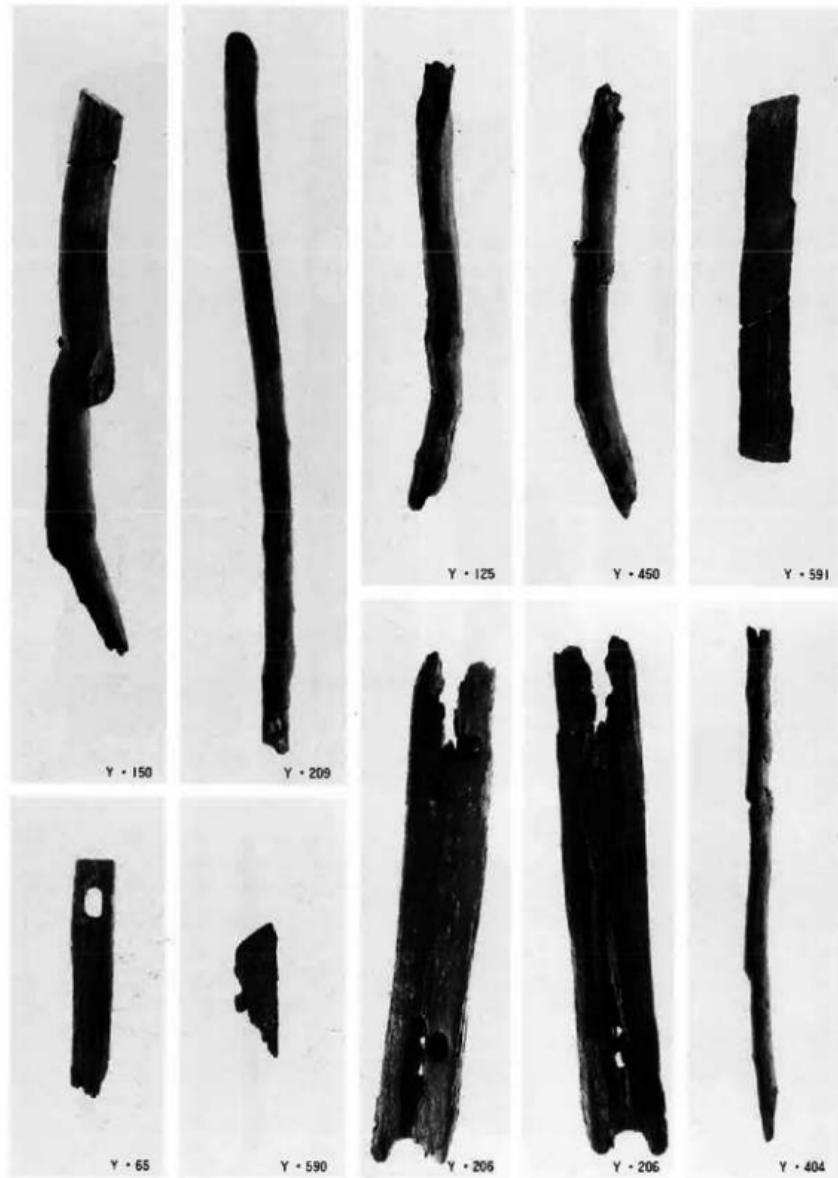


Y-655



Y-152

Yトレンチ出土の木器



Y トレンチ出土の木器



Y・554



Y・196



Y・149



Y・234



Y・234



Y・221



Y・221

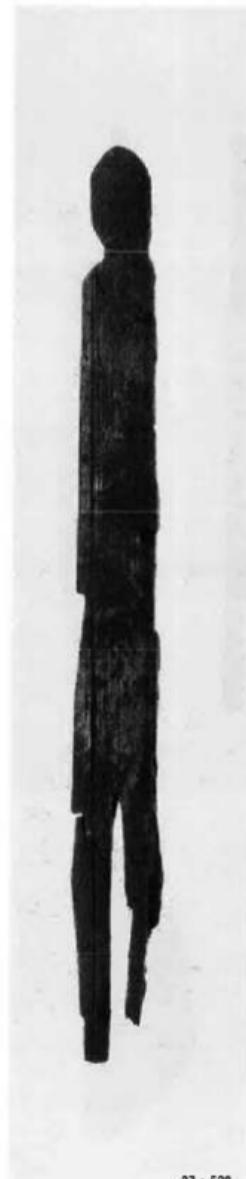


Y・522



Y・168

Y トレンチ出土の木器



27・529



27・468



27・468



27・36



27・629



27・685



27・629



27・620



27・620

27トレンチ出土の木器



27・566



27・566



27・570



27・570



27・501



27・711



27・501

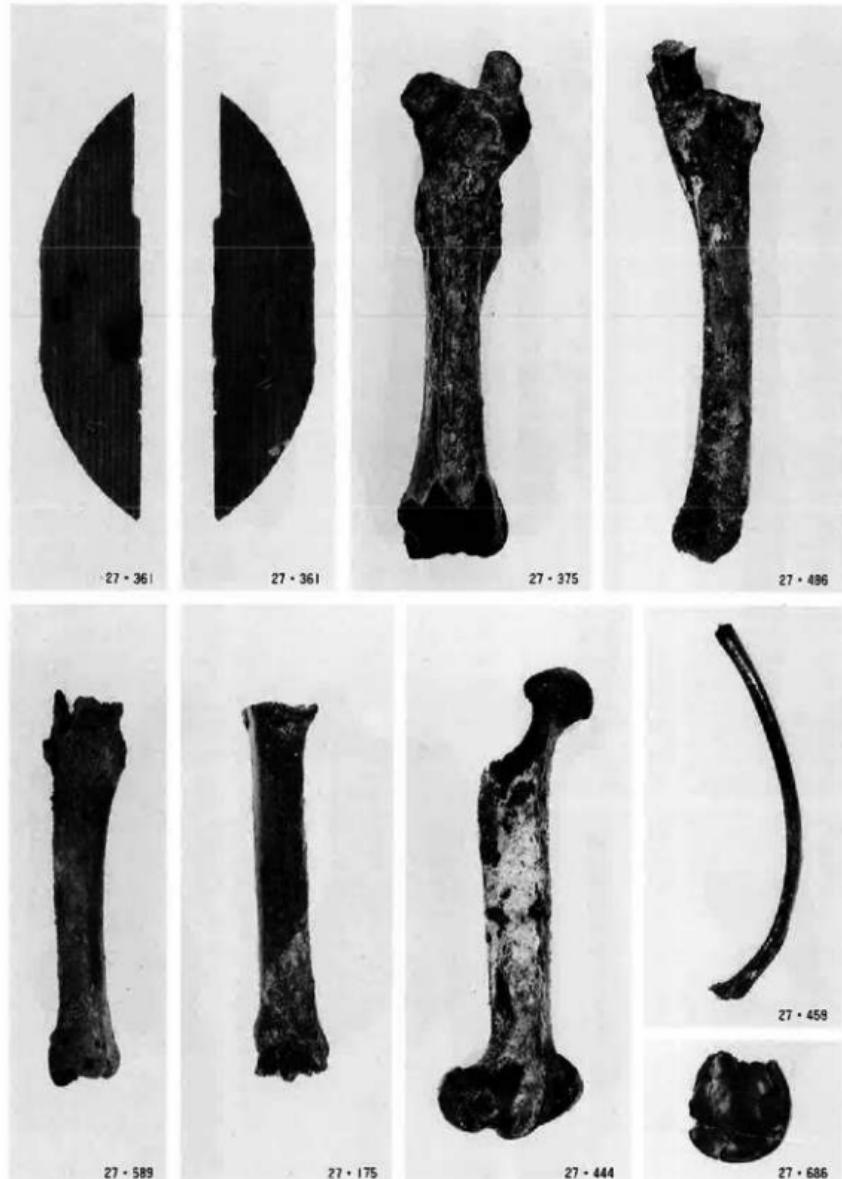


27・701



27・701

27トレンチ出土の木器



27トレンチ出土の木器・歯骨

調査要項

遺跡名称	元總社 明神遺跡									
遺跡記号	I A41									
遺跡所在地	群馬県前橋市元總社町2,067-2ほか									
調査期間	平成元年4月28日～平成元年12月27日									
調査面積	調査面積：2,610m ² 試掘対象面積：4,307m ²									
	Yトレンチ	1,270m ²	Zトレンチ	740m ²	25トレンチ	250m ²	26トレンチ	100m ²	27トレンチ	210m ²
開発面積	275,000m ²									
調査原因	土地区画整理事業									
調査依頼者	前橋市都市計画事業元總社（西部第三明神）地区土地区画整理事業									
施工者	前橋市 代表者 前橋市長 駒崎清多									
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 二藤益一									
事務局	事務局長 福田紀雄 事務局次長 沢田博一 財政係員 内山治郎 開拓吉晴 松本 卓 出務担当 阿藤孝子 須田みづほ									
調査担当者	前原 豊	井上 敏夫	石井 昭	石田 洋子	岩木 樹	大崎 葉月	大田 一郎	大塚 みつゑ	大塚美智子	
調査参加者	河西 三明	金井 ちとゑ	菊地 愚之助	岸 フクエ	小林 五寿	小熊 智起	下山 幸子	近藤 充郎	鈴木 保男	
	近藤 俊男	駒形 邦子	駒形 とし子	佐藤 忠重	柴崎 まさき	下山 幸子	渡木 秋子	戸丸 澄江	宮原 麻古	
	須田シゲル	須藤 恒雄	住谷 文彦	千明香穂子	塙田 幸延	鶴川 千恵子	湖口 政雄			
	富澤 浩八	岸澤 政雄	廣樋 長吉	藤田 光大	鶴川 千恵子					
	湯浅 ま江	湯浅 道子								
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課 御前橋市埋蔵文化財調査事業団 土地区画整理事業 飯島 静男 板橋 春夫 大西 雅広 女深 和志雄 虎沼 采輔 加藤 二生 木暮 威 小島 敦子 小島 純一 古平 伝雄 近藤 露難 佐藤 宗吾 下城 正 杉山 真二 早田 勉 大工原 豊 東野 寛之 外山 政子 中野 覚 中山 茂樹 能登 健 中 隆之 原田 和博 前原 顯子 前沢 和之 松田 猛 松本 保 松村 和男 宮崎 重雄 若狭 敏 細貝 錠子									
	有限会社古環境研究所 シン航空写真株式会社 株式会社河合 たつみ写真スタジオ パリノ・サーヴェイ株式会社									

元総社明神遺跡 VIII

平成2年3月20日 印 刷
平成2年3月30日 発 行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664-4
TEL 0272-31-9631

印 刷 朝日印刷工業株式会社

